

愛を見つめる雑誌

SUN & MOON



●SM座談会●
秘悦に耽ける妻の立場・夫の立場

●マゾ自伝／西原好子
女奴隷好子

第2号

●悦楽交遊録／鈴木広一

SMPかSMGか

●随筆 関峰夫

貞操帯に魅せられて

SUN & MOON 2

強烈緊縛フォト！逆吊り剃女蠟燭責め

昭和55年6月1日発行
発行所 世田介一

発行所 世田介一

発行所 日月舎

東京都港区三軒茶屋1-1-1
電話 03-343-1111

好評絶賛発売中!!

本格SM誌『SUN & MOON』誌が
贈るマニアによる別冊グラフ誌!!



『SUN & MOON』別冊グラフ誌!!
《マゾ牝虐艶集》
発売元・エドプロダクツ
限定三千部・定価千五百円



代理妻 佐野みさ子の被虐の痴態を暴く!!

限定3000部・定価1,200円

●各種S・M・F皮革衣裳・下着・責具・拘束具 600種展示販売

飼育・調教の

奴隷市場

本格的皮革S・M・F専門店

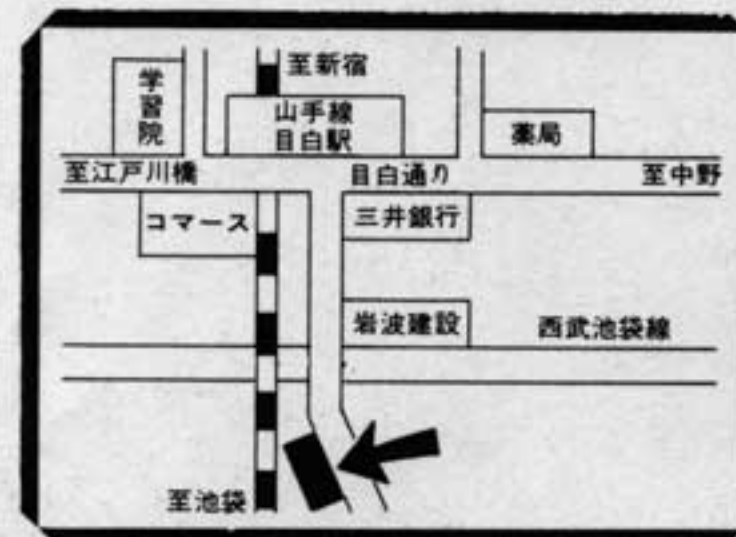
〈オーダー・メイド承ります〉

奴隷市場オリジナル 皮革具総合カタログ¥1,000(切手可)

御案内

- S・M初歩の方には当方でプレーの指導等も致しますのでお気軽にご相談下さい。
- 男性・女性・御夫婦の奴隷飼育・調教も致します。
- 個人又は複数でプレー写真の撮影を御希望の方は、当方専属のカメラマンが撮影のお手伝いを致します。
- 個人及びグループでプレールーム設置をお考えになっておられる方は、設計・施工も致しておりますので、お問合わせください。

—奴隷市場— 代表 堀井 —



〒171 東京都豊島区西池袋2-24-5

水明ビル2F1号

TEL 03 (986) 7859

営業時間 PM 3:00~PM 10:00 (日曜休み)

月刊 SUN & MOON誌優先販売中
(御来店御購読の方に特写フォト進呈いたします。)

購読のご案内

■本誌購読料

希望号数を明示の上
定価千二百円 送料百円を
添えてお申し込み下さい。

■別冊購読料

希望号数、タイトルを明示
の上、定価千二百円を添え
てお申し込み下さい。
(送料は当社負担)
現金の場合は必ず書留で

■注文先

〒101 東京都千代田区神田
猿樂町二丁目四十二番黒ビル

エド・プロダクツ
電話 〇三・一九二・八七八一

■投書・通信先

右記のエド・プロダクツ
もしくは、

日月舎(世田介一)

〒167 東京都杉並区大沼三
二丁目一三

既刊案内

『SUN & MOON』第二号

■座談会「唯美人種のくらしぶり」

■カメラハント「一枝に残った熟柿」

【グラビア】

●妊孕美

●女奴隷

●若妻M化馴致

●脾悦逆さ吊り行

●拘束衣の縄人形



【告白】

●妻との過去

●義姉とのS

M二年

●柱とわたし

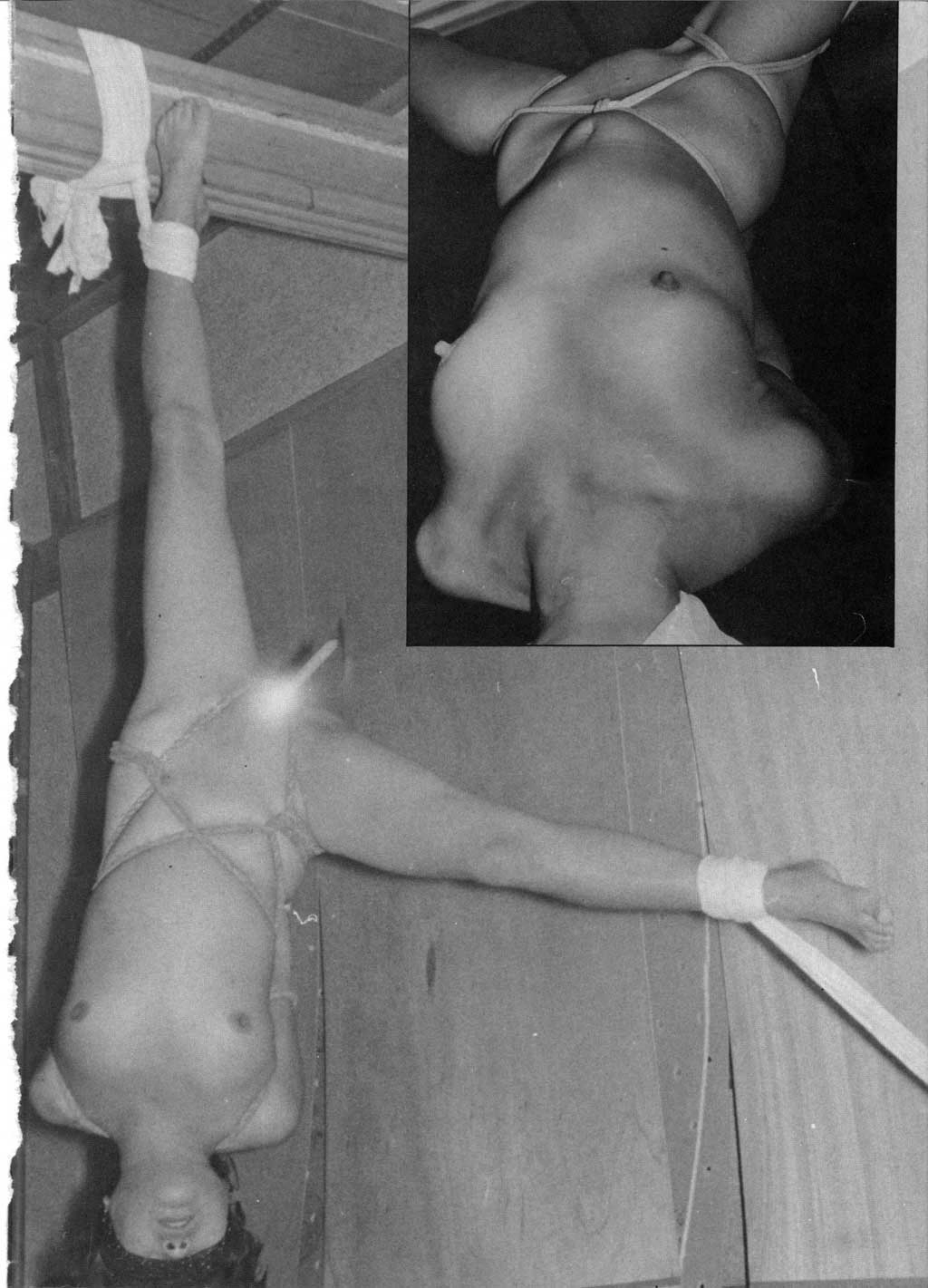
●マゾ女性の

傾斜

その他

フ巻頭
オト 剃女逆吊り蠟燭責め









座談会——実践派交歓録

「秘悦に耽ける妻の立場・夫の立場」

8

悦楽交遊記——前編

エスエムプレイ
SMPからSMGか？

鈴木広一 91

カメラレポート——「続・好事三昧」

「灼熱の間に熱風が渦巻いた」 葛西六郎 30

リレー・カメラハント「続・若妻M化馴致」

「深夜の特撮依頼」

六本木 薫 105

グラビア

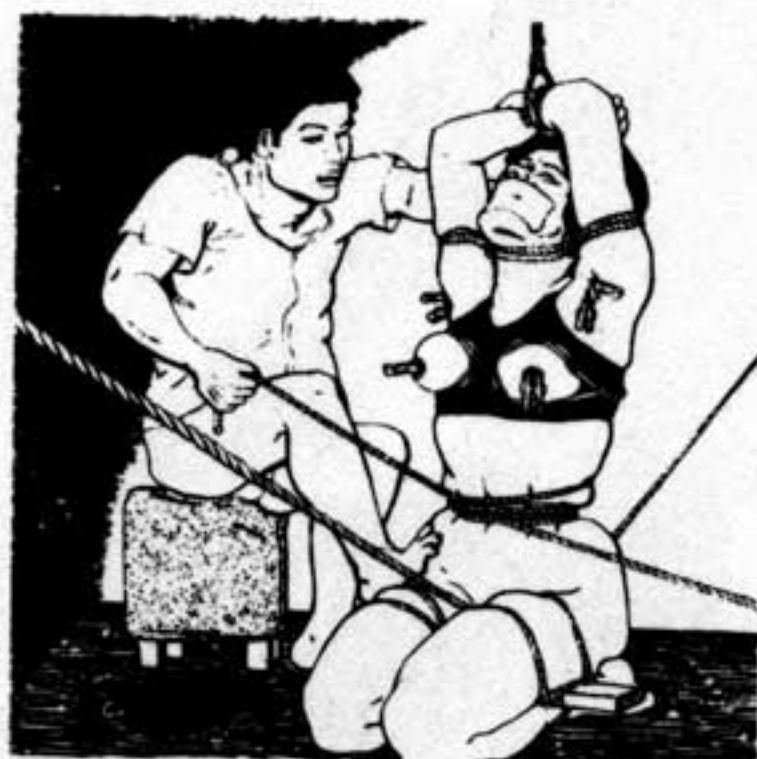
肌絵羞恥責め 55

若妻M化馴致 58

六本木 薫

馴致依頼 62

嬉悦のひととき 64



嬉悦のひととき

PART(II) 66

妊婦緊縛

中宮さかえ 68

逆吊り剃女蠟燭責め

3

【告白の手記】

マゾ女自伝

女奴隷・好子

西原好子 97

貞操帯に魅せられて

瀬川利雄 43

いわく因縁

高杉 啓 79

妻の過去を喜ぶ夫

長谷忠夫 28

「スパークする愉しみ(II)」

岡 淳 74

SMプレイ雑感

関 峰夫 51

初めてのSM写真

大岡光生 40

竹責めのイマージュ

多貫 欣 85

耽美座談会

巻頭対談シリーズ2

秘悦に耽ける 妻の立場・夫の立場

秘毛を自からの手で剃
り落す奴隷妻の秘悦

今回の座談会も司会者（世田）が個人的に交際する御夫妻をわずらわしご出席願った。創刊号がまだ出来上っておらず、趣旨を伝え説得するのに骨折ったが、ともかくも毎号掲載していく企画だけに格別な配慮を乞うた次第。

また、新しい試みとして、二組のご夫婦を、妻と妻、夫と夫と分けて、顔を揃えていると話にくい事柄まで喋っていただこうと策謀したが、その狙いは成功したように思われる。

司会 真昼間のこんな時刻（午後一時）にお集りいただいて恐縮しています。しかも大方「夜のムード」で楽しんでおられるような事柄についてお話していただこうと思うので、ちぐはぐな感じが致しますが、何分ともよろしくお願い致します。

少しややっこしいことなのでお断りしご説明しておきますが、異常性愛・倒錯の愉悦と

いわれる「愛情表現」を好まれるご夫妻をお招きして、女の立場と男の立場からご発言いただこうと思ひましてそれぞれ時刻をずらしでお集り願ったのです。いわば変則座談ですが、お連れ合いの顔を見ていると遠慮していただきたいことがありながらいえず仕舞いになるのを防いで、大いに虚心胆懷になってお話しただこうと考えたわけですから、どうかそのおつもりでお相手いただきたいと思ひます。

私はお二人とは交互に存じ上げておりますが、お二人は今日まで見ず知らずの他人同士の間柄でした。なにかと気詰りもおありでしょうが、ご辛抱いただき頼の強張りをゆるめていただいて、奥様同士のお喋りも傾聴させていだきたいものです。始めはやんわりとお訊ねして参りますが、なるべくご本心をおあかし下さい。

(両夫人とも含笑いをするだけで、口を開くところまで気分がほぐれていない。思ひきつて質疑応答形式をとる――)

司会 お二人についてはそれぞれ私には予備知識がありますし、御紹介もできるのですが、それも元はといえば御主人の主観。多分に「女房自慢」がかくされていると思われまふ。Aさんは御自分がなんと呼ばれているか御存知

ですか。

A (首をすくめて、小声で) 私には愛奴、外では「奴隷妻」ではないでしょうか。

司会 Bさんは？

B 「マゾ牝」でしょう。

司会 それぞれ、夫君の嗜虐の夢がこめられているわけですね。普段でもそう呼ばれているのですか？ (両夫人とも否定) それじゃあ、プレイに入ると態度が豹変して、「さあ、始めるぞ、覚悟しろ」となるのですか。

B メンスの期間です。私のこと「マゾ牝」と偉そうにいうのは……。(笑)

司会 メンスと「牝」と関係づけているわけですか。

B (口ごもった後) ……不気味なんでしょうね。……経血が。

司会 女であるなによりの証拠なのに……健康なしるしでもあるわけですが。

B 自然セックスから遠のきますでしょう。それが癪なのか、その時になるときまって縄をとり出してくるのです。

司会 御主人はメンスで非常に「女」を感じるわけですね。Aさんは「用意しておけ」といわれるそうですが、その「用意」を具体的にお聞きかせ下さい。

A 四年のお付き合いで、かくしだてしても始まらないことですよものねえ……。 (笑)

司会 貴女の体験談がSMプレイに戸惑いがちな世の奥様族に「素晴らしいものだ」と納得させる役割を果すかもしれません。

A そんな、そんな……矢張り特殊な好みだと諦めてますから……。

司会 それを告白されてはまずいんです。せめて夫を励ます手段とでもおっしゃっていたきたい。



A まあ、それもありありますけど……。

今朝もそうなんですが……土曜日ですから……

……お床を離れる間に「剃っておけよ」と、

命令するわけですね。それが用意です。

司会 ピュービズ(PUBES - Public hair

の医学語)を、ですね。それだけ、ですか。

A (司会を一瞬睨む)……こちら(B夫人)

を刺激していいのかしら。知りませんよ、あ
とのことは。

司会 こちらの御主人は、それを期待してお
られる……つまり先輩のよき感化をです。

B あの、ピュービズ……って。

司会 デルタの茂みのことですが……。

B ああ……。これを(と思わず手でおさえ
て慌てて云い直す)……あれを、御自分で剃
られるのですウ?

司会 何時頃からの慣行ですか。

A まあお人が悪い。世田さんに「つるつる」
の趣味をうつされてからですウ。

B アラ、するとウチの人も。

司会 させる、っていつてますか。

B (頷き)とても影響されやすい性格なん
ですね。でも、させません。

司会 柳眉を逆立てて突っぱねる……。

B お風呂のある家に越せたらって……内風

呂がないアパートでしょう。銭湯に行つてま
すから、とても……考えただけで羞しくて。

前後を責めつける淫靡 な責め具を自から装着

司会 それじゃあ、今に見ろって、楽しみに
してるかもしれませんねえ。Bさんのお宅の
ご主人は。(A夫人に)で、そのあとどうさ
れます。

A 家から国電の駅へ出ますのに、三軒ほど
ありますでしょう……朝晩の送り迎えに私が
車を運転していくのですが、土曜の朝だけは
主人がハンドルを握ります。走り出してから
駅に着くまでの間に、主人の横でショーツを
脱ぎまして、「いいつけ通り用意しておきま
すわヨ」って意志表示に、服のポケットに押
し込みますの。ハンカチかなにかを渡すよう
に。その時の、フフフンと得意気に顎をつき
出し、うそぶくような顔をする主人の横顔っ
たらありませんの。「みっともないから途中
で落しなさんなよ」と脇腹こずいて、気をシ
ャンとさせるわけですが……私はこれを、途
中の安全とか寄り道させないおまじないだと

思っています。

司会 なるほど……帰りに麻雀つき合いや、
夜の巷をさまよい歩かないように、ご主人を
リモコンする効果も考えられてるんですか。

A 五十にかかると、男の人の欲望も下降線
を辿る一方でしょ。気だけは若いつもりでも
疲れが先に立ち、ウィークデーの夜はただ明
日のことを考えて眠るだけ……ですから妻の
心得としても自然セックス・デーは週末に、
と禁欲が続くわけですね。時には土曜の夜が
待ち遠しくなりますから、夫の提案も満更で
はなく習慣になったのだと思います。主人を
送り、家に戻りますと今度は子供を学校に出
す支度……九時近くなって、やっとホッとし
てヤレヤレと息をつく、思い出されるのが
ショーツがないことですわ。それから急いで
ドレッサーの前でシェービングすることにな
りますけど……時々手を抜くことも思いつい
て、わざと剃らないでいる場合もあります。
司会 どうしてですか……いわば、お仕置き
期待というのでも。
A (頷く)私の体調がいい時、また、少し
甘えてみたくなっている時なのですね。少し
ぐらい激しいことでも「OKよ」というサイ
ン代り、ということですよ。

司会 できてる奥サマダァ……です？正に。

B さんはいかがです、今のお話までのご感想は。

B そこまで、積極的には……とても。前にお話したように、私の「アンネ」の日が夫の狂う時ですから、なるべく温和しく過して貰おうと、縛られはしますけど……決して私からは求めませんもの、マゾ快樂のようなものは。

司会 年期の差というところでしょうかネ。

B なにされるか判らないという私の不安が夫には羞恥に震えてるように映るのではないのでしょうか。その程度のもので、夫の錯覚だと思います。……私の場合、五日なんです、期間が。銭湯にも行けず、割とじっと家に閉じこもっておりますでしょう。ですから、これ幸いと革ブラとか……革の貞操帯とかいうものをつけさせて、してやったりと北叟笑んでいるわけで、そうした日に写真撮ったのを、「マゾ牝」だのいってコッソリとマニアに送ったのだと思います……世田さんも御覧になったのではありません？

司会 拝見しております。まあ、楽屋話はそれくらいにして……結構じゃありませんか、ご主人を満足させてあげておられるのは。

B ところが最近、ナフキンではなく、タシポンを使えというのですわね。あれだと普段と変りないからと……エスカレートしていく兆候だと思ってます。

司会 Aさんの場合は、こちらのご主人のようにメンスはこだわらないのですか。



A 一時、わざわざその日を選んでからんできたこともございます。KK誌のS研とかいう集りに連れ出すんだとかいって、変てこなハッスル振りだった時がありましたネ……「パパ、いい気になるのもおよしなさい。いつ、どこで会社の人が見てるかわからないでしょう。パパが変に思われたり、子供がいろいろいわれるようになったらどうなさるの」って、そればかりは猛反対したのです。そうしま

したら、シユンとしてしまい塚本とかいう主宰者宛の手紙は破りすててくれました。

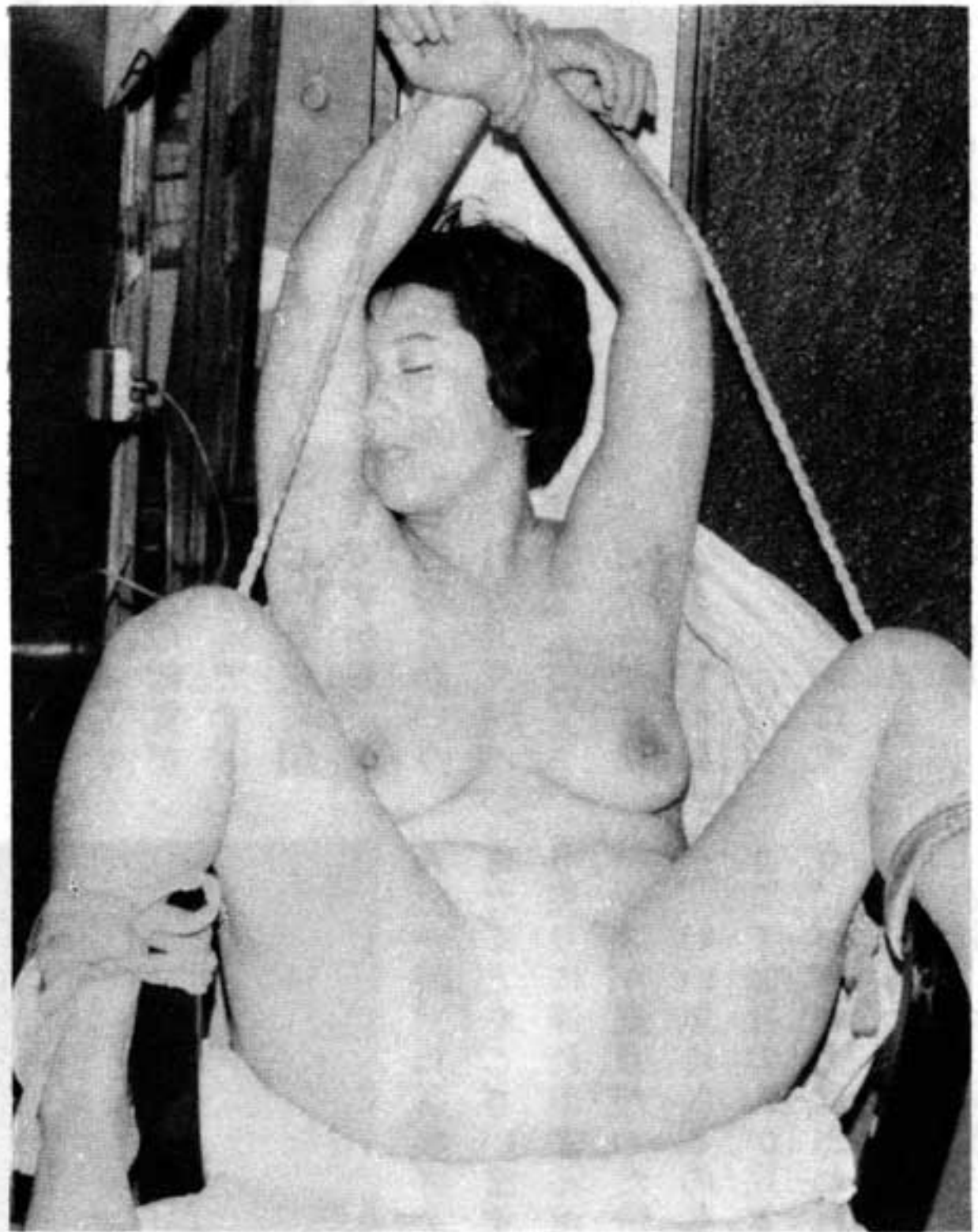
司会 よかったですね、未然に防げて……私はあの人に手紙を出しましたよ。梨の礫で終りましたが、選り好みの強い人らしいです。それはともかくとして、一方はやめたがその代り、という要求が増したことになりますか、その後。

A あの雑誌も消えましたし、信用できる方との御交際だけは大事にしたいというものですから……押えると別な所でハミ出すというのが男の方の癖でございます……S M スワップなんていうこともさせようという企みがあつたわけですし、H D 誌というのを持ち帰ってきた時も、「イヤノ」の一点張りで通しましたものですから、少しはいいなりになってみてあげようかしら、なんて憐みを感じましてネ。(笑)

司会 憐みが、こちらの奥さんの言葉じゃありませんが、男を錯覚させる「理解・協調」ですか。

A うまくアクチブとられたら、無論女はついついその気になってしまいますわ。

司会 それに、土曜日にお互いに期待するものが集中しているとなれば、ですね。



無精髭みたいに……それ

を剃るのも妙なもので楽しみみたいになりますわね。剃り残がないかなどと調べているうちに、オナニーの気分もでて、突起のあ

るベルトも締めやすくなりますの。アナルの方はコールド塗って二所閉塞帯を留めるので

す。

司会 愛奴の正装ですか、股間帯は。

A ××家の奴隷妻と

いたしましては、さようでございます。

司会 市販品ですか、特別注文品ですか。

A 私の体は便利に仕上っておりますね、なんでも「吊し」で間に合ってしまう標準体型なのですの。ですからオーダーではございません。

B 今日……なさってますか？

A (ニンマリと頷いて、B夫人の手をとりスカートの上から下腹部を押さえさす)

B アラ／＼ (慌てて手を引き戻す)……窮

屈ではありませんのオ…… (と心配気)

モーテルで思うままに 責められる土曜日の妻

A (Bに) むず痒いようなやるせなさを感じさせておこうとするものですもの。出し入れのない詰め物が押し上げているような圧入感がありますわ。抱きしめたくなるような衝動が時々襲ってきて相手がいらない空しいもどかしさ……昂揚感と挫折感のくり返えしで、じらされている感覚が次第に全身へしみ渡ってきますね。

司会 そうなると、ご主人からの電話が待ち遠しくなって、気もそぞろ……ですか。お迎えの運転は大丈夫ですか……注意力が散漫になったりして、車の震動が一瞬浮游感を与えたり……ハンドルのさばきがおぼつかなくなることはありませんか？

A 女の神経って、下半身と頭とは別じゃありません？ 猫のようにニャアゴニャアゴ交尾していても、単が通ればサアツと追いかけるように、モヤモヤ気分と献立をあれこれ考える覚めた部分とがあるものですわ。ですか

A そう判断していただければ、無難ですわね。土曜日は一週間分の買い出し日でもあるのです、我が家の。スーパーなどへ行く定例日です、午後家を明けるのは子供も承知してますし、身仕度済ませて主人からの連絡待ちしています。

司会 その「身仕度」について、おきかせ下さい。

A 一週間でヘアが伸びますのは二、三ミリあってそこじゃありませんかしら。ちょうど

ら酔って運転するような神経が麻痺しているようなことはございません。

司会 ということは、セックスでも完全に陶醉して、全く空白な時間ができるということもない、ということになりますか。

A よほど心配のない環境や状況がありましたら別かもしれませんが……（B夫人に）ねえ。

B とっても好きで、自分で恍惚感を求めて積極的になる人のことなら別でしょうが、夢中になって我れを忘れるというようなことはありません。快感をオーバーにいうところけてぐんなりしてしまい、あとはなにもわからなくなるかと女が男を欲ばすようにいうだけで、性経験を積むことは術を知るだけに思います。

司会 歓喜は増幅しませんか、ノーマルなセックスでも。

B 味濃く感じるようになることと、自己喪失の時間が長びくこととは別だと思えますの……個人差は大変違いあるでしょうけど。

司会 男はそれを知らず、やっ起になつてるところがありますねえ。陶醉させ失神するくらいに機能開発や知覚増大を目論み、それを達成したいと思つてね。……さて、土曜日の午後になりました。Aさんは駅までお迎えに

行きます。それから、どうなります？

A あらら、まだ続けますの。

司会 いえいえ、これからが期待の、読者に代って聞き出さねばならない……山場にさしかかるところです。

A 待ち合わせ場所は××寺駅とは限りませんのよ。手前であつたりその先きの駅であつたりしましてね。買い物は西友ストアーでと決めてありまして、その駅前の支店で済ませます。……主人は買物包みを持ったり運んでくれたりはしません。「あれ、買っとけ。これも買っとけ」いいながら店の中をついて回り、時折り……衣服の上からベルトをさぐ



り、摺んではクツと引くのです。

司会 股間帯装着を確め、なおかつ刺激するわけですね。

A ええ……「他人^{ひと}から見れば変態、って見られますから、おやめなさい」っていうのですが、「早くしろ、早くしろ」と、主婦の買い物づき合いがまだろっこしいとばかり、せきたてるのです。

司会 多分、仕事がのろいと奴隷を鞭打っている気分になつているのでしょね。

B うちとはまるきり反対ですね。主人は人の目のあるところでは、なんでもホイホイしてくれて、「いいご主人ですわ」と名声をかち得ておいて、家に帰るとサービスした分だけ倍にして還えせ、というのですから……偉そうに。

司会 なんだかんだ口実をつくって、それを元にM馴致しようとしているわけですよ、私もB家的な傾向をもっています。亭主関白で押し通したいんですが、戦後の民主主義教育のせいで、こちらの面では女を大事にかばい、かばうことで嗜好面は唯我独尊とサジストぶるわけですよ。

A 主人からお話きいて、そういう方なら直接お会いしてもいいと思つた頃は、一度世田

さんに特訓されてみたい、と思ったことがありましたわ。

司会 オッ、ご自身から望まれて？ 始めておききましたね、それは。

A ……折悪しく私の母が亡くなりまして…その気も機会もなくなってしまいました。が、なにしろ女は変わるものですから、今は夫に同調することで、しみじみ倅わせを味わっておりますの。

司会 と、おっしゃって話を打ち切らないで下さい。土曜の午後は、まだ日暮れに間があるのです。

A 買い物物を車のトランクに入れ、夫が運転席に座って走り出したあと、どこへ連れて行かれるかは「あなたまかせ」です。いくつか候補にあがっているモーターがありましてね、その内の一つに向うのですが、リクライニングのシートを一番低く倒しまして、夫の脇で寝る姿勢をとります。

司会 その前に、お出掛けの時の服装をいって下さらないと、話が続かないと思いますけど……失礼。

A (司会者を見据え、B夫人に説明するように向きを変える) 今日はいくつかお席に出るためジレーをつけ、ホーマルなスーツです

けど、いつもは素肌直接にコート着るだけなんですのよ。

B まあ……。

A 車の中で一旦コートを脱ぎ、シートに寝



てからコートを羽織るわけね。あとは野となれ山となれ……一生懸命、奴隷妻として尽します。

B (感心したように) うちの人の頭で描いていることを、実際になさってらっしゃるの

ですねえ……。『O嬢の物語』を観に行つて、帰りには早速あのタクシーの中でのルネミタいにしようとするんですよ。乗ったのは個人タクシーでしたが、その五十がらみの運転手さんが、気配で知ったのか、ミラーでチラッとみたかしたのでしょうか。「お宅たちはまだ可愛い気ある方よ。土橋あたりで拾う客の中には、キャバレーのはねたあとのホステスと連れ込んできて、そこ(後部座席)でシックスナインというやつするんだからねえ……行く先だけいって」とひやかし気味に喋りまくるものですから、それっきり手出しはしないで四方山話をしてましたけど……その時は、とっても不快でした。

司会 自家用車とタクシーの中とは納得も分別も違ってくるでしょう。映画を見終った直後では、本当、只の見ようみまねにすぎませんものね。Aさん御夫妻のお話をうかがったあとでは、今は、そんなことができたならなあ、とても思われますか。

B やっぱり、そうなれる状況とムードがあれば、でしょうね。好奇心はありますし、お互いの心の中に傷になって残るようなことさえしなければ、夫婦ですから甘えも我がままもあっていいとは思います。でも、模倣の行



為は……特にポルノそっくりとか、小説にしろ映画、テレビにしろ、作りものの中からの影響とか思いつきで、私を変えてしまおうと試しているのだら、即離婚を宣言します。

司会 そうした貴女のお気持ちは、Bさんにもはっきりお話してあるのですか。

B 「いやということはないで」とぐらい。
司会 そうですね、強くいきて、かえっ

てそれがわだかまりを生む原因になってもまずいことです。今、お話になられたことで間接的に貴女の胸のうちが、ご主人に伝えられることになりますから、それを配慮の目安にして貰い、仲睦じく過ごせるようにしていただきたいものです。……所で、今度は続いてBさんの方に鉾先きを転じて……「マゾ牝」話を伺いましょう。お二人は学生結婚されたそうでしたが、その頃からSMの関心とか話題はあったのですか。

B いいえ。ただ、両家とも無理解で反対でしたから、二人で暮して行く決意はあっても結婚生活の設計図は全くの白紙。子供ができたといえはいいかしら、と考えたり、一方では絶対今は子供を作る時ではないなどと、考えにもまとまりがなくて、そのままずるずると同棲しましたの。既成事実を作っておこうというわけでした。……それ以前の、互いに下宿を往ききしていた時から、やや、子供を産んで親子して苦労するようなことだけはやめておこうと意見が固りつゝあって、妊娠しない工夫からアナル・コイトスが始まったのです。体位としても、あれ、とても楽なんですよね、後からしっかり抱きしめられてますでしょう。互いにアルバイトして、疲れた体

を寄せ合ってぐっすり眠るのには都合いいんです。

司会 そうですね、まともに息を吹きかけ合うこともなし、寝苦しいこともない。恋人さえ許容してくれるなら、「イタリアン・スタイル」は男にとっても最高の快感ですよ。

妊娠を避けるためのアナルセックスが習慣に

B 枕を高くして、横向きになっているのが苦しくないようにしますと、同じ恰好のまま、目覚しが鳴るまで寝ていられますし……羽交締めとは一寸違いますけど、愛撫されながら締めつけられるような抱擁感も十分で、それが理由をつけようと思えば緊縛を拒まなかったことに通じていたのだと思います。

司会 貴女の背中を石板代りにして、Bさんが一晩中、英作文のスペルを書きまくっていたことがあるんだそうですね。

B 不思議な予習法ですわね。こうすると絶対忘れないんだとかいって……私はくすぐったくて、ピクンピクンと背筋を動かしてしまわんですが、そのうちゴウゴウ高鼾。結構、



司会 それからですか、「マゾ牝」呼ばわりが始まったのは。

B それも、一年ぐらいたってからです。住んでいるアパートは駅に近いせいもあって、夜、帰りの遅い仕事の人……ホステスさんなどとかが多いんです。私たちの隣りなんかは、二年の間で五回代わりました。いいパトロンができると、マンションなどに移って行くんです。そのうちの一人に……その人が一番住んでいた日数が短かったことになりますけど……マゾの女にされた人がいたのです。

司会 それは、実際にマゾといえる女性ですか。

B もちろんあとでわかったことです。それで他所へ行ってしまったのですけど。

甘美感にひたっていたのかもしれせんわね。
司会 卒業して、就職もしてすぐ結婚でしたか。両家の承認もあって。

B いえ、一年後です。私が卒業した年にです。正式に新居、といっても今のアパートに移り世帯をもったのは。

司会 事件かなにかあって、明るみに出たのです？

B (頷き) いつもはとても静かに、ひっそりと暮しているんです。電話はひっきりなしにかかってきました。私も長年のアパート暮らしでなるべく物音たてないようにすること

が身についてますでしょ。テレビを見るにしても、イヤホーンで聞くなどして内職のトレースなどしてますでしょ。ですからお隣りさんは、私たちが共稼ぎで留守にしている方が多いと思います。

司会 新しいアパートほど、新建材の使い方や間取りのとり方で、音がつつ抜けということがありますね。

B はい。それなんですの、お隣りの様子が手にとるようにわかってきたことも。押入れの襖をあけて冬物から春・夏にかけての物を整理していた時、たまたまキッチンと部屋とに差し込みコードで移せる電話が部屋にあって、すぐ壁の向う側に置いてあったのでしょうね。「もしもし、××でございます。ハイ、×子です……」から始まって奇妙なやりとりが聞えだしたんです。

司会 で、テレホン・セックスでも始まったのですか。

B はい、そうなんです。しかも、なにもかも復唱してから、その結果を聞かせるようにするので。

A どんな風にですの。

B 最初聞いた時はですね、右廻しで五、左廻しで七、左廻しで一……といった風に復習

しながら金庫の鍵を外すような暗号だったのです。そのうちに「外れました……まだ濡れてきてません……」などと、阿呆らしいと思っても、ついついその先きは……その先きは、と、どうなるんだろうと知りたくなるようなやりとりになって行っただけです。遠隔指示のオナニーで、それは凄く取り乱しようになって、うわごとのようにありとあらゆるワイセツな言葉をいってすすり泣きまで始めるんですよ。エロテープを聞かされてる比じゃないのです。

司会 つまり、しょっちゅう電話が入るといふのは外出を禁じる手段であり、かけた相手は煽情してその「作られた声」かもしれないものであっても、×子のよがり声を聞いてしびれているんですね。……その男は直接訪ねては来ないんですか。

B いいえ、夜七時に来て、十一時前にはソツと帰って行くのです。こうしたできごととは二人きりの生活ですと、どうしても話題になりますでしょ。私が主人に話してからというもの、うちの人、お隣りにもものすごく興味を持ったんです。

B アパートは、夜の商売の人が割と多くて特に一階は五部屋ありますが、うちとお隣り

を除くと夕方から留守になります。七時になると来る人が訪ねてくる頃は、もう殆んどの人が出掛けてしまった後なのです。それが、お隣りの人たちにとっては都合がよかったのではないでしょうかしら。二時間ほどは割と物音しないんですが、九時すぎると妖しくなってくるんですよ、お隣りが……。

司会 プレイの開始ですか。

B (頷き) お布団を敷く時、最後に押入れの襖を閉めたように音をたてておいて、すぐ開けておくのです。

司会 (手ぶり) バタン……スーの往復を瞬間にしておくんですね。

B そうしておきますと、お隣りは本当に私たちが床に入ってしまったと思うんでしょうか……だんだん壁を通して聞えてくる声も音も大きくなるんです。

A 一体、どういう人たちだったんです、年配の人と若い女性とか……奥さんは昼間顔を合わせることぐらいはあったんでしょう。

B それが嘘みたい、奇妙になかったんですの、不思議な生活が明るみになるまで。

司会 めずらしいですね。

B ご用ききや、セールスマンは全部シャッターアウト。一言も返事しませんし、表向き

は空室同然なのです。窓はほとんど閉めつきり。たまたま開いたなと思っても風通しのため細目にあける程度。まさか、庭に出てカーテンを押し上げて覗くこともできませんですよ。洗濯物でさえ外に干されることはなかったんですよ。時々、夜、聞き耳たててる方が裏切られることもあったんです。お隣りが外出しちゃうんです。



司会 はア……外でプレイして来るか、誰れかと合同のプレイをするんですな、そういう日は。



B 全く電話のならない日が、二日間とか三日も続くと奇妙ですね、殺されたんじゃないかしらなんて気にかかって……。

司会 普段が普段ですから余計でしょう。

B でもまた翌日から前と同じようになるんです。気にすまいと思っても、神経がそっち

に行っちゃいます。……そうしたくり返えしがあって、ある日、午前中のことでしたが、壁がゴンゴンお隣りから叩かれるんです。

それがとっても異様で、とっさに何か起きたッって不吉な感じがして、私、すぐ大家さんの家に合鍵持って来てくれるように電話した

んです。でも、なんとかしなくちゃいけないと思って、庭に回わりベランダの鉄柵をのり越えて、向う隣りのホステスさんも叩き起しましてね、二人でガラス戸の鍵のかかっているところを目当てて壊したんです。ところが、そのサッシの鍵以外にも安全錠がしてあって開かないんです。いっそガラスを大きく割って入ってみようということになってバシバシ引き破ったんですが、ベッドがガラス戸に沿って置いてあるもんですから中にくぐって入ることもできないんですよ。そのうち慌てて飛んできた大家の奥さんがドアを開けて入ってくれたものですから玄関の方に回って部屋に入ったわけですけど……私、本当に人が腰を

抜かして動けなくなったのを見たのも初めてでした。驚天してしまったんですね。

司会 Bさんは、耳では一応の予備知識があって物怖せずいられたでしょうが、いきなりじゃあ……どんな光景だったか詳しいことは知りませんが……大概是呆然とするでしょうね。

B その日も朝からチャンと電話のやりとりはしてたんですよ、お隣りさん。それで「あ、お元気なこと」と思っていたのです。まさか騒動が起るとは思ってもみませんでしたの、私。キッチンに近い四帖半は女らしい部屋にしてあって、奥の六帖は渋いクラシック調のベッドが一つきりしかなくて、畳が全部裏返えしになってましたわ。そのムシロのような上で×子という人が脂汗かいて、のたうち回っているんです。頭は尼さんみたいに青光りするようなツルンツルン。手錠と足枷の鎖以外はなにも身につけていないんです。ですから、一緒に飛び込んだホステスさんまでが、私にしがみついたのも無理ないし、大家さんが腰抜かしたのも当然です。

司会 そのマゾ女性が苦しんだのはなんだったんです。

B 子宮外妊娠……だったそうです。

A 女には、そうした予期しないことが起きますものねえ……いやですわ。

司会 その様々なできごとを聞いたあとの、ご主人の様子はいかがでしたか。

B 「ああ、残念だったア、僕のいる時にそうなれば」ですって……そして、「僕たちのやり方は正しい」っていうんですからね。

司会 そりゃあ思わず洩した実感でしょうが、愉悦のあとの不始末は避けなければならぬということからいえば、貴女の方が神経をゆきとどかしているわけですよ。こう私がいうとBさんがたは心外に思われるかもしれませんが、お隣りの人の騒動があつて、それに刺激や影響を受けてSMプレイが始められたことになりますか？

B それとは無関係です。好奇心の方がアブノーマル・ラブを否定しないように育てたと思います。でも、お隣りで起こった事が行き過ぎの方の限界と思う見本のようなものになって、その手前までなら楽しみ合ってもいいという理解にはなっていると思つてます。

司会 ご主人が男の野心で、「一盗二婢三妾四妻」と俗にいわれるような興味から、お隣の部屋に出入りしていた男のように、他所でマゾ女を囲ったらしめますか？

B 露見した時のことですか、そうしたいと機会を狙っているのを知ったらすか。

司会 では、こう修正します。一の場合、奥さん以外にプレイメイトを欲しているのを知った。二の場合、その事実がわかった……すでに飼育を始めていた、の二点で考えてみて下さい。

SMプレイはあくまでも夫婦の愛情表現の為

B それも、相談あつたかないかで違つてくると思いますが、コッソリやってたとなれば、即、バイバイですね。

司会 実にはっきりしていられしやる。

B 相談されたら、何が不満かをただして、それからだったら私も協調しちゃうかもしれません。

A Bさんは同性にも興味がおあり？

B はい。情けない相手をしごくということでは、むしろ女の子の

方が面白いと思います。私って、いつも頭の中で、ラストダンスは私とを歌っているようなところがあるんです。妻は思いやりがあつて、夫からの思いやりを一番望んでいるヒトだと思います。ですから、いたわりや思いやりのない人やなくなつて来た人には冷めてしまふのです、ハートが。

司会 男は勝手だ、と思われがちですが「君はもう、こっちにそっとしておきたいんだ……だけど、耽溺したい相手が欲しい」と打ち開けられた場合には。

B その相手のかくされてる部分までがわかつてるなら「いいわ、やってごらんなさい」



といえますね。かくされたものというのは、お金が目当てなのか、男欲しさとかいうことですけど。……それと健康状態。精神病の血筋があるとか、知能が弱い人じゃあかないませんものね。世田さんだったらどうなんですか。

司会 性癖、嗜好だけの面で好みの相手を選び出そうとするのは、結婚相手を見つけ出すことより大変なことなんですよ。よほど向う見ずな大胆な人間でない限りできないことですね。したがって私は妄想にとどめて実生活の中での実現は期待してません。ただ、金銭で割り切れる。または将来まで保障できるという見通しに立っての契約なら一時的な耽溺の可能性はあると思いますし、夢想して楽しんでいきます。正直なところ。

A 奥様は「男の甲斐性でやってごらんない」とおっしゃいます？

司会 いや、これが一夫一婦性遵守論者として、一向に門戸を開こうとしません。私にはできそうにないと、タカを喰っているところがあるんじゃないでしょうかね。

B 私は、そもいえそうだ、という気がするだけで、実際にその気配がうかがわれ出したら、夫の目や全神経を脇にそらさないよう



にするのが先決になって、手綱を締め直すでしょう。夫を愛しているうちは。

A 夫にしがみついておこうとするからではなくて、うちの主人は世界一ってあがめ奉っておきたい気持ちがありますわ、女にはね。そして「いい女房だ」ともいわれたい……その子供がいることも含めて、家の中の幸福を大切に思う気持ちが、特に夫婦の中になれば、他人に見せるためのショーではないんですからSMごっこも、ポルノごっこもいいと思いますネ。

B 映画「O嬢の物語」で、ラスト近くにO嬢がステハン卿にパイプの焼けた金具の所で烙印をおしますでしょう。あれで「O嬢の物語」は大変歪められてしまったと思います。格調高そうな純愛映画に急転直下な転落をみせてしまいます。あしななければいつまでも後味悪く残ってしまう映画になっていくばかりだったかもしれません。で、「マゾ牝」などいわれる妻の立場からいいますと、カケ引きなんて思われたくない事柄なんです。これは。「貴男が私にしてみたい、と思うことがあれば、気の済むまでやってごらんない。でも、私も貴男の愛を信じられる納得が欲しい」ということは、表現は違いますが、よくいうのです。その女性感情だけは、あの映画にはよく表わされてました。私は、性愛行為で男の人が一性交一絶頂の感得で終わってしまうのを気の毒に思うことがあります。その日のコン디션で、あっけなく終わったりすると、またその気にさせるためでなく、失望をなぐさめるために愛撫したり口に含んだりもします。お互いに一緒に過す時間が少しでも多く、少しでも機嫌よくしていたという気持ちからなんです。性願望は夫が吹聴するほどマゾではありません。むしろさっき

ヨコッと喋ってしまいました。Sの気が強いでしょう。

司会 おふたかたから、はっきりしたご感想がうかがえたことは貴重であり、有難く思います。はじめに触れたことですが、私はお二方ともそれぞれのご主人から、マゾ性を高く評価したお話ぶりで秘悦好みをおうかがっておりまして、話題を享楽堪能の方にも進めたかったのですが、被虐悦楽を御自分の方から希求していらっしゃるのではないとわかりだしたあたりから、妻なればこそのお気持ちの方だけを中心に、お話していただく恰好になりました。一口に言えば、男は自惚れが強く錯覚しやすい者だということが、明らかにされたようなもので、これはこれで結構であったと考えます。どうかこれからも性の自由がないといわれる制度化した生活の中でも十分に歓喜と愉悦のあるお暮らし振りで至福感に満ちた日々をお過ごし下さい。

A・B両夫人の声はカセットテープで収録しておき、それを「夫」の側に聴いて貰うつもりであった。だが、再生したあとでは、夫婦の間での考え方の違いの差が目立たなくなる惧れも感じられたのでやめ、ただ放談していただくことにした。

夫の立場から

司会 おまたせしました。これからは男同士のSM談義とまいりましょう。お二人とも良き伴侶に恵まれた方だと心底感慨深いものがあります。読者を総代理して嗜虐三昧な暮らし振りを詮索する意気込みが鈍り出しました。そこで、男としてエスカレートして行きそうな野心、マゾ妻にかける理想像などをお聞かせ願いたいと思います。

Bさん。お住いのお隣りが、私がしてみたいたと憧れていたと同じような「M女飼育室」だったのを奥さんの口からお聞きしたのですが、留守中の騒動の一部始終をお聞きになった時の気持ちはどうでした。

B まず、驚嘆ですよ。不幸にして私はその女性は見えていないんです。妻はどの程度喋ったか知りませんが、バストは小さい方で、ウエストからヒップの曲線とか足は綺麗だったようです。ただ、年齢は中年増……丸坊主ですから見当がつかなかったのですが、プレイの声は相当でしたよ。妻を引き寄せてそば耳たてていると、妻はカタカタ小刻みに

震えてるんです。女が女の鳴咽や呻吟の声で反応するくらいですから相当なものでしょう。

A それが毎晩ですってねえ……スタミナがよく続くものですね。

B 呆れましたね、それには。しかし、SM飼育だ調教だ、といっても、実際にするには男の方も大変なことですよ。

司会 確かに、男性の方も神経をとぎすませたり、資力を注入したりしなければねえ。ええ、図太くないと途中で投げだしたくなるでしょう。やりとりを、男のいつている言葉だけを選んで聞いていると、羞恥小説の中で書かれた会話の真似で、思わず噴き出したくなるようなことばかりでした。いらぬお節介になります。もう少し工夫があればいいと思いますよ。

A あるいは、意識的に粗野な人物を演じていたかもしれない。

B 女の部屋に入るとですか。サジストに変身して……じゃないですね。関東地方のテレビを観ている人ならわかると思いますけど、



自社の建売り住宅のCMに顔を出す社長がいるでしょう。その人に似てて小柄な五十男でしたよ。通って来る車はクラウンでアパートから百米ぐらい離れた所に停めるんですが、一度だけ別の女性を連れて部屋に入って行く所を見ました。その夜は新人も責めたらしく、妻は敏感に誰れか別な人もいるみたいと、声を聞きわけていましたねえ。

A マニヤの骨頂ですかね。その人のしてた

事は。

司会 Aさんは、俺もやるぞ、と考えますか。

A 女房と離婚してからじゃないと駄目でしょうナ。慰謝料払える自信やメドがないから、古女房でも如何にしたら新鮮な魅力を感じるか工夫して、若い人のやることを真似ているようなわけですからねえ。それに五十の声を聞くようになってから、他所での女遊びが公認になっても少しも楽しくありません。わざとらしい歓待を受けるより、気心知れた女房に愚痴ったり、夢ふくらませてつるんでる方がいいと、悟りの境地ですね。

B 私も野暮な一穴主義だといわれようが、妻ととり合ってみたいですね。まだまだ彼女を占有しきれてる気にはなっていないんですから。

司会 そうですか。独り占めしているではないですか。

B そう云われちゃあ情けないですねえ……「O嬢の物語」を性のバイブルだと話してくれたのは世田さんですよ。本当は彼女を恋人のままでおいておきたかったんです。恋人であって生涯の伴侶なんです。婚姻届を出した妻の中に恋人を見続けるのではなく、恋人である女性の中に、自分のベター・ハーフを感じ

ていたかったんです。私が学生時代の、下宿に帰ると彼女が来てて、「やあ、来てたの」と俄然嬉しくなるあの気持ち、それがとっても素晴らしいんですね。それを一生続けたかったわけです。留守中に入って来る。つまり私には秘密がないってことですよ。彼女の前ではなにかもあけっぴろげなわけです。そして二人がいるっていうことが二人だけの秘密なんです。



司会 そうした夢を抱きながら、どうして実生活は平凡な結婚形態をとったのでしょうか。

B 彼女の不安や怖えです。私の説得が不十分だったのかもしれないねえ。「結婚しよう、結婚したって恋人でいられる」という彼女の主義を洗脳することができなかったんですね。私が思っていた通り、結婚したら彼女は「妻」になってしまいましたよ……「妻」としては今のところ最高ですよ。努力してくれてるんだろうし、申し分なしです。ただ、私は家にいるんだからと、自分のことに手を抜くところが目についてきて、野暮ったくなっているんですね……一寸、いたたまれない気持ちになります。

司会 そのBさんの、夢が薄らいでいくいたまれなさが、「マゾ牝」奴ノ という嗜虐心になるのですか。

B 懲罰意識ですね。私の加虐欲をまぎらわして、心の中じゃあ、永遠の恋人でいてくれと懇願してるような、口では一寸説明しにくい感情が入り乱れてます。

司会 Aさんは平静に淡々と、「今日はプレイ・デーだゾ、覚悟しとけ」と宣告するのですか。

A いやいや、それをいいだすタイミングで

骨折ります。仕方がないわね、なんて顔されると恥かいた気分になるわけで、早く虐めてくれと家内の方からいい出すようにならないかと願ってる。

司会 御機嫌とりがあるわけですね。

A そりゃあそうですよ。気疲れして、なんでこんな手間かけなきゃならんのだ、と自嘲気味な照れまで感じて、しかもやめるのではなくプレイに入っていく。家内も私の社会的体面を思う余り臆病だし、根は私も臆病……その、破廉恥な行為の中から生まれる最高の



愉悦感を頭に描きながら到達出来ない臆病さがあるため、妻に一人三役をおしつけるんですなア。

司会 貞女……人によって賢夫人といいますが……と、娼婦と女奴隷。一般的には「昼は賢婦・夜、娼婦」を希求し、その良妻願望を叶えてくれる妻は、よくできたヒトということですが、SM愛好者は更に役割を加える欲張りだといえますね。ところで、私はセックス・エンジョイのためのラブ・ラブだったら善しとする人のほとんどが、SMプレイを前戯風に考えているでしょう……それはよくないと思っっているのです。後戯があることを前提とした没我でSMプレイに終始する方が、夫婦の連帯感を強めることになる、と考えたり思い当るところがあるのです。

B その判断に共鳴しますね、私は。

本格的に妻を責めるのは他に影響されてか？

A しかし、必らずしも後戯は必要じゃあないでしょう。

司会 後戯を、愛撫のテクニクとして考え

てはいけないんです。精神的な睦み合いとでもいいますか、没我堪能のあとの感謝とかいたわりですね。

A そうですか……でもそれくらいのことであれば誰れでもしてるでしょう。

司会 私のいわんとした「後戯」についてはまた別の機会に「雑感」として記述した方がよさそうですから、ひとまず、さておきまして……Bさんは、妄想にせよ、「マゾ牝」にどんな期待を持たれてますか。

B イメージでは「刺環」……ラビア・ピアシングと、ニップル・ピアシングですねえ……バットン・ピアシングも刺激的なんです。

司会 最後の、バットン・ピアシングとは。

B クリトリスに環を通すことです。

司会 そうですか。×語かなにかでは「ドット」——チビちゃんと呼ぶそうですが、そこもピアシングの対象になるのですか。

B 仲々快感を高めることになっていいそうです。方法は、窓からカーテンをかき上げてチビちゃんが外を覗いてるようにして刺し通すのだそうですが……。

A アラブの国じゃ切除するそうですね。性感を長びかせるために。その逆でことになるわけですか。



B ええ。

司会 それが叶えば、貴男がいう占有、その具象となり安堵を感じますか。

B じゃないでしょうか。私は、結婚指輪ってのが嫌いで、まして男がしてる……あれは全く嫌悪の対象です。そこへいくと隠された所に証しをつけるなんて、いいですよ……今

年に入って、ボーナスの残りを二人で分けて、何に使おうが勝手という約束をしましてね、外出したんです。その時私は池袋にある革製品専門店「奴隷市場」をのぞいてみたんです。その店に入りますとね、荒川也寸志というイラストレーターのイラストが展示してありまして、それに思わず見とれました。その画はSM雑誌に載ったものですから世田さんも御存知だと思いますが、なにしろ原画ですからよくわかるんですよ、手の混んだ器具の作りが。あの人のイラストは他の画家が、他社の緊縛写真を持ち出してきて、アレンジしたものを別の雑誌社へ送り込むようなところがなくてオリジナルに富んでいます。それが好きで偶然出会ったその人の原画には感激しましたね。辻村隆という人は、「縄にはじまり縄に戻る」と緊縛嗜好のことをいってますが、SMプレイを楽しむんだったら、縄はわずらわしいですね。そのわずらわしいことが楽しみでネチツこく縄を女の体に巻きつけて行くところが、いかにも関西人らしいと辻村氏のことを見てきたんですが、一度でいいから私は荒川氏のイラストのような世界で悦楽に耽けてみたいと思います。

A そのあと、性的不能者になってもいい？



B ええ。悔いなしでしょう。

A 貴男はそれでいいかもしれないが、これからますます熟れて行く奥さんの方はどうします。

B マゾというのは、ペニスとバギナの結合で判断することじゃないと思います。虐待に

耐えて行く中で知る歓喜がわかった者、また、それを希求する者のことですから、セックスを超越してるんじゃないでしょうか。私は、妻を見てますとね……少し話の筋道が通ってないように思われるかもしれませんが……もし、私が自動車にハネられて不能者になった

とします。それでもセックスが夫婦の中にならなから不満だと、自己抑制もつかなくなって浮気したり、蒸発することはない女性だと思えるのです。つまりS Mとか耽溺というのは、私にとっては人間の性の凝縮であって、早くセックスの煩悶から抜け出そうとする手段なのです。

A なるほどねえ……この私は、君とは正反對で、なるべくなら長く性を楽しみたいとする……どっちが賢明なのでしょうかねえ、

世田さん。長き人生を送るには。

司会 熟慮か賢明かの表現ではあてはまらないでしょうし、善し悪しもないでしょう。

ただし、どっちの生き方が好きか、といわれれば私はBさんの生き方が好ましいですね。活気のある時代に相応に発散して、あとは脇目もふらず、という姿勢は好感が湧きます。

それでは今度は長距離ランナーでありたいとお考えのAさんの方におたずねしましょうか。

A 女房に対する期待ですなあ……一人三役ということでは先程話しましたね。

A 使命はなんていったって「絶対服従」ですよ。ひところ、KK誌の「S研」に妻を連れ出してみようと考えましてね、特訓したところがあるんです。その時期は私にしてみれば十七年目に迎えた倦怠期でしたナ。それも今になって思えば、そう思うんですよ……嫌われてもいい、いっそ嫌われて別れた方がいい、そんな気にもなっていましたから、無茶やっただけですナ。義母が亡くなったあとで、いい年していつまでもたってもベソついてたこともあって、腹立たしくなっていたのも起爆要因でした。子供たちにもそれぞれ独立した部屋を与えてやろうということ、オカグラ……二階の建てましをしていた最中で、子供

は私の方の実家に預けていたんです。

司会 環境的には絶好だったわけですね。

A ええ……未完成の二階は特訓にはうってつけでしたね。建築工事用の鉄梯子は置いてあるし、まあ、好都合な道具だてが揃っていたんです。私は世田さんに見せて貰った貴男の恋人……こんなこといいのかな（笑）……。その女性の春草を綺麗に刈りつつ写真に、いたく心を奪われてましてね。まさぐるとゴワつく感触がいやになってきましてねえ。どんなにかこの邪魔なものを取ってしまったら楽しかろうと思ってました。……**B**さんは、剃毛をした事がありますか、「マゾ牝」夫人に。

B いいえ、まだないんです……銭湯へ行かなきゃならないもんで。

ますます磨きをかけて 自分好みの奴隷妻教育

A いやがるんですな……その、いやがることを敢えて強引にするのが羞恥責めの愉悦ですよ。……ま、そんなことはどうでも……私はいうづいてましたからね、機会を狙っていた

わけでした。

司会 古代ギリシャでは陰毛の除去は商売女の風習だったそうですから、無毛を歓迎する気持ちは男にはあるのです。またハゲ山の状態にしないまでも、短かく刈るのも一興で、下刈り美容といえますか、好みのカールやラウェーブをつけることも面白いでしょうが、無い所に密着する感覚は少女姦のイメージなのかもしれませんね。私は自分のも剃って「これでいいだろう」と納得させたことがあります。三ヶ月で元に戻ります。

A ははは……そりゃいいこと聞いた。今夜は私のも剃らせて、少年の時代に若返りますか。「おい、剃ってみろ」と命じてね。

B そうですねえ、刈る程度ならいいかもしれませんねえ……そしてバットン・ピアシングが見えがくれする……。

司会 **B**さんはどうしても実現したいらしいですね。

A 占有したいものねえ。私は最近のカール



セル麻紀じゃないが、刺青はさせたいな。

司会 それは、今、思いつかれたことですか。

A いや、刺青は結婚してからずっとですよ……今のは花芯連想の話でしてね。

司会 刺青は特訓のうちに入りませんか。

A 別個でしょう。全身入墨は芸術ですよ。妻が若い時に、その方で亭主好みになっていてくれたら、私はSMマニアにはなっていなかったらと思うますナ。親がいるのにそんなことできないと拒絶しつつづけて、私しか頼る相手がなくなった時には、肌はおとろえを見せている……。ですから、彼女がメソメソしてるのを見て、余計に抑圧されていたものが大噴火をおこした様なもので「こっちへ向けよ」と肩に手をかけると、パイと却ってそっぽを向く……。それでカッとして、二階へ腕をねじ曲げて押し上げたんです。その時、怒鳴りつけたらわめき散らした言葉のひとつひとつまでは覚えていませんが、「根性を変えてやるんだ」と暴虐の限りをつくしたことが、コロリと妻の態度を変えることになりました。してね、口でいえば倦怠期を忘れたというのか乗り越えたというのか、今では「円満」と我ながら太鼓判を押していただけるわけです。

司会 (領き、B氏に) どうしました、吐息ついて。

B いえ、あのう……温和しかった夫が、突然、よろめきかかった妻に平手打ちかまして、夫婦の危機を乗り越えた話とか、逆に過失を責められて、あの時叱ってくれなかったから

投稿 札幌市.S生



と、元のサヤに納まらずに去って行くとかいう話がありますが、女ってそんな勝手なところがあるのかな?と思ったのです。……Aさんの奥さんを勝手な女っていうのではなくてね。

A ぬるま湯に浸ってはいけなないと気付いたり気付かせたりする機会っていうものがありますよ。それだって裏目に出る場合もある……私はそのあと猛烈にファイトが出ましたね。仕事の方も、妻のマゾ馴致にも。

A いやいや、妻はよく世田さんのことを口にしてますよ。これからですよ……奴隷妻に磨きかかるように仕込んでいただくのは。なにしろこちらと違い、長く楽しく嗜好に耽けりたいですからねえ。ただ、私には長き旅の道連れでも、「サン・アンド・ムーン」向きではありませんな、年増の女奴隷では。それが残念です。

妻の過去を嘗ぶ夫

蠱惑の検診台

長谷忠夫



特殊な仕事を職業とする男性以外、殆んど絶対といえる程立入れない場所がこの世にあるとすれば、婦人科医の診療室をおいて他にないのではないか。

そこは、健康な男、ほど無縁であり、且つ冷酷に扉を閉ざして寄せつけない。いわば秘密の部屋であり、それだけに強い関心が湧いてしまうのは、あながち私だけに限らないと思う。

私は若い時、親しかった女友達に妊娠させしまい、厳粛なる事実、を目の当りにしてひどく慌てふためいたことがあった。

彼女は絶対子供を産んで育てたといいい、私はまだ結婚出来ないと云い張り、処置をめくり騒動した芳しくない思い出がある。

冷酷な部屋

結局は若い二人だけでは結着をみないので双方の親同志の話しあいまで発展し、思わぬ恥晒しをしてしまったが、中絶した相手が人が変わったようになり、いつの間にか新しい男友達と結婚してしまったのには啞然としたものだった。

その、人を変えてしまったと

いう事が婦人科医の検診台（手術台兼用）の好奇心と結びついて、私の猟奇心とかSM関心を強める原因になったようだ。

私はある時期、人間不信、女性嫌悪にとらわれたことがありヌード・ピンナップさえ醜悪に見えた。それでいて、秘密ルート、のワイ写真収集に熱中したという、矛盾に満ちた時代を過してきたのである。つまり秘密じみたことなら興味があったわけ、奇譚クラブ誌を買いあさったのも、今のうちにSMが白昼でもまかり通る時代ではなか

った故であろう。

二十年前に八方手をつくしてコレクトした写真の中に、そこそこの一枚を手に入れるために苦労の甲斐があったと欣喜雀躍したものがあった。五枚一組の写真で、開業医の診察室を借りきって撮影したと思われる搔爬光景風のエロチック・フォトである。当然悪徳医者が器具以外の道具で犯すシーンもあるのだが、婦人科医の七つ道具といわれる物がずらりと並び、異様な画面を写し出していた。

不思議なもので、それを見て



以来、女性嫌悪の感情は次第に薄れて、今度は前にもまして女性に憧れ、恋人獲得に血眼になった。そして奇譚クラブ誌の感化もあって、出来るならマゾ性癖の女性と暮してみたいと願ったのである。

しかし世の中まならぬもので、お前はそろそろ身をかためろ、といわれて見合し、相手側に気に入られてみると破談にす

るのは惜しくなり、形通りの交際をして挙式までプログラム通りに運ばれたが、家内は異常愛の拒絶反応者で全くの灰色生活であった。

私の秘蔵品は、新居に入る前に一括して知己宅に預け、特殊な関心は知られずに済んでいたが、家内の、私からすれば頑迷さともいうべき頑固さは一向にほぐれず、氣詰りばかりつる。

それに対抗する策は、懐妊させないことである。幸にして私は遅漏の傾向にあった。それを武器に、家内がアクメを覚えるときささと身をひるがえして寝てしまう。性知識が皆無に等しかった家内は、交わりがあるのに妊娠しないと親に告げ、石女ではないかと騒ぎ出したのである。

遂に、堅物の家内が精密検査を受けることになって、私は内診台に上がる家内を思うと内心有頂天な気分になるのだ。

医者の診察を受けた家内が、その翌日からうって変わった態度をとるようになったのも、これまた不思議なものであった。家内には男性体験の過去があり、その過去隠蔽の努力が、性に対する無関心を装わせていたわけなのであった。

お互いが仮面をはぐことが叶うと灰色は払拭されてバラ色に染ってくる。はじめは照れ臭いが新婚気分の再来を思わせた。

バラ色の内診台

夫婦だけの秘密ということとで顧みるとかなりなアバンチュールを経験してきたことになる。SMも確かに二人の絆を強いものにしたり、邪悪なものとはいえない。

私にとって最大の秘悦は、女性を変えてしまうギネの検診台に、家内を押し上げて、もっと変われ、生涯の伴侶たれ、と祈願することにあるのだ。結婚後、



初めて開業医を訪ねた家内の縁で、その医師の診察室をお借りした事が出来て以来、幾度か私の夢を叶えさせていただいたが、老齡の物分りよい医師は先年逝去された。私は死を悼むと共に、秘悦に耽ける途が閉ざされた悲しみも味わい、同時に私自身もめっきり老け込んでしまった。誰方か、私たちに今一度青春の息吹きをよみがえらせる回春の策として、秘密裡に物分りの良い婦人科医をお教えくださるまいか。



“灼熱の間” 渦巻熱風に たが!!

葛西 六郎

まずは両手首を縛り

ハリに逆さ吊り!

私は自分を省みて、果たしてS男なるや否や、にわかには断定できないのです。ある時はS男かなと思ひ、またある時はノーマルな

妻とのノーマルな行為に、つまらなさを感じていた時、思わぬ幸運が舞い込んできた。友人のAから、SM撮影に見学がてら助手を頼まれた……

ただの人としたりするのであります。

街の雑踏をさ迷い、異常変態ポルノなどと大書された映画館に、ふとまぎれ込み、生れ



たまんまの姿、といっても肝心の所は五里霧中のような状態の金髪女が、両手吊りにされて、熊を思わす大男に鞭で責められ、泣き喚き叫んでがっくりと首を垂れて失神しちまう場面など見ると、四十才半ばを過ぎ、物理的刺激によらなければ、いざ鎌倉とならぬのが、あら不思議ムックリと起上るので、オレはS男かなと半ば嬉しいような嬉しくないような気持になるのであります。ところが、十有余年の古女房を相手にプレイをすると、なぜか鞭振る手に力が入りません。後手縛りで、ドデカイ尻をグイと持ち上げた女房は、ドウセ大シタコトデキナイワ、と我が心の中を読みとってか、女ノオ尻ワ皮下脂肪が厚イから、少シ位平気ヨ、などと不遜な言葉を吐くのであります。ならば泣き声あげさせてくれようと、いささか怒りもて鞭を巨大な肉塊に叩きつける。「イタイッ、イタイジャナイノヨウ」と前言を直ちに翻して口を尖らす。「ごめんごめん、つい力が入っちゃって」とか何んとか云いながら、うろたえて軟膏など塗って差上げる始末なのであります。

ですから私はS気半分ノーマル半分、つまりは当り前の人間ということになるのでありますしょうか。

さて、そんな私にある日、とんでもない話が持ち込まれたのであります。数年前から懇意にして戴いているA氏から、近日中に某女性とプレイをするのだが、については見学がてらプレイの助手など務めてはくれまいか、という全く棚からボタ餅式の話でありました。なにしろ女房以外の女性を責めたことの皆無な私のこと、こんなオイシイ話はありません。いやこれは私だけに限ったことではないでしょう。およそS男性にとってこんな嬉しいこととはない筈であります。敵は何万人ありとも我往かんというのが男の性であります。ましてやSMプレイとなったら、よほどの信頼と



いか愛情がなければ不可能に近いものであります。大げさにいえば千載一遇の機会ともいえるでしょう。二つ返事で承知したのはいうまでもありません。かくて、私は小学生の遠足を待ち侘びるような心境でプレイの当日を迎えたのであります。

場所は都内の某デラックスホテル。エレベーターでぐんぐん上って入った部屋を見た私は、何しろ生れて始めて、この種の場所に来たので、もうウロウロキョロキョロ。

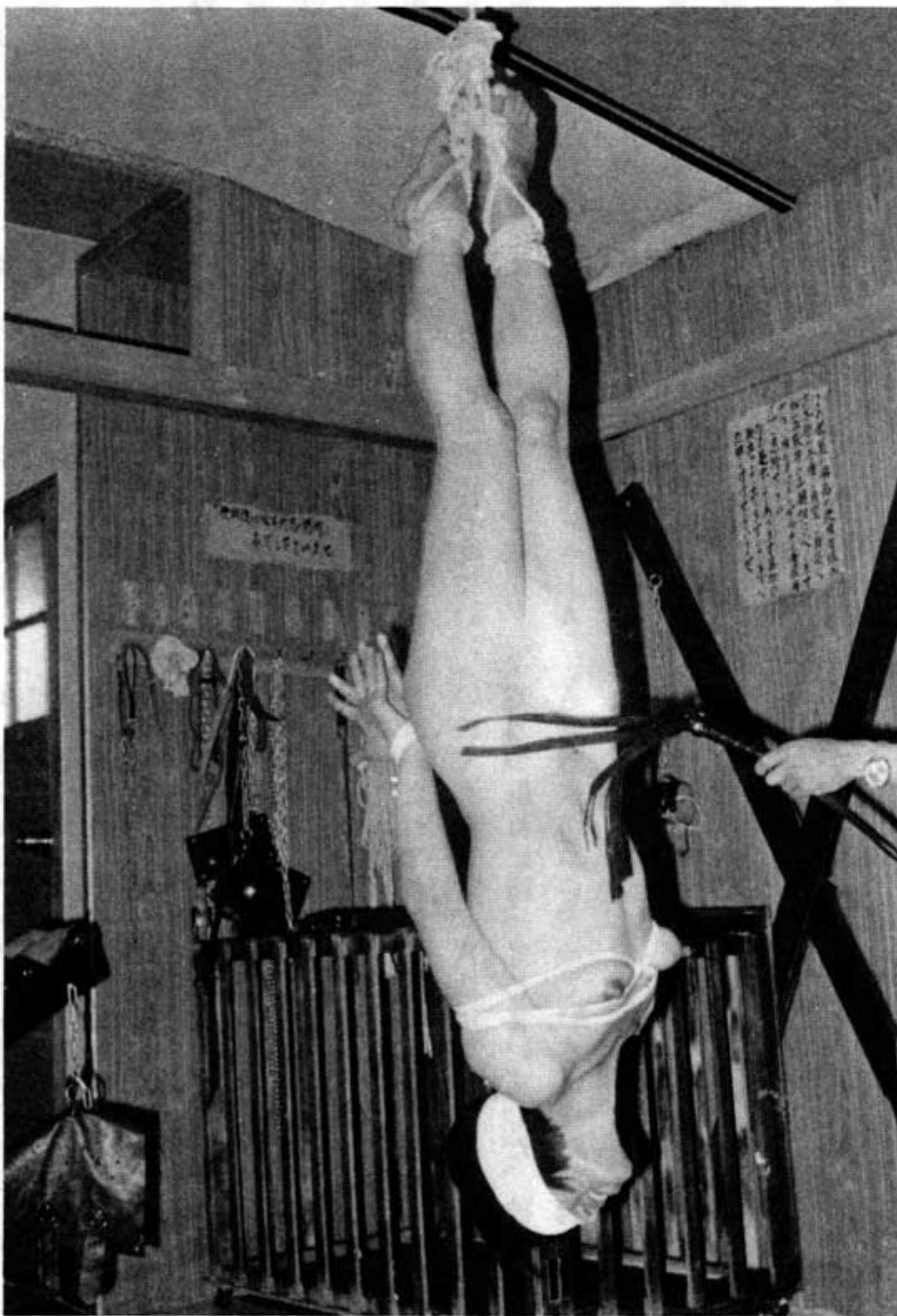
大きな部屋で二つに仕切られていて、片方にはテレビのピンク番組みで見たことのある例の回転ベットやテレビ付きの、ナニを致す部屋。テレビに映る自分達の痴態にハッスルしてからみ合う男女の光景が浮んできて、早



や昂奮気味。しかし、それは当り前の部屋として、もう一方の部屋を見て、私はギョロ目を一層ギョロつかせたのであります。その部屋こそが目的のそれで、S男性ならば一度は利用したい部屋でありましょう。

まず、目についたのは人という字を寝かせたような型の黒い台。これは一体どのようなに

使用するのか、それは後で分ったのであります。使用するのは、人の字型に台に縛りつけられた女性は、如何なる目に合うのか、想像がつく筈でありました。次は同じく黒色の三角木馬。本来のそれは三角の稜線が尖っていて、それに跨った女囚は苦痛に呻吟するのであります。その木馬は上が平らになっており、むしろ別



の使用法があるのであります。さらに、部屋の中央、天井から滑車を通して太いロープがダラリとぶら下っており、部屋の隅には手枷足枷、太い鎖のついた鉄の玉そして九尾の狐ならぬ皮鞭を始めとして、各種の鞭が異様な熱気をはらんで勢揃いしているのであります。

それらの大道具小道具によって責められる女性の実存することを証明するものが、素人探偵よろしくギョロついていた私の目に映ったのであります。それは何か。これも後で分ったのであります。三角木馬と人の字型の責め台につけられた手枷足枷が、半ばこわれていたのであります。これは何を意味するか、いうまでもないことでありましょう。留め金があぶっこわれるほどM女は悶え狂ったに違ひありません。さらに、人の字台には黒いレザー様のカバーの上に、白いローソクの雫の固まりが点々とへばりついていたのであります。ムムッ、やりますなあ。心の中で私は呻き、S的昂奮が体の中をかけ巡るのを感じたのであります。

こんな私の心の中を知ってか知らずか、B子さんはA氏と並んで椅子に腰掛け、にこやかに何やら話しております。年令の頃なら二

十五、六でしょうか。ショートカットのごく普通の女性です。話しぶりを聞くと仲々のインテリ女性のように、これまた博学多彩のA氏とは馬が合う様子。全く人は見かけによらぬもの、A氏といいB子さんといい、SMプレイなどというオソロシイことをする人達には見えないのであります。とくにA氏は人品といい知識の豊富さといい、どこかの大学の先生のようなであります。私は大いに尊敬の念を持っており、SMプレイとは別に考えていたほどののであります。

余談はとも角として、コーヒーにジュースで一服した我々三人は「さて時間もなくなりますから始めましょう」というA氏の言葉に立ち上ったのであります。

愈々プレイ開始。おとなしそうな可愛い子ちゃん風の彼女が果してどんな反応を見せる

か、私の心はワクワクと弾んできました。

プレイの手始めは吊りでありました。目かくしをされ、視界を奪われた彼女は、その時は未だ服を着たままでありましたが、両手首を合わせて、天井から大蛇のように垂れ下ったロープで、つま先立ちに吊り下げられました。ロープを引っ張り固定するのは私の役目。これから一体どんな目に合わされるのか、彼女は耳だけで私達の様子を知るしか仕方がないのであります。A氏は彼女の膝を曲げさせて二つ折りに縛ってしまいました。彼女はまるで糞虫がぶら下っているような状態でゆらゆらと揺れております。小柄な彼女なのに柱に巻きつけたロープがギシギシと音をたてるほどの重みを感じます。

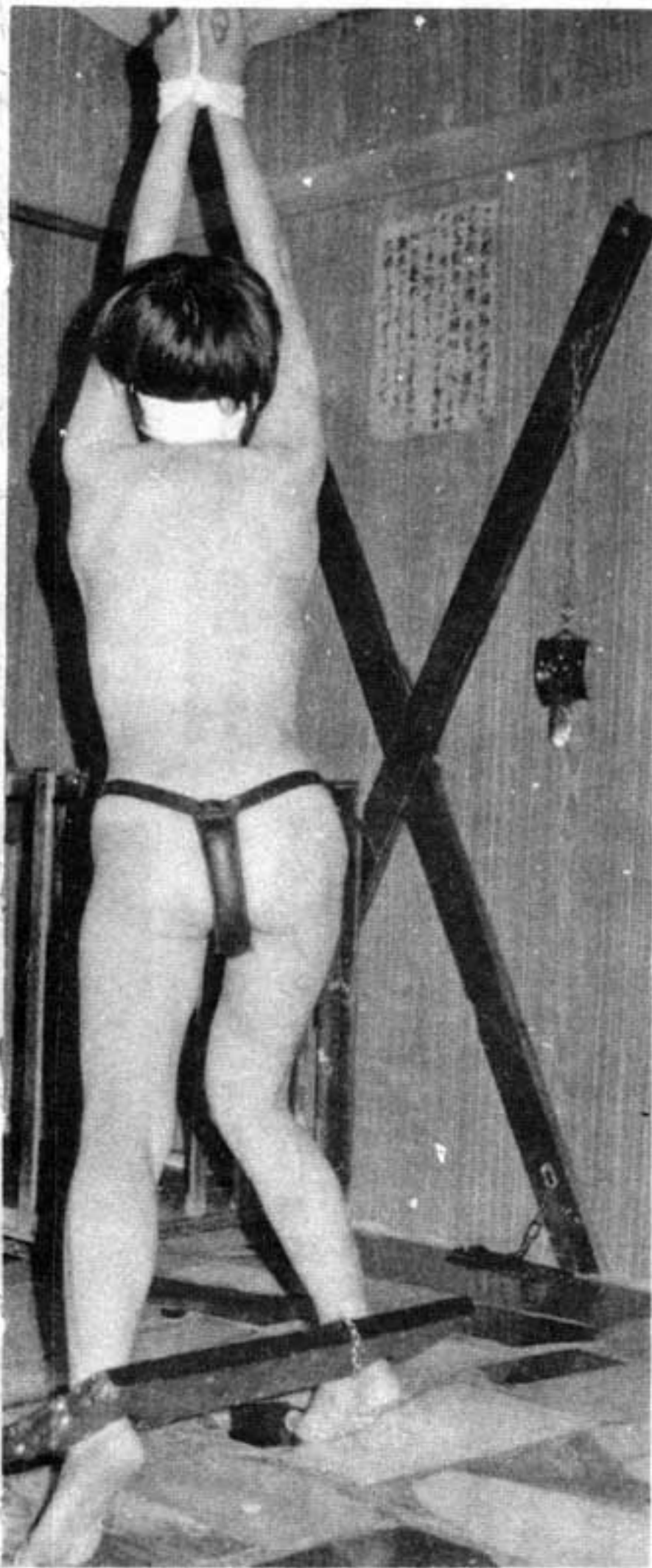
これはプレイの序曲と云うべきもので、次からが愈々私の待ち兼ねた彼女の裸身を露わ

にしたプレイが展開されたのであります。

鞭責めのあと 天狗の面で前門を責め

直立両手吊りにもどした彼女に近ずいたA氏は、彼女を床の上に横臥させたかと思うと、いささか強引に彼女のストラックスに手をかけ引き下げたのであります。と思うと続いて、茶色のパンストを、さらに純白のパンティをも一気に膝の辺りまでグイグイっと。

アアッ。彼女の声ではありません。私が口の中で叫んだのであります。勿論上半身の方も二つの乳房を遠慮なく露出させてしまいました。服が上と下に分断され、乳房もお臍も、そして、小高き丘の茂みも露わになってしまったのであります。私のギョロ目も必然的に大腿からせり上ってピーナスの丘に注がれました。ムムッ。またもや私は心の中で歎声をあげました。仰向けの彼女は手首が痛むか、膝を曲げて立てているのですが、それが反って丘を高くしているのか。その茂み濃さは、彼女の愛らしい容貌からは想像できぬほどなのであります。やさしい、可愛いといった女性に対する一般的観念をぶちこわすよ



うな遅しいばかりのそれを見ると、私は妙に敵愾心にも似た征服欲を覚えるのであります。いえ、S的昂奮をかき立てられるともいえません。

A氏は、両手吊りのままの彼女にうつぶせになるように命じました。両手首は縛ったまま、ブラウスもストラックスもつけたままの彼女が、膝についてうつ伏せになると、A氏はまたもや、つるりとばかり彼女のお尻を裸にしたのであります。太ってはいませんが、背中から尻にかけての線は女性特有のカーブを描き、バック攻めの好きな私の下半身を熱くさせます。A氏は私の尻打ち好きを知っていて、

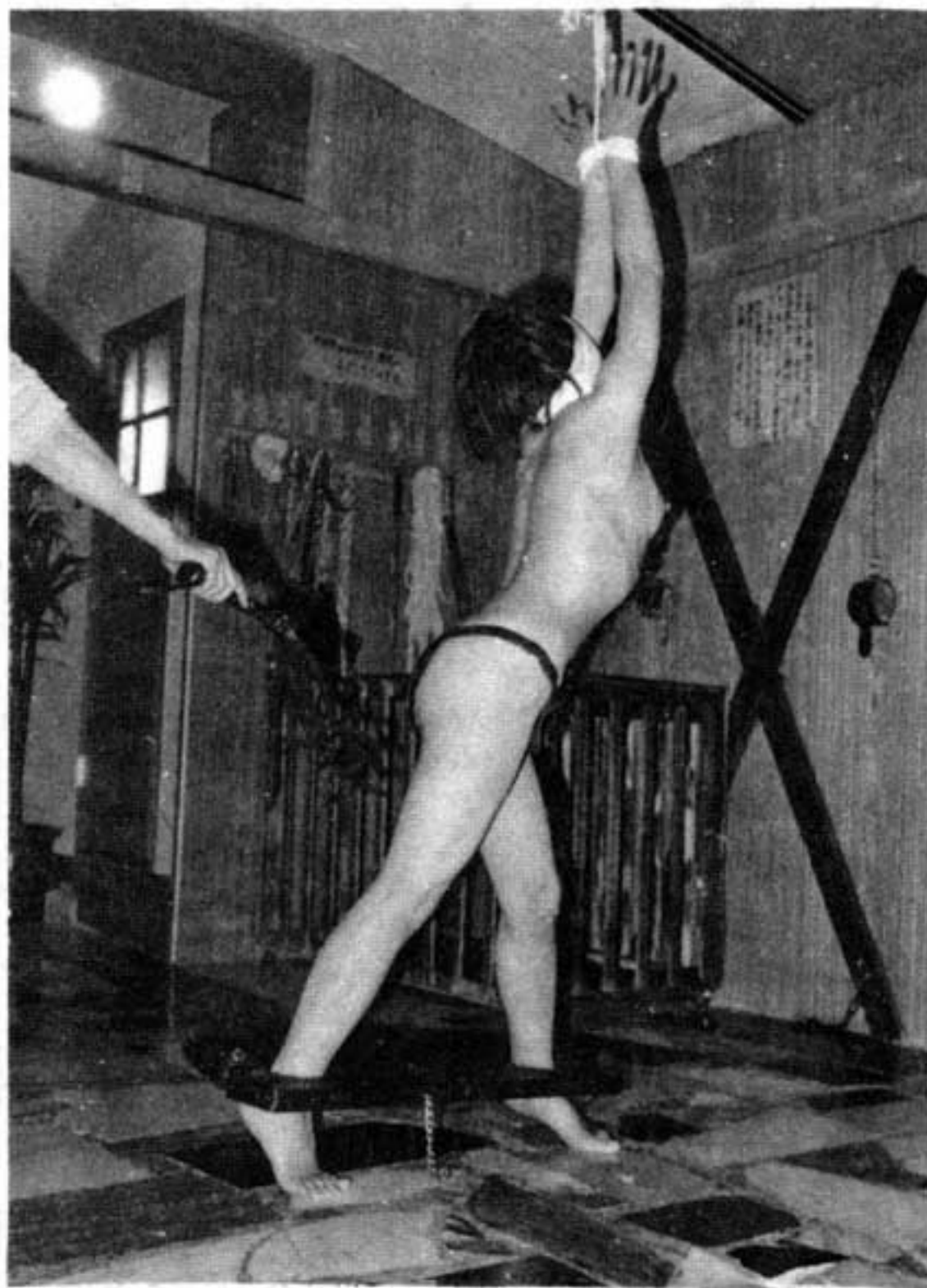
鞭を手渡して「どうぞ遠慮なく」といったのであります。なんたる幸せ、私は九尾の鞭を手にとると、まずは軽く一振りしました。ピ



シツという音の小気味よさ、私の女房のようにドデカイ尻ではありませんが、くびれた腰から張り出した悩ましい尻であります。続いてまた一打。ウッウーッと、彼女は小さく呻きました。真白い肌にはもう数条の赤い筋が浮きでました。A氏のカメラがパッパッと光る。

私は彼女の尻を二三度撫でておいてまた鞭をとりました。ヒクヒクと肌がふるえ、左右に揺れる白桃の尻。どんどん増える赤い鞭跡は飛躍的に私の昂奮を高めたのであります。

一しきり鞭打ちを行った後は、淫ら責めとなったのであります。A氏は持参の黒いバッグの中から、なんと例の天狗の面を取り出したのであります。今度は一糸も纏わぬ生まれたまんまの姿にされた彼女、後手縛りで仰向けに床に寝かされ、天狗様の長き鼻で責められると、さすがに忍耐強い彼女も歓喜の声を



あげたのであります。A氏は何んと慈愛深き人でありましょうか。天狗ちゃんを私に渡すと「喜ばしてやってください」といったではありませんか。その頃には、もうすっかりS男の気分になっていた私は、彼女の貞操を一気に破らんとその天狗の鼻を突撃せしめたのであります。ありますが、あら不思議、わが女房であれば何んなく成功する筈が、なんと侵入を撃退されたのであります。いかなる障害の故か、私はいやらしくも唾液など使っていると、A氏が傍から「彼女は名器なのですよ」という。

正しくその通り、その後、処女を奪うが如く悪戦苦闘する破目になったのであります。

ところで、この道の達人はどういう訳か、SMプレイは吊り責めをもって究極とする、ということとをSM雑誌で読んだ覚えがありますが、A氏もまた、吊り責めが好みらしく、先程とは違って素っ裸の彼女を、今度は逆さ吊りにしたのであります。なる程、吊り責めは最も人間性を無視した責めといえるかも知れません。足首を縛られて、ぐいぐいと引き上げられた全裸の女体は下から見上げるその光景の素晴らしさ。もはや彼女は人間ではなく、完全に一個の物体と化した観があります。空中でゆらゆら揺れる彼女の肉体は、善悪を放てきし得たとしたらその乳房に下腹に、あるいは股間に残虐なる槍を通すかも知れない衝動を起こさせます。かのムッソリーニ夫人が逆さに吊るされ、スカートの巻くれ下ったのを老夫人がなおしてやったという話が想い出されましたが、その時私の描いた妄想では、彼女の脚を開いて吊り、さっきの天狗の面で責めながら、血が頭に下って苦しむ彼女の口中に、私の肉棒を含ませたいというものでありました。

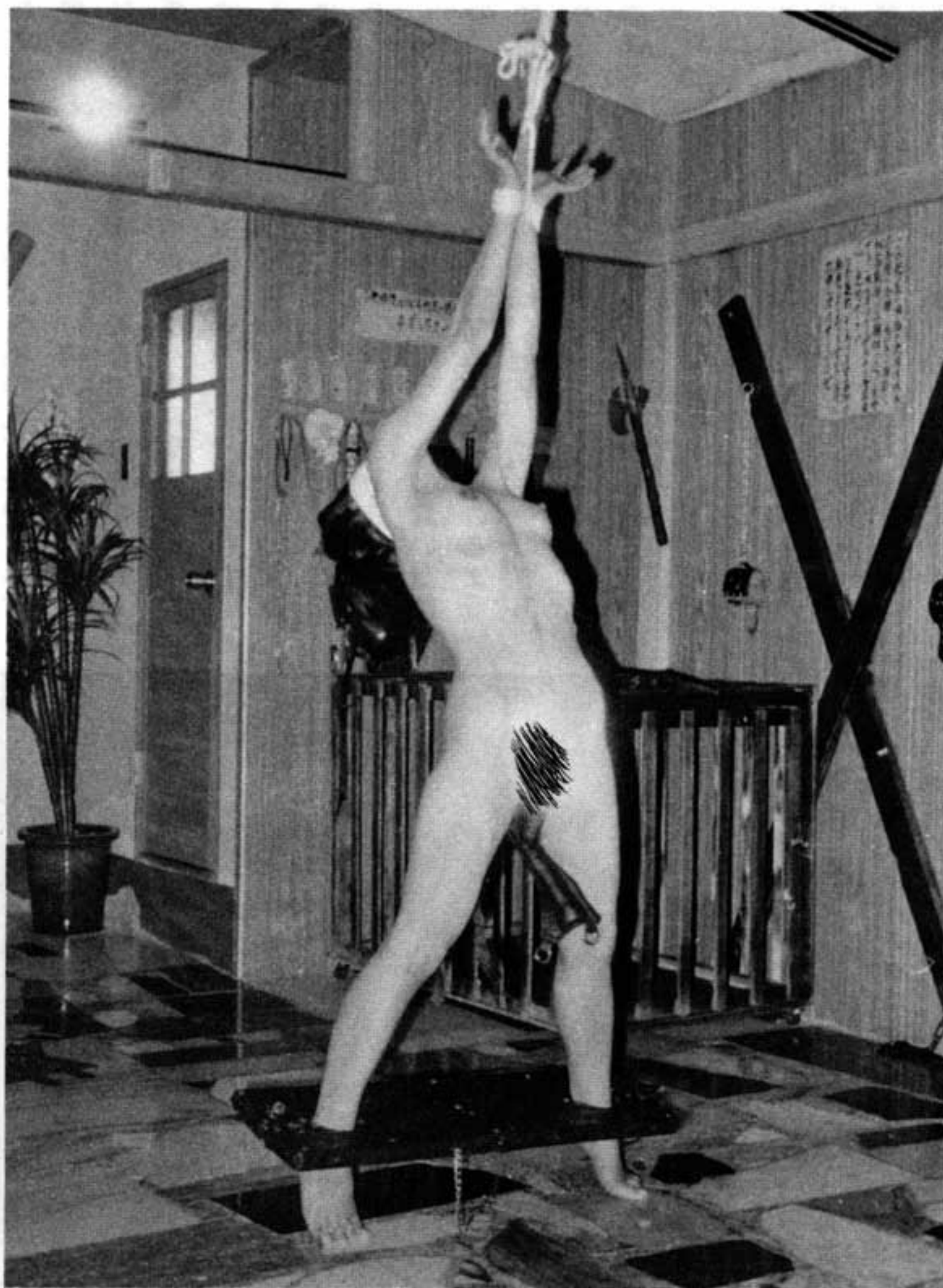
前門、後門を突起物で閉鎖する貞操帯に

逆さ吊りは長くは出来ず、私の妄想は文字通りに終わりましたが、彼女を正常な位置に戻すべく、ロープをゆるめて、私が彼女を抱き下ろそうとした時、危うく床に落としそうになり、A氏が素早く抱きとめて危機を救ってくれるというハプニングが起きました。プレイも本格的になると注意が肝要という一幕。どの位の時間が経ったでしょうか。一服した後、プレイ再開。何しろ一時間〇万円という部屋の使用料金であります。のんびりはしてられません。それに温厚で物静かなA氏も大分ハッスルしてきたようであります。プレイが佳境に入ってきたというべきでありましょう。彼女も疲れも見せず、A氏にいわれるがままに、両手吊りで足枷をはめられたのであります。天狗の面に続いてA氏が取り出したのは黒い貞操帯。といっても並みの貞操帯にあらず。前門後門を突起物で閉鎖してしまう代物。A氏は一たん彼女を三角木馬にのせたのですが、気に入らぬらしく、またまた両手吊りの足枷を施し、この貞操帯を彼

女に着用させるべく、前門はA氏が何なく塞いだのですが、アヌスを受持った私がドジでまごまご。すると、A氏は荒々しくも、小さな突起物を一気に彼女のアヌスへ……。さすがの彼女も呻いたのであります。私が油をつけたらとか、唾液をつけてなどとモタツイているのとは対照的なA氏の行為、この辺が大家と素人の違いかなと妙な所で感心したのであります。

私が妙に気分が昂揚してきたのとは反対に、彼女の後から迫り、乳房などを愛撫していると、A氏はまたもや鞭打ちを指示。私は未練がましく左手で彼女の柔かい乳房を揉みながら、可愛いお尻に鞭を叩きつけたのであります。SM小説ですと、ここでは「ヒューッヒューッ」などという女の悲鳴があがるのですが、本当のM女である彼女は違うのであります。「ウム、ウムッ」というような呻き声しか発しなかったものであります。それでいて、私が無遠慮に延ばした彼女の股間には愛の滴りが伝わっていたのであります。いえ、彼女の肌は昂奮に汗で濡れ、きれいな歯並びが現れていたのであります。

私が力をこめ一打を加えた時、何かが起こりました。A氏が急いでカメラを置いて飛ん



できました。それはどうしてかという、貞操帯がゆるんだのか、前の方の黒い突起物はずれて抜け、ぶら下がってしまったのであります。「いいですよ、そのまま、そのまま」もとに戻そうとする私を制してA氏がいました。ぐっとのけぞった彼女の脚の間からは

み出したそれが、妙にエロチックと滑稽なムードをかもし出していたのであります。さて、プレイも愈々ラストを迎えました。最後の仕上げは、かねてより私が期待していた人の字型の責め台によって行われたのであります。目かくしをされたままの彼女は、

台に乗るようにいわれたのですが、これが逆に乗ってしまったので、A氏は笑い転げ、私もなぜかつられて笑ってしまったのであります。緊張が連続すると、ちよっとしたことでも感情に影響するのでありましようか。

その台の型通り、彼女は台の上に仰臥しました。両手は頭の上に合わせて縛り、足は台に備えつけられた皮の枷とロープで固定したのであります。この枷の留め金がこわれていたのは先に書いた通りであります。そこを何とか繕ったのですが、人の字型の台のこと、当然に彼女は開股のポーズを余儀なくされたのであります。乳房の上方にも黒いバンドが締められ、彼女は正に組板に乗った鯉。そして料理人は和田平助を自称する私。

恥部を大きく開かれ

た責め台の上で

「どうぞ好きなように彼女を、悦ばせてください」。そういうと、A氏はカメラを持って後ろに下がりました。

「では遠慮なく」

私はやおら彼女の乳房に手を当てたのであります。冷やかだった彼女の肌はもう汗で濡

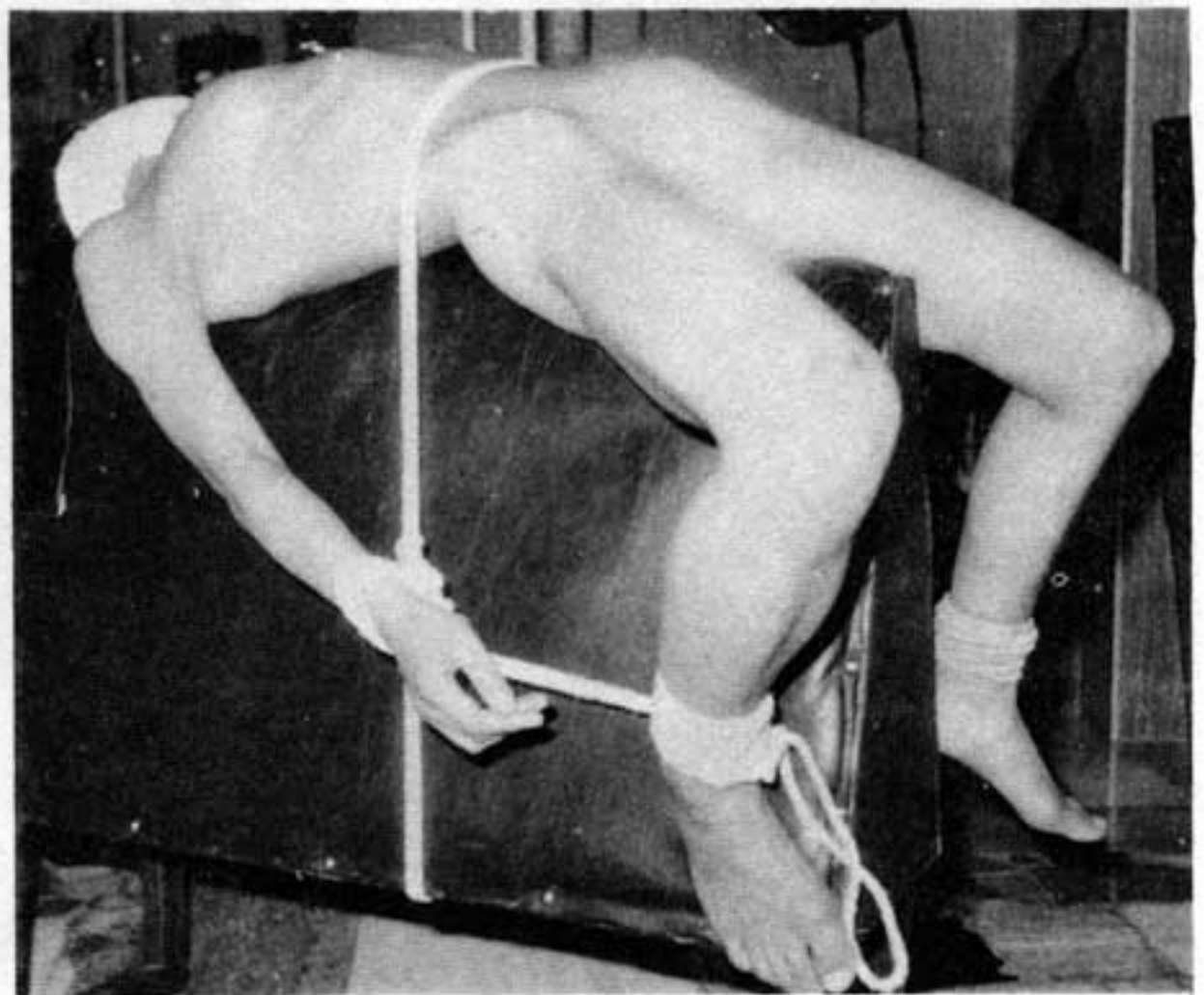
れております。やや大きめの乳首をつまんで愛撫すると、彼女は白いきれいな歯の間から熱い息を吐き喘ぎ始めたのであります。若く張りのある彼女の肉体は、中年男の欲望をいやが上にも煽ったのであります。私の手は、もう私の指操命令系統から逸脱したかのように、左手は乳房に、そして右手は股間に蛇のようにすべり込んでいったのであります。

「ハアッ、ハアッ」という彼女の荒い息使。固定されている彼女の太腿が捻れるように動めき、下腹が激しく上下してきたのであります。もう谷間の甘い匂いが立ちこめ、私の淫ら蛇のような指は、彼女の情感の汗でびっしょりとなっておりました。

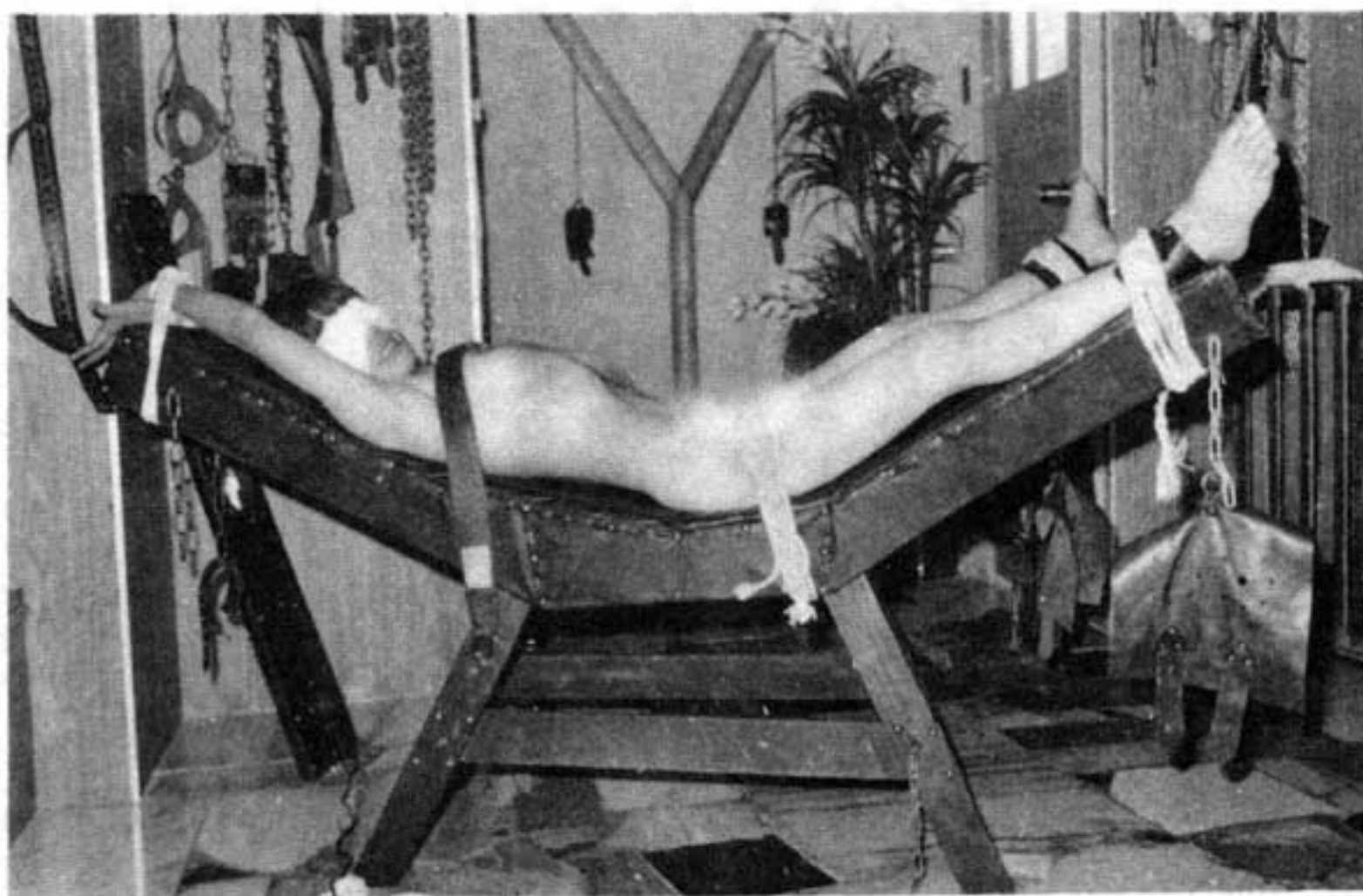
いくら信頼し敬愛するA氏の知人とはいえ、初対面の私に、アラレもない姿を露呈した上、体中をくまなく見られ、その上いやらしい指戯まで受けている彼女の心境は一体如何なるものでありましょうか。心の中では恥ずかしい、いやっ、と叫んでいるのかも知れませんが、彼女の身体は事実、私の指の凌辱に悦びを示しているのであります。

「アッ、アッ」

遂に彼女は声をあげ始めました。太腿がピクピクとふるえ腰がうねっています。私もま



た激しい昂奮にかられてきたのであります。その結果、最前は成就し得なかった天狗の面の使用を、私は内心に湧き上ってきたS的昂奮のおもむくままに、力をこめると彼女の抵抗を排するかのように、深々と彼女を征服したのであります。彼女の表情には苦痛にも似た歓喜の色が艶めかしく浮き上がりました。さて、その後、彼女を縛りつけたままの人の字台を立てたポーズをカメラに収めてすべてが終了したのであります。所要時間は三時



間。小柄な彼女が、よくもまあ、この長い時間、大の男二人の責めに堪えたと今更ながら感心したのでありますが、私はM女というものの姿を目の当りにして、ついぞ確めて見たくなり、プレイ終了後、彼女に質問したものであります。こんなことされて楽しい？。私

の短刀直入な問いに対して、彼女は微笑みながら答えたものです。

「いやだったらできませんわ」。

参ったア。これほど簡単明瞭な答えはないでありましょう。私も彼女にそう答えられて愚かな質問をしたものと後悔したのであります。

そういえば、彼女のプレイ中の様子は、小説のようなオーバーな声は出さなかったのですが、初めの吊り責めの時からして、己に低い呻き声を発していたのであります。そして



衣服をはぎとられた両手吊りでは、もうM的快感に昂奮していたのか、肌に汗を浮べていたのであります。その上鞭を浴びている最中も、私の妻のように、イタイッなんて言葉は一声も発しなかったにも拘わらず、愛の泉は溢れていたのであります。それとも一つ、彼女は嗜虐者の命令に忠実に従ったことでもあります。

プレイ後A氏は、彼女が多少忠実でなかったといったのですが、私には全く分らないことであります。そういえば「ここで浣腸されるのはイヤ」と云ったのは覚えておりますが、その他はすべてA氏の命ずるがまま、なすがままであったと思うのであります。

私の妻などは、彼女と比べたら月とすっぽん、まるでダメなのであります。ちょっと鞭打ちを始めても、アヌスを指で責めても、「ヤメテエッ、イタイッ。モウイヤッ」などとは

ざいて抵抗を示すのであります。

ガラス製の浣腸器やパイプなど、折角集めた責め具一式を私に無断で処分しちまい「あまり変なことに熱中しないでください」と、私に冷水をぶっかけるようなことをいうのであります。

M女とはなんという素晴らしい女性でしようか。男の意のままになることに自ら喜びを感じずる女性、たとえ男の行為に苦痛が伴ったとしても、それをも愛と感じ快感として受け入れられる女性。そんな女性は、やはり数少いに違いありません。

私は彼女を知って、A氏に対して羨望の念を抱くと同時に、彼女をそこまで調教し開発したのは、やはりA氏の人柄のなせるわざであろうと思った次第であります。

車で途中まできて、電車に乗るといふ彼女に、A氏と共に別れの会釈をしながら、私は言葉ではうまく云えない親しみと愛情の念を抱いていたのであります。いつの日か、また彼女と逢えるだろうか、A氏には失礼ながら、私は彼女の小柄な体が妙にいとおしく思えたのであります。



●ミニレポート

初めてのS M写真

大岡光生

二月二十日、日曜日——この日、東京の空は快晴だった。僕は小学生が遠足に行くように、朝からわくわくして落ちつかなかった。

僕が会員になっているカメラクラブで、いよいよ「女性緊縛写真」を撮ることになって待ちに待った日がきたからなのだ。人には話したこともないが、僕はS Mの関心がやたらと強い。S 出版社の雑誌を創刊以来欠かさず買っているのも、ほかの会社のものにならない豊富なフォトが魅力なせいで、中との針金をはずして自分好みの写真集にしたのしんでいる。だが、まだ自分でモデルをかりて、撮影するところまでいっていなかった。ワイフはヌードの習作までぐらいいなら絶体秘密の条件でモデルになってくれるのだが、それ以上のことはしてくれない。だから、この日撮った緊縛写真が僕の第一作目ということになる。

参加会員が多いため、一時間ずつ三回にわけて撮影することになっていたトップに僕の予約が受けつけられていた。

一時になってもモデルさんは顔を出さなかった。先生や助手がひっきりなしに電話をしていた。やはり、S M写真となるとモデルのなり手がないのだろうかと、お流れになりそうなの不安を感じ出したところにモデルさんがかけこんできた。

モデルさんが紹介され、緊縛指導のH氏とA氏が続いて挨拶された。H氏は全く知らない人だがA氏の名前はどこかで見た記憶もあったし、ニッポン放送の深夜番組で、女流作家戸川昌子さんと、電話していた人では





ないか、などとフト思ったが、そんなことより、目の前で実地に縛りがはじまって、僕は生っぱのみこんで全神経を集中した。長襦袢姿に胸高縛りの後手高手小手は、ブリフの下でイキ苦しくなったムスコが腹をたててふんぞりかえり、僕が思わず慌てたぐらいなまめかしかった。襟をおしひろげ、乳房がのぞくように責めの情感を変えて行くと、僕は表情ゆたかなモデルさんに一目惚れしてしまったように、同じポーズでも三回五回とシャッターを切りまくり、たちまちフィルムが終ってチェンジする指先がもどかしかった。A氏は縛りをきめ、H氏がそれに細かな注意を払って露骨すぎないようにポーズするのが、とてもイキがあっっていて、ねた

ましく思ってしまうほどだった。モデルさんも美しいし、一瞬一瞬、悶え苦しんでいるような絶妙な表情をする。フクレっ面でしおしおヌードになってくれるワイフとは、プロと素人の違いはあるにしても雲泥の差で、またたく間に予定時間がすぎってしまった。

四国や沖縄から、SM写真が写せるということで喜び勇んできた人たちが、興奮さめやらぬ顔付きで誘いあい喫茶店へ向うのを尻目に、僕は一刻も早く現像処理にかかりたくなって家路を急いだ。

フィルムは自家処理を考えて全部モノクロ……でも僕の網膜は、いつでもはつきりと色彩を呼びおこし、カラフルな光景を再現してくれる。フィルム現像の所要時間二時間。乾燥してプリントが出来るようになるまで、待ち遠しくてたまらなかったが、吊し干しのフィルムをすかせて



眺めると、数時間前の興奮が再びよみがえってきた。

「なんかいつもとは違うわね」と、皮肉たっぷりにいうワイフを早く眠らせてしまわぬ限り、キッチンを占領して暗室がわりに使うことができない。一目惚れしてしまったモデルさんを思い出しながら、僕自身の興奮もしずめるために、せっせとセックスにはげんで、ワイフを温和しくさせてしまった後で、いよいよ、独占・男の時間、とすることが実現した。

印画紙をセットして、わずかな時間露光し現像液のバットに浸す。その初めての現像はかっ

てない期待と感激を味わせてくれた。

いつもなら黙々と作業する僕だが、ついつい、満悦感から一人ごとをいって、それが熟睡していたはずのワイフに聞えてしまったらしい。突然暗幕をめぐって寝呆け顔がのぞき、僕は飛び上って驚いた。あわゆいところで印画紙を常夜灯にさらしてしまうのは防げたが、ワイフをどやしつけるわけにもいかず、薬品くさいキッチンに入れて、出来上ったばかりの緊縛フォトを見させた。

「あっきた。こんなことで朝からそわそわしていたの、あなたって……」

ワイフは軽蔑し、散々僕をく





さして立ち去った。しかし、あやしいと思って気がかりだった秘密を知ったあとは、気がせいせいたのか、またたくまに高軀をかきはじめ、おかげで僕の仕事はかえってスムーズにやれることになった。

撮影会での作品では、SM大衆誌の読者投稿フォトのように、刺激のある光景を記録したものにはならないが、僕自身は大いに満足を感じている。できるなら今後も積極的に映像追求をしたいと思うのだ。

S出版の「SMモデル募集」では、一時間につき一万円を払います。と出演料が示されている。それを見ると、モデルのギャラが高くて、とても僕一人ではプロのモデルさんなどのためそうにない。だから、もしご夫

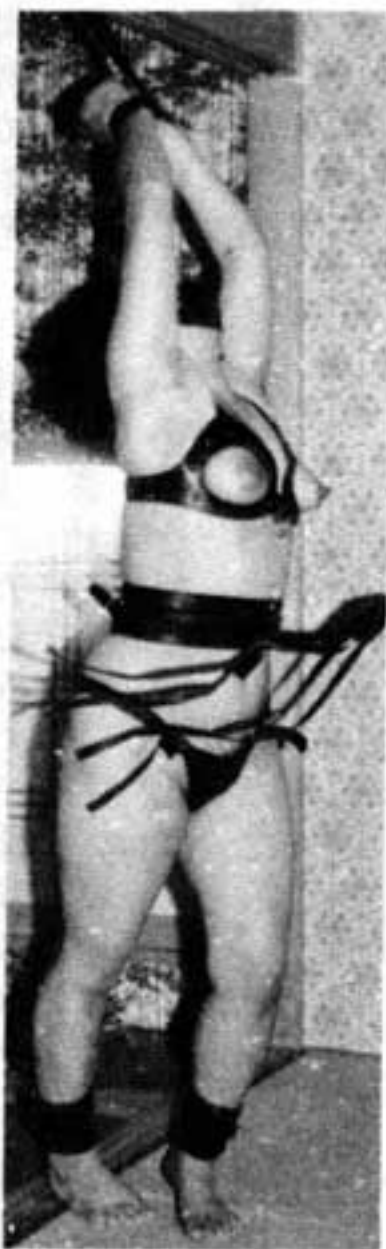


婦で写真を残しておきたいのだが、カメラマンになってくれないか、というような話があれば僕は協力させていただきたいと思う。アルバム作りの諸経費は当方もちで、ということにご賛同くださる方はおられないだろうか。

僕の友人に、SMイメージ画ばかり描いているF・A君がいる。彼の画を見せるとワイフはとたんにシカメッ面してしまうが、僕は彼のイメージを写真で表現したくてたまらない昨今である。

次号予告

次号のハイライトは、「奇譚クラブ」で有名を馳せた奴隷妻・佐野みさ子のカメラ・ハントである。久々の登場であるが、その奴隷妻としてのマゾ癖はまったく変っていない、あいか



わらずの奴隷妻ぶりを見せてくれている。

そのフォト集は、別冊発表されるはずである。

今号の中断した「妊婦緊縛」



の続編を掲載する予定である。臨月を迎えたお腹を縛るロープが妖しい緊縛美をかもしだしている。

SMプレイかSMゲームかという鈴木広一氏の提案は、前編

だけではその趣旨がわからないかもしれません。後編は次号に掲載しますが、ご意見がありましたら、どしどしお寄せください。

【原稿の募集について】

誕生したばかりの雑誌ですので、ご愛読者のご意見を切望しております。

体験手記、告白、プレイルポなど、どしどしお寄せいただきたいと思います。

耽奇録

前編

貞操帯に

魅せられて

瀬川 利雄

今から六、七年前——昭和四十五年前後はSM誌の戦国時代であったのではなからうか。

北欧では「性の解放」化が進み、工業生産面では「日本は猿まね」と批判され通しだった製品に悪評をはね返えす程の独自性をうち出して、貿易収支は各国羨望の黒字を重ね続けたが、その中で「なんでもアメリカ」

の傾向であった日本とその島国民族が急に浮かれ出した珍現象が起った。

ポルノ解禁間近し、という迷惑である。それが北欧への憧れとなり、「日本の猿まね」が再び始められようとしていた。だが、その追従の姿勢は、幸にして依怙地な、明治臭い為政者、剣幕に睨まれて、猿真似の汚名だけ

は聞けず仕舞いになったのは御存知の通り。

その代わり「日本文化低国」という自嘲自棄の音が、欲求不満の現象となって聞えている。つまりSM誌と専門誌以外での一般的な読み物の、SM記事、などの氾濫は、その反映とみなせるし、ポルノの代換物である。寝食忘れて働き通しに見られる、勤勉な日本人、は、ポルノなど不用と思いきや、さにあらずで潜行化の色を濃くし、まがい物や不法な輸入品の模写模造物が特需景気を呼んでいるわけである。小生、世相風俗を評論するつもりはサラサラないからこの、おかしみに満ちた時期、を過して愉悦の境地に辿りついた天邪鬼ぶりを披露することにする。

「昭和四十五年」は、小生にとってエポックなのだ。その前の年から大学受験準備のため上京し、一浪の身を予備校通いでヒ

マ弄ぶこともなく、つとめて楽天的に暮していたが、東京は「金」さえあれば本当に住心地がいい都会だった。

百円コーヒーが二十枚綴りのチケットを買っておけば八十円になる喫茶店の常連となり、その店で知り合ったウェイトレスに、セックスの回数契約を申し込まれて週二回は愛人交際もしたし、オンスもイライラも経験しないで済んでいた。

彼女は当時二十一才。同県人ではなかったが県境を挟んで隣り合わせの市出身者。東京暮らしは二年先輩でドレメの生徒であった。苗字をはぶいて、呼び馴れた名だけをあげておくことは支障ないと思うので、以下、その人の名、理恵、で物語って行くことにするが、理恵は実姉の嫁ぎ先の家から通っていて、理恵との密会日は姉夫婦にとって都合いい歓楽日の提供になっていた。

といっても、三つ年上の見合
い結婚した姉は、初めのうち外
泊する妹をひどくなじったらし
い。それも表面上のことで、実
際は妹を同居させたことも、外
泊を嫌ったことも自分の夫婦生
活を避ける意図が働いていたの
である。それだけ彼女の夫は執
拗であり、粗野でもあったのだ。
その原因が、なんと「奇譚クラ
ブ」という風俗誌。誌中、連載
中の「花と蛇」が夫へかなりの
影響を与えていたようだ。

理恵が年下の小生に言い寄っ
たのは、姉夫婦の派手な愛情交
歓に気兼ねしたことによるもの
で、小生との前はドレメの同窓
生の下宿や家で泊り、その間に
レズも経験していた。

五月五日子供の日——小生が
上京して約二月目のことである。
「お祝いであげる」と積極的
になった理恵が、初めて横にな
った小生を跨ぎ、密着した。レ
ズの体験はあっても異物挿入な

どしていないといいきっていた
理恵が処女喪失をし、小生も初
めて熱い秘奥に包含されたので
あった。それまでのヘビーペッ
ティングから、対等に歓喜を分
ち合うところへと急成長した二
人が、五・五デーを境いに親密
さを増したのはいうまでもない。

夏休みが近づく頃、小生は三
家庭の家庭教師のアルバイトを
獲得し、家からの仕送りを合わ
せると理恵との同棲も可能にな
った。しかし、それには理恵は
応じなかった。

今度は理恵の方が、姉の苦渋
察し出して義兄への無言の圧力
を加えるため、外泊を制限する
方に自ら転換していったのであ
る。実にその時の事情説明の中
から、小生はSMの知識を得た
のだ。

といっても、性そのもののへの
関心も年上の女性である理恵に
よって高められたことになるの
だが淑やかな面と開放的になる

面とがあって、その両面から小
生に女の肉体や心理を解き明し
てくれたわけであるから、決し
て悪い女であったことにはなら
ない。それどころか、彼女と出
会ったことによって、小生は灰
色の青春も知らずに過せたとき
えいえる。

小生への衝動

大学の学園紛争が起り、その
影響が受験予備校にも現われて
不安動揺する浪人が多い中で、

小生は郷里の両親の心配をよそ
に、マイペースを崩すことなく
過していたのも、理恵のお陰で
あった。高校時代からTVもF
Mラジオも耳障りになるような
ものから離れてる習慣で通して
いた小生は、理恵の話がなによ
りも気分転換に役立ったのであ
る。

義兄夫婦の話が次第に刺激性
を帯び、小生がエレクトリック
になると、マニキュアした白い指先

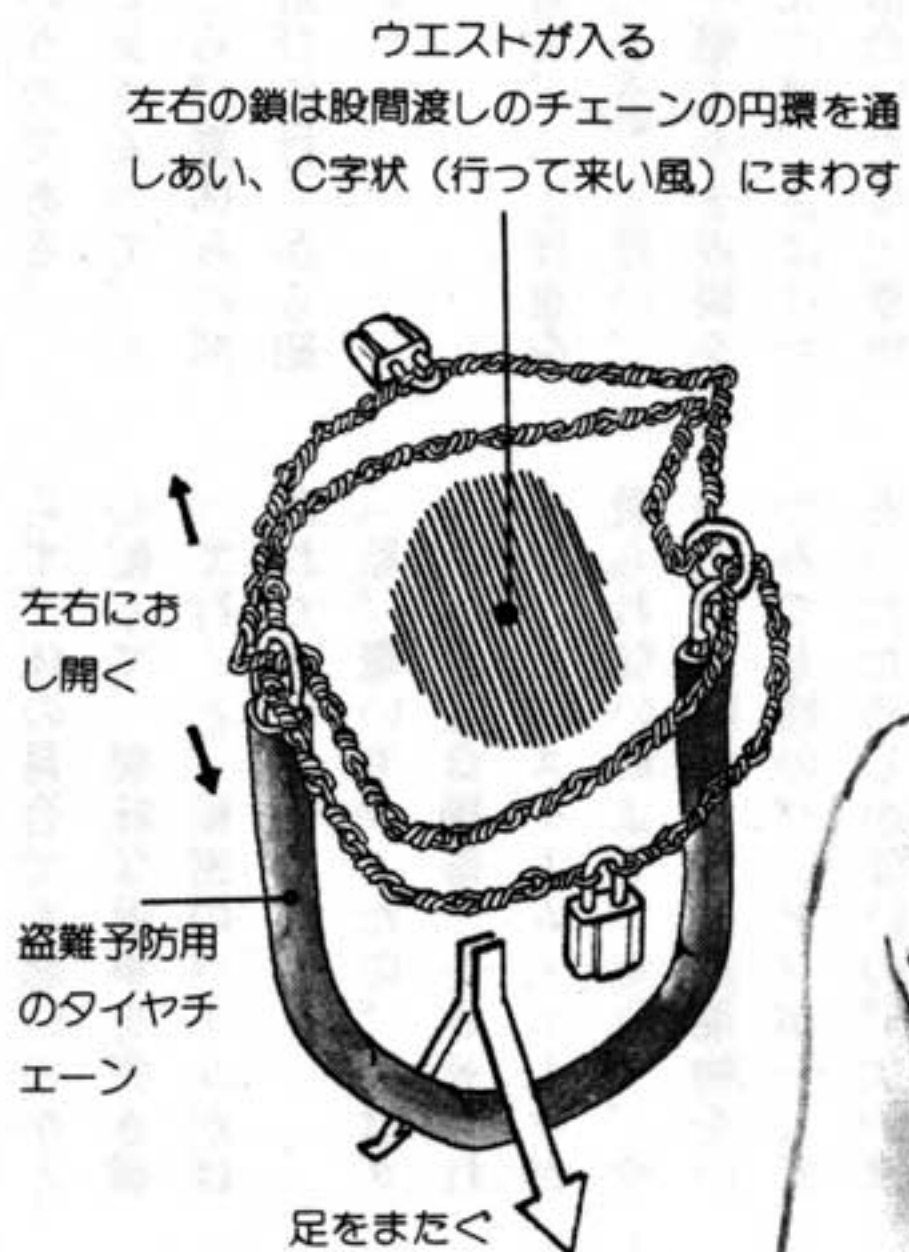
きでコンドームをうまく冠せ、
五・五デー以来のならわしにな
ったポーズで堪能を分ち合うの
だった。だが、不思議とその後
は話が変わってしまい、好奇心か
ら続きをせかせても気のりして
はこない。尤も小生も、理恵の
うっ伏した肩から踵までの美し
い背面全体の曲線を幾度か掌で
撫ぜるだけで、甘美な満足から
覚めて行くし、それ以上のこと
はわずらわしくなるのが常であ
った。

だが、断続的な話をつなぎ合
わせてみると次第に実妹が姉の
健康や境遇を気遣うことは余計
な世話焼きになって行き、控え
出したと思われる傾向を辿って
いた。

「このごろ、しっくりいって
るみたい。姉も図々しくなった
わ。朝だって寝坊してるし、義
兄の方が一人で朝御飯食べて、
あたふたと出掛けて行くんです
ものね。女って男の人によって

バージン・ベルト
出会いからの処女保護帯

多貫欣氏のアイデア



- 装着時には南京錠を鎖の一端にだけ通しがけしておく
- 仮装着後（パンティをはきかえる時の要領）鎖の他端を引寄せ施錠



バージン・ベルトは常用（昼夜を問わず）させておくもので、排泄には陰唇中断の状態から大陰唇外側へおしずらして行なうことで支障はない

スゴク変っちゃうのねえ……」
ばやく口の下から、夢見る面
持ちでこうもいうのである。

「……貴方のお兄さんって、ど
んな人なのかしら。夏休みに帰
ったら、時々遊びに行くから紹
介してくれない」
と。

小生も調子者で、ふと理恵を
兄の嫁に推薦しようかと思ひ、
家業をついで手堅く働き両親を
扶けている長兄には、さばけた
女性の方がお似合いだなど夢想
した。しかし、その話もすぐに
冷め、その年の夏は三、四回二
人で海へ出掛けただけで故郷に
は二人とも帰らずじまいだった。
その最後の海水浴となった夏
の日に、理恵が話して聞かせて
くれたことが、小生を妄執の虜
にする端緒となったのである。
小麦色に焼け、ビキニの跡を
くっきりと残した妹の肌を見て
姉が羨しように「海に浸ってみ
たいな、私も」と洩したような

のである。そこで姉に誘いをか
けたものの、全くその気にはな
らず、体の具合でも悪いのかと
心配して、曖昧な返事を突き破
って行くと、秘密のベールがは
がれたのだといって、

「私、驚いちゃったの。姉はダ
ンナから、貞操帯^{マリアージュ}をさせられ
ちゃって、スイーム・スーツが
着られないのよ……それで、や
つと謎が解けたの。洗濯物をい
つみても姉のパンティが干して
あったためしがないの。よっぽ
ど注意して始末してるんだと感
心してたのだけど……全く必要
がなかったんだわ。だって皮で
出来た男物のブリーフみたいな
貞操帯^{マリアージュ}だけで過ごさせられ
てたんですもの……」

との説明――

「へえ……本當ウ」
と、呆れたものの、まだその時
は、貞操帯^{マリアージュ}なる物の想像がつ
かず、ノーパンで生活している
女性であったとの事実の方がエ

ロティックに捕えられたのであ
った。

姉妹並んだ写真を見て、当時
ピンク映画といわれたポルノ的
映画に出ていた城山路子という
女優に似た姉だと思ったことの
ある人が、皮貞操帯を嵌められ
て暮している話は、日がたつに
つれて小生の胸をさわがせるよ
うになっていった。

「なんでそんな物させるのだい」
という素朴な質問から、理恵に
もさせてみたいと思うようにな
るまでには、そう日数もたたな
かった。だが、させる理由がな
いのだ。

彼女とは将来を約束した仲で
はない。それに進学を第一の目
標とし、なにがなんでも合格の
吉報を両親に届けることが先務
と誓っていた小生は、理恵を愛
人とも思っていないかった。そ
うした小生の消極的な態度は、
理恵にも感じるものがあつたら
しく、晩秋になると「受験勉強

の邪魔になるから」と思いやり
を見せながら、自然足が遠のい
て行つた。彼女が弟のような年
上の男より、明日にでもプロポ
ーズしてくれそうな恋人を探し
出している様子は、義兄を非難
誹謗しなくなったことなどから
窺えたし、喫茶ウェイトレスか
らバーのホステスに変わったこ
とが、男探し^{マリアージュ}を如実に物語っ
ていた。

理恵との関係

しかし、それで理恵との関係
がブツリと絶えたのではない。
彼女は弟との二人暮らしという嘘
も方便を適宜に使い、酔客をま
くための逃避所に小生の部屋を
活用していたのであつたし、彼
女の深夜の来訪も腹立たしく思
わなかったのであるから、何か
と双方で重宝しあっていたこと
になる。

その内に新しい年が明け、入
試を目前に控えて一日一日が貴

重且つ緊張の連続。いや、必死の追い込みという苦しい日々が続いた。

理恵は実の姉のように小生を氣遣ってくれたが、実の姉と書くにはそれなりの理由がある。つまり二人の間から性交歓は除外され、理恵は待望の恋人を得て、小生へは友情を注ぐだけに变化したからである。

「もう一と息のふんばりね。でも深刻になることはないわ、たとえ無念の涙をのんだって……また一年頑張りやいいの。その内に私みたいな年上の恋人ではなくて、可愛い綺麗な娘と会えるわ」

インスタントラーメンを作ってくれて、自分も熱い中華そばを食べながらいった理恵の言葉を

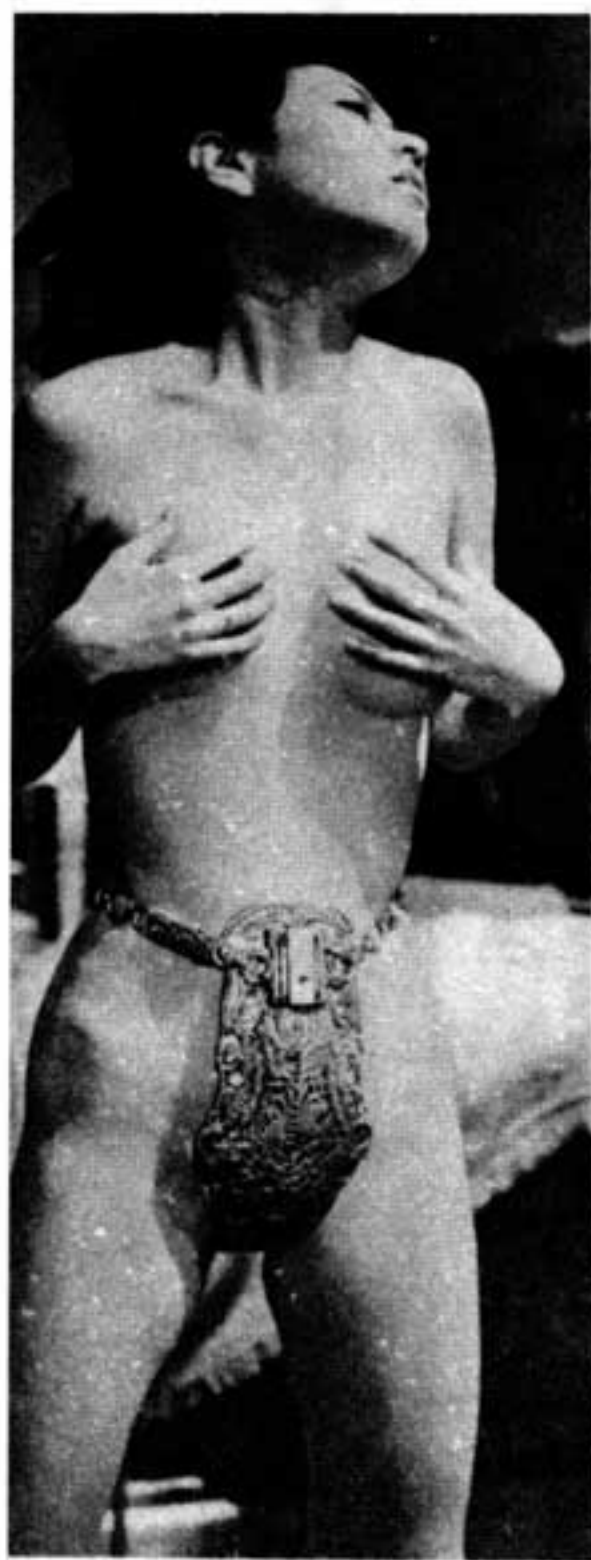
は、青天の霹靂であった。

理恵は小生に恋情を抱き、結婚を夢見て、それを締めたのだという……。更に、小生に失恋し、その反動で他の男に結婚をせがんだと十月の間を回想するそれには返す言葉がなかった。

「少し冗談というのが早すぎたかな。でも、貴方をお願いがあるの。私の高校時代の親友の妹さんで、今年女子高を卒業する人が、私を頼って東京に出て来たいといってるの。去年の夏にお

父さんが亡くなって、姉妹で残されたお母さんをみて上げなきゃならなくなったのだけど、そのためにも妹さんの方は洋裁の技術だけは勉強して手に職をつけたいというわけね。学資の方は遺産でなんとかするけど東京

日活映画 女の最前線「女狩り」より



へ出すことが身寄りがなくて不安だというので、『大丈夫、ま

かしというので』なんていっちゃったわけ。つまり、貴方をお願いというのは、その子のナイトになって貰いたいんだ。今度は姉弟ではなく、兄と妹で暮して欲しいのよその方が安全でしょ」

「何が安全なものか、舌なめずりして、獲って食っちゃうぞ。

大学にさえ受かったらええ机になんてしがみついちやいないから」

小生は、どこまでも気がききすぎて姉貴風吹かせる理恵にひたすら感嘆し、願ってもない依頼をませ返えしながら快諾した。

・好餌・を鼻っ面の先きに吊りさげられ、ラスト・スパートした効果はてきめんに現われて、受験戦争に雪辱を果たしたのはいうまでもないこと……。肩の荷がおりるや否や、むさ苦しい浪人暮しのアパートの部屋を、五日がかりで見映えよく整頓したの

であった。

こうしたいきさつがあつて、高井久美子とあいまみえたのは、四月始めの事であつた。

長々と前置きを書記してきたのは、小生はSM愛好者だが、緊縛趣味や鞭打などの嗜虐興味は薄く、フィティッシュ傾向に嗜好の占める分が多くて、SMマニアとはいいがたいと思つたからである。SMプレイの実践者と自ら断じて疑わない程多様な体験を経てきているならば、恐らくこれから書くこととすることから筆をおこすことが出来たに違いない。

・パンチoph・という新書版・体裁の雑誌が創刊されたのは、小生の高校在学中のことだ——地方都市の書店でも爆発的に売れて、進学コースなどと区別されガリ勉を強いられ世事にうとくなつた連中は、買いそびれたり売り切れて手に入らなかつたり……。その時ばかりは他の学

友に頭を下げ、回わし読みしたくらいであった。

小生も噂さで右往左往した一人で、やっと順番が巡ってきたポケット・パンチに、更紙二枚重ねのカバーをつけて持ち帰り、予習の振りして読み飛ばし、家人が寝静まったあとになって、やっとヌード写真の頁を拡げてニタついていた。それでも常に警戒心をあたりへ配り、「母親接近」の気配があるとノートの下に押し込むなど、苦心惨胆な有様だったのである。

東京へ出て大学生活を送るという希望は、羽をのばして抑圧された分まで取戻すという野望に通じていたわけで、そのため「見ざる、聞かざる、話ざる」のごまかしは、真面目な高校生と周囲に思わせていた。

入試失敗は、天狗鼻をへし折られたような苦い経験とはなつたが、挫折虚無の放心状態に陥入るほど深刻な打撃にはならな

かった。学力の差を痛感し発奮しなければとの向学心を前面に押し出し、親兄弟の声援をいい事に東京での予備校通いが実現した時は、心のうちでやったりと北叟笑なのである。

一浪上京組は十数人おり、同郷他校の者も数えるとかかなりの人数にのぼるが、小生は敢えて交流を避け在京中の予備校時代には殆んど顔を合わせあうことがなかった。その選んだ孤立姿勢が、理恵との生活を醜聞から守り、二浪となっておちこばれて行くことにもならなかったのであるから、人間の運・不運は選択判断に大きく関わってくる。

女の体臭

大学進学手続を済ませ、入学式までの間に一旦帰省したが家に帰っても落ち着いてはいられなかった。小生の留守中に理恵の友人の妹が上京し、面倒見の良い理恵が東京暮らしを馴らさせ

ている筈であったからだ。理恵はドライといって片付けられる女性ではなかった。クールでナウな女性といった方があてはまる。その性格はどこからきているのか知りたくなり、隣接都市の彼女の生家近くに足を向けた。しかし、今更詮索してなにになると思うと、急に愚しい挙動に感じて、アーケード街の中に珍しく一軒だけ古本屋があったのを幸い、気分直しに入り込んだ。

もう、何を手に取って眺めようが気兼ねする必要はないと、手当たり次第古雑誌の頁をめくったのだが、その内の一冊に「愛苑」というB5版の性事誌があったのである。それにはなんと「貞操帯・特集記事」が納められていた。小生の胸は早鐘のようには高鳴り、店に入った時の大人ぶった態度は消し飛んで、一刻も早く買い取って退散するか手がないと、喝采と焦慮が入り混じった手つきで支払いを済

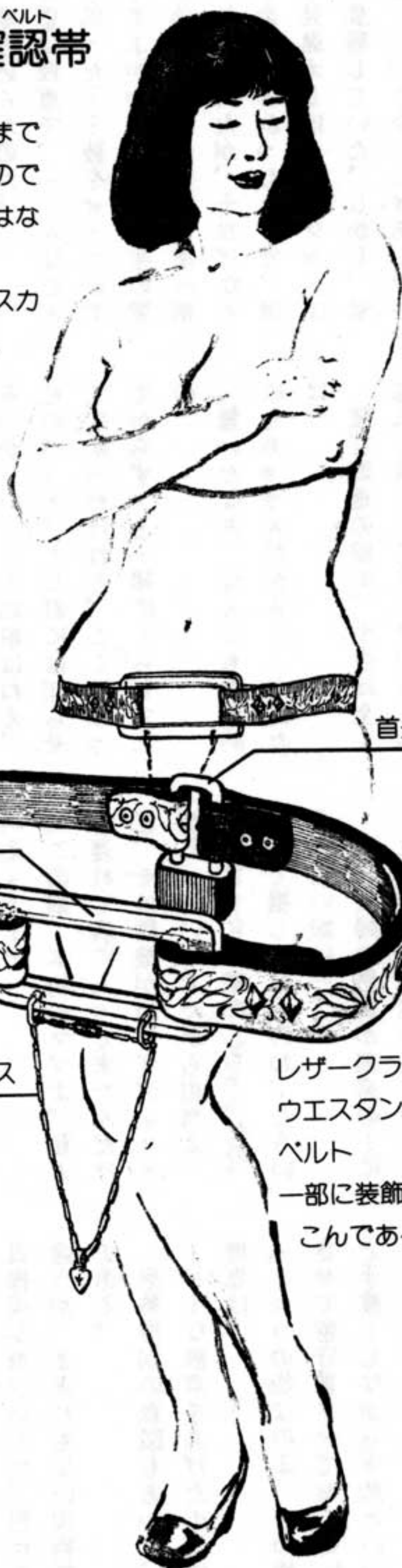
ませ、長居は無用と店を離れた。ところが、後めたさのような感情に追いたてられて小走りに三四十米も来た時に、小生は愕然となって足が釘づけになった。間口の狭い小店舗なのだが、その斜めに置かれたショーウィンドーに、黄金燦然とした貞操帯が飾られてあったのだ。「ハッピーショップ」などという店名があったが、開店して間もない、おとなのおもちゃ屋であることは一目瞭然で、行き交う人もチラリと横目で眺めて気羞しそうに去って行く。小生も、厚かましく近寄って眺めすかせることは通行人同様出来ずにいたが、立ち停っていた時間は短かったにせよ、誰よりも長く見とれていた。

(世の中には、実に恐れ入った物があるもんだア)との実感から、理恵の姉がさせられていたという貞操帯の回想に移り、三転して東京に戻れば会うことに

シンボル・ベルト
現行の相愛確認帯

婚前交渉のある関係まで
 進んだ婚約者同士なので
 中心部を覆う帯状物はない。

だが、久美子は絹のスカ
 ーフを南京錠に結び、
 前の方へ引き出して
 越中フンドシの如く
 性域を覆い包むこと
 を工夫し、小生を感
 激させてくれた。



とう明な
 アクリル
 樹脂板

婚約記念の
 プラチナ・ネックレス

ベルトを連結する
 バックルはデパー
 トの日曜大工コー
 ナーで作ってもら
 った。
 ネックレスはショ
 ーツに沿ってうま
 く納まり邪魔にな
 らない。

首長の錠

レザークラフトした
 ウェスタン風の本皮
 ベルト
 一部に装飾鉾を打ち
 こんである

多貫欣氏のアイデア

なる高井久美子の股間妄想にと
 りつかれた小生は、地方都市の
 店にある以上、東京の、おとな
 のおもちゃ屋、にも当然置いて
 あり、買うことが出来ると思う
 と、一日も早く親許を去ろうと
 決心していた。

夜になって、理恵が出ている
 東京の店に長距離電話を入れる
 と、
 「おやおや、若い娘のことが気
 になって、オカアチャマのオッ
 パイより東京恋しか」
 などと冷やかされたが、

「いい子よ、とても高校出たば
 かりの少女には見えないの、い
 い体もしてるし云々」
 と、伝えてくれる久美子のイメ
 ージが刺激的なものとなって聞
 えるのだ。
 「とにかく午前中の列車に乗る。

だから夕方には着くし、明日一
 日休んでつき合ってくれと有
 難いんだが……」
 日給分の付き合料をせしめる
 という理恵は笑いながら了承し
 てくれ、小生はやっと落ちつく
 ことが出来た。

実のところ、東京に帰り着いたのは翌日の午後で、正午を回ったばかりの時刻であった。

いても立ってもいられない気持ちで乗車時刻を早くし、別れを惜むような母親の見送りで列車に乗り込んだのだ。

理恵は理恵で、「こんなことだと思った……彼をせつについて帰してよかったア」と小生の突然の訪問を不快がらず自室へ招き入れてくれたが、十日ばかり顔を合わせなかっただけで、理恵は見違えるほどセクシナルな女に変貌していた。しかし、堂々と、というよりしゃあしゃあと、前夜、彼と乱痴気騒ぎをした後始末には何一つ手をつけていない様子の寢室を顎でしゃくり上げて、見て御覧という素振りなのだ。

(いいよ、姉貴の寢室見なくたって)
と無言で頭を振る小生に、殊更焚きつける興味が湧いたのか、

襖を押し払ってその手を小生の肩に回わして来た。

「え、彼女？(久美子かい?)あれ」

小生は衝撃を受けて理恵を半ば突きのけた「慌てないで。そそっかしい……この娘はねえ、私のペット。とし君には知らせてなかったけれど、ここに移ってからずっと一緒にくらしたの」

「驚いたなあ、なんでも衝動的にしちゃうんだから……あんたは」

魔女理恵の前で、小生は全く毒気を抜かれて佇んでいるしかなかった。

魔女理恵

セミダブルのベッドには、ヨガでも練習しているように背を海老のように曲げ、臀部をつき上げて両脚をヘッドボードの両端へ向けて拡かれたまゝ固定された女がいた。さすがにその女

は顔をそむけて羞恥に耐えているようであったが、久しぶりに見る全裸の女の肌は小生にはまぶしすぎた。

「さわってもいいのよ。一寸鞭で叩いてみる……喜ぶから」

「えッ？」

「この娘、本物のマゾよ。私より遅れて店に入って来たんだけど、その動機がね、ザディスト探しているんだから相当よ。すかさず私が確保しちゃったの。飼って損しないものね、こういう面白い娘は」

義兄夫婦の影響が理恵の上にかうした姿形で現われていたとは知らなかった小生は、本題の要件を忘れ理恵の話に耳そばだてて聞き入っていた。

「オレもあんたのお蔭で、いろんなことを知ったなあ……変なクセまで覚えたし」

「クセって何によ。私はとし君には聖女でいたつもり……悪いことは教えなかったはずなんだ

けど」

いわれてみると、貞操帯執着は、確かに理恵のせいではない。問いつめられ、囚女のいる手前言い淀んでいる小生の目に、三面鏡台の上に無難作に置かれた貞操帯が飛び込んだ。形状こそ違うが、まぎれもない実物なのである。

形勢挽回の意図もあって、オーバーな歓声をあげた小生に、理恵は、

「エッコの物なのよ。この娘にさせて留守番させておくの」

と手渡ししながら平然と云ったのけたのであった。

「もう、比処へは金輪際来るのはやめよう。オレ、狂っちゃう」

手にとると意外に軽い作り物の貞操帯であったが、小生は動転し気もそろで、口走った言葉は本音なのだ。そこへ理恵がそこへ理恵が更に追い討ちをかけてきた。



●S・M プレイ 雑感●

— 関峰夫 —

マ・ン・ネ・リを覚えるS・M誌

私の、S・M分野に於ける経歴は、かつてS・Mキングの誌上で語りつくしたと思うが、同誌が突然廃刊となって、途中で筆を折られた感じである。現在S・M誌は数多く店頭で見受けられるけれど、その内容はいずれも似たりよったりの編集で、いささかマ・ン・ネ・リ化を覚える。たとえば、作家、画家ともどの雑誌にも顔ぶれが揃って、いずれもお馴染の先生方である。S・M小説も最近では、手垢のついた

大同少異の筆致で少しも興味をそそられる力作は見当たらない。むしろ、読書通信欄でマニアの人たちの告白手記とか、プレイ実践の体験談がもっと迫力が感じられて、私はその方たちに深い興味を抱いている。勿論投稿者の方たちと面識がある訳でもないのだが同じS・M分野に生甲斐を求めていられると思うと親近感を禁じ得ない。私が緊縛の魅力にとりつかれたのは、すでに久しい遠い過去のことだ



がその目覚めは小学校の六年生の頃だったと記憶している。講談雑誌と云う当時少しばかりエロチックな月刊誌に、素っ裸で縛られ情夫に責められる小説の挿画に清水三重三画く緊縛された裸の女の姿態になんともいわれぬ情欲を感じた。小学生が情欲とはおかしな表現だが確かにそれは情欲というべきだろう。

男女の交りがどんなものか、まだ明確に理解出来ていないのに、縛られた女の姿が私の情感を強烈に刺激するのは一体どういうものか不思議だけれど、その頃から私は自分の異常な性癖を自覚し始めていた。

緊縛された女の挿画ばかりを雑誌に探し求めて、それを、ノートにコレクションし、悦に入っていたものだ。女を縛る、縛りたいといった願望は自分の生涯を賭けた絶対的な悲願みたい私胸中にうづいていた。

S Mプレイといまでこそ、普遍的な表現で、抵抗もなく語られるが、当時としてはこういった慾望は変態視されて、他人に知られるのを極力秘したものだ。

映画でもそうだが、現在では谷ナオミ主演の緊縛映画なぞ素っ裸で、あられもない姿態で、真ッ向うから責められ痛めつけられヒイヒイ悲鳴をあげているが、昔はそんな映画は

夢にも望めなかった。スチールに縛られた女が、青竹で役人から拷問されているのがあって胸をときめかせ入場してみたら最後までそ

自分の手で女体を縛りたい

私が緊縛に強い興味を禁じ得ないのは、縛られた女体に何んともいいがたい艶めかしさ、自由を奪われた女の悲哀といったものを感じるからだ、マニアの分野では、それぞれまた感じ方が異なることもある。

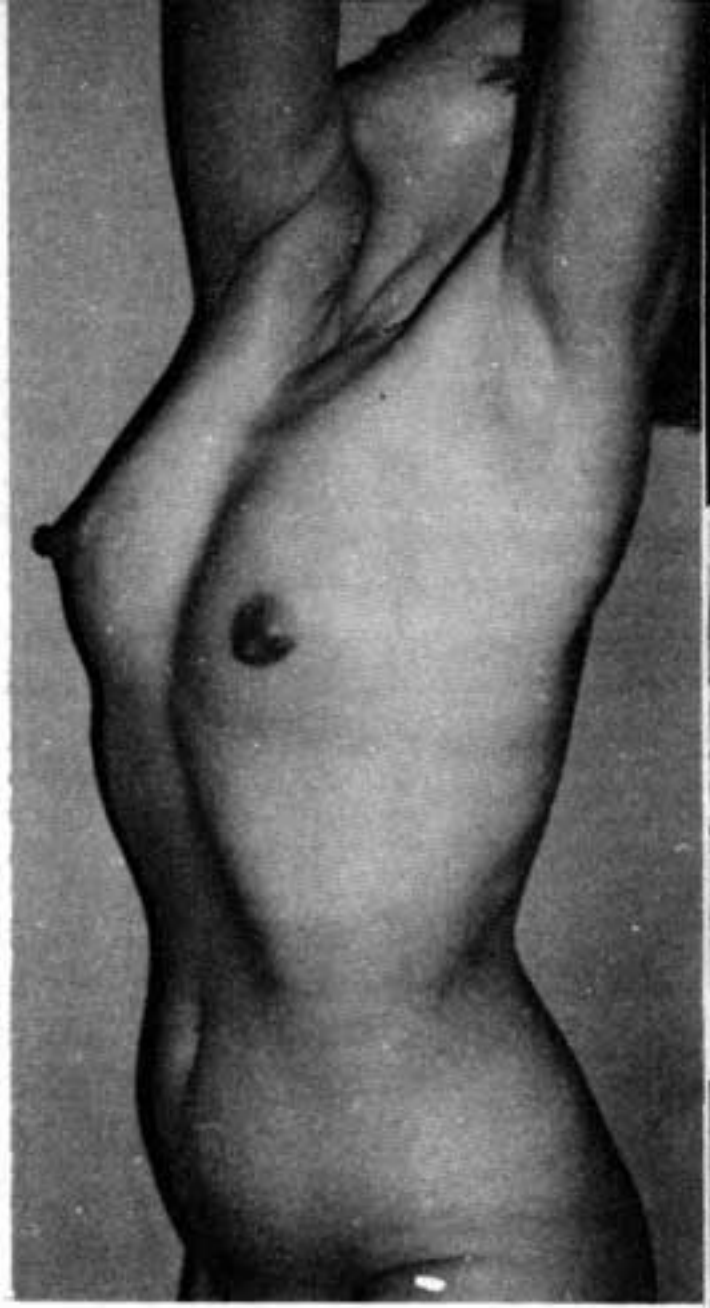
画や写真を求めてそれだけでは満足できなく、どうしても、実際に自分の手で、女体を縛り永い歳月を悶えて来た慾望を満したいと絶えず、そればかりを考えつづけた。

けれど意外とこの願望は困難だった。要するにそれが変態性である、と自己嫌悪の思いがいつも胸中にあるし、相手を説得する能力が乏しい。いきなり縛りたいが縛ってもかまわないか、ではなんとも白けたものだし一体どういった具合に機会を作ったらいのかさっぱり要領を得ない。単なるセックスの相手なら口説きの術もいつか身につけたのにS Mプレイに同調させる術は、なかなか得られない。

のシーンは映写されずじまい。つまり検閲でカットされた訳だ。何んだ人をだましやがって、と文句をいい乍ら映画館を出たものだ。

口説き損ねて、あんな変態ね、なぞといわれようものなら、進退極る思いをせねばならないといひ憶病になってしまうのだ。

それなら諦められるかといえ、そうもいかない。私は正直云えば過去に関係をつくった女たちの、誰でも、必らず、縛りたい、縛って満足のいくプレイを実現させたいと、願いながら数多くの女性との接触にもかかわらず、その夢を果す機会は、全くといっていい程なかった。然し、若い頃は見栄が慾望を制するが年輪をつむと老練になり、少しばかりの余裕もあると金銭で相手を納得させることを覚えた。ただここでいえることはいくら取引であっても相手が全然緊縛に対する知識のないのは、いざその場に至って、急に怖れた不安がったりするもので、そうなると思いたくはなかった。これも困りものだ。この事はS Mキングの、告白手記の中でも私の体験談として書いたがそれを避けるために、事前



にそれとなくSMプレイの予備知識は吹聴しておく必要がある。キングが存続していれば、私はそうそう自分のプレイ実践記といったものを告白して、マニア諸兄の参考に供したいと思っていたが、いま、この誌上をかりて少

誌上交歓でプレイ相手を

私が体験したことから測り語るのだから現代の若い人たちが、私みたいに相手に対して憶病でなく単刀直入にプレイに恋人などを、誘い込むいわゆる現代気質であるならば、別の話だが、相手の心情を配慮したり、踏ん切るまでの勇氣にためらいがあるとすれば相手に拒否された場合を考えた迷いが生ずる筈だ。結局、そういったことになれば、恥をかいても別に痛くもかゆくもない相手を撰んで要求することを考える。

誌上交歓でプレイの相手を求める投書をよく見るが誌上の呼びかけで、はい待っています

しばかり、そのことを記してみたいと思う。

SMとは読むべきものではなく、実践するものだとは甚だ尊大ぶったことを憶面もなく口にするのだが、私だってSM誌を見るより以外に自己のSM的傾向を満足させる方法を知らなかった時代がある。これはマニアの誰だって、最初はそうだろうと思うのである。

決していばる訳でも、見栄を張るつもりでもないのだが前記したように恋人とか愛人が得られてもそれが即プレイに直結されない。

したと応じてくれる人が容易にあるとは思えない。まして女性でそういった投書に対して答えてくれるのはまづ皆無といえよう。

私は何よりもこの種の投稿を信頼しない。ましてやもっともらしい女性名でのマニアの心情をくすぐるような呼びかけは、眉つばものだと思うのだ。要するに誌上で葉書一枚の投書でプレイ・メイトを得ようと考えてることを自体が、いささか虫がよすぎる考え方である。

SM誌がモデル募集を広告しているのを見てもわかるが一時間を万とつく金で買いましやうといっている。何事もマニアと呼ぶ以上

それを充実させ、自己を満足させるためとあらば、投資が必要である。

私は最近それを実践している。それより他に良い知恵がない。遠い過去から今日まで自分の血の中に生きつづけている緊縛への、執念を果すために、自分が稼いだ金を投資するのはこれも一つの生甲斐だと思っている。ちか頃のホステスたちは週刊誌などで得る、知識で意外とSMに関する情報を心得ている。語り合っていると、大体この女はいざその場になって尻ごみするか、ある程度は同調してくれるかといった判断はつくものだ。

口説き落とし条件が成立すればプレイの場へ直行である。私はいつの場合も車のトランクに緊縛用のロープを用意している。

車に同乗させて深夜の街を走っている時に、私はこれからのプレイを想像しいつの場合も激しい情念を感じるのだ。私が行うプレイの行程は必ずずといていくくらい、そのパターンは変らないのだが、新しい相手を得たときまた改めて新鮮な興味をそえられる。

昨年のことだが、深夜に拙宅に電話がかかった。若い男の声で私が受話器をとって、何もいわぬうちに、いま僕はアヌにソーセージを挿入していますよ、何ともいわれない快

感を味っています・という。実のところある雑誌に投書して電話番号を公表したばかりにこの種の電話は日夜を問はず、よくかかる。甚だ迷惑だと思うのだが私はそれでも多少の興味をもってこの種の電話をきくことにしている。

ただ女房は顔色を変えて怒る。訳をきくと女房が相手だと、私の場合と全く内容の異う会話になる。プレイの模様を尋ねたり一度私

プレイはセックスの前戯

ある人から、プレイの実態を知りたい・と電話があった。勿論どこの誰だか全く知らない。

一方通行だから先方はいいたい放題を並べて都合が悪くなれば、いつでも切ってしまう。

私の場合、プレイはセックスの前戯と心得ているから緊縛し、股間縛り、開股縛りさまざまな姿態に羞恥の限りをつくしても、責めの実体はない。傷つけたり痛めつけたりすることはないのである。縛りそのものが、プレイであって、それに伴う責めは全くの演技である。

S M誌で興味を感じた小説のストーリーを演ずるが、鞭やローソクを使っても、痛くもな

のバイブ・レターで責めこまれてみませんか、きつと貴女を満足させてあげますとかいったものから、場所と時間を指定してデートを要求するものまである。怒るのも無理からぬ話である。勿論女房がプレイに興味がない訳ではない、私がそこまで永い歳月を費して飼育したのだから夫婦としてのS Mプレイには同調しているが少しばかり神経質な性格で、こういう電話は嫌がるのだ。

い鞭だし、ローソクをたらししても、実際に堪えられる程度を確めてから使用する。それが相手にとって我慢ならない苦痛を伴うものならば一切用いない。けれど充分にプレイのだいたい味を感じる。あくまでプレイは演出であって、それで情慾を燃やすことができるのだ。

そんな話をしたら、じゃ本当の責めはやらないのですね……つまらない・と、いうなり電話は切れた。

私は少しばかり考えさせられた。本当の責めでないのはつまらない、と云った相手を想像してみる。私の今日までの持論として実際に傷け血を見ないと納得がならないのは完全

な変態性慾者だとの解釈をしている。

S Mプレイはそんな血なまぐさい陰惨なものではない筈だ。浣腸にしる緊縛にしるあるいは剃毛してもおよそS Mプレイと名づける分野におけるプレイはあくまで、相互の許容の限度と合意の上でなされるべき、享楽の境地であるべきで、決して苦痛を加え、肉体を

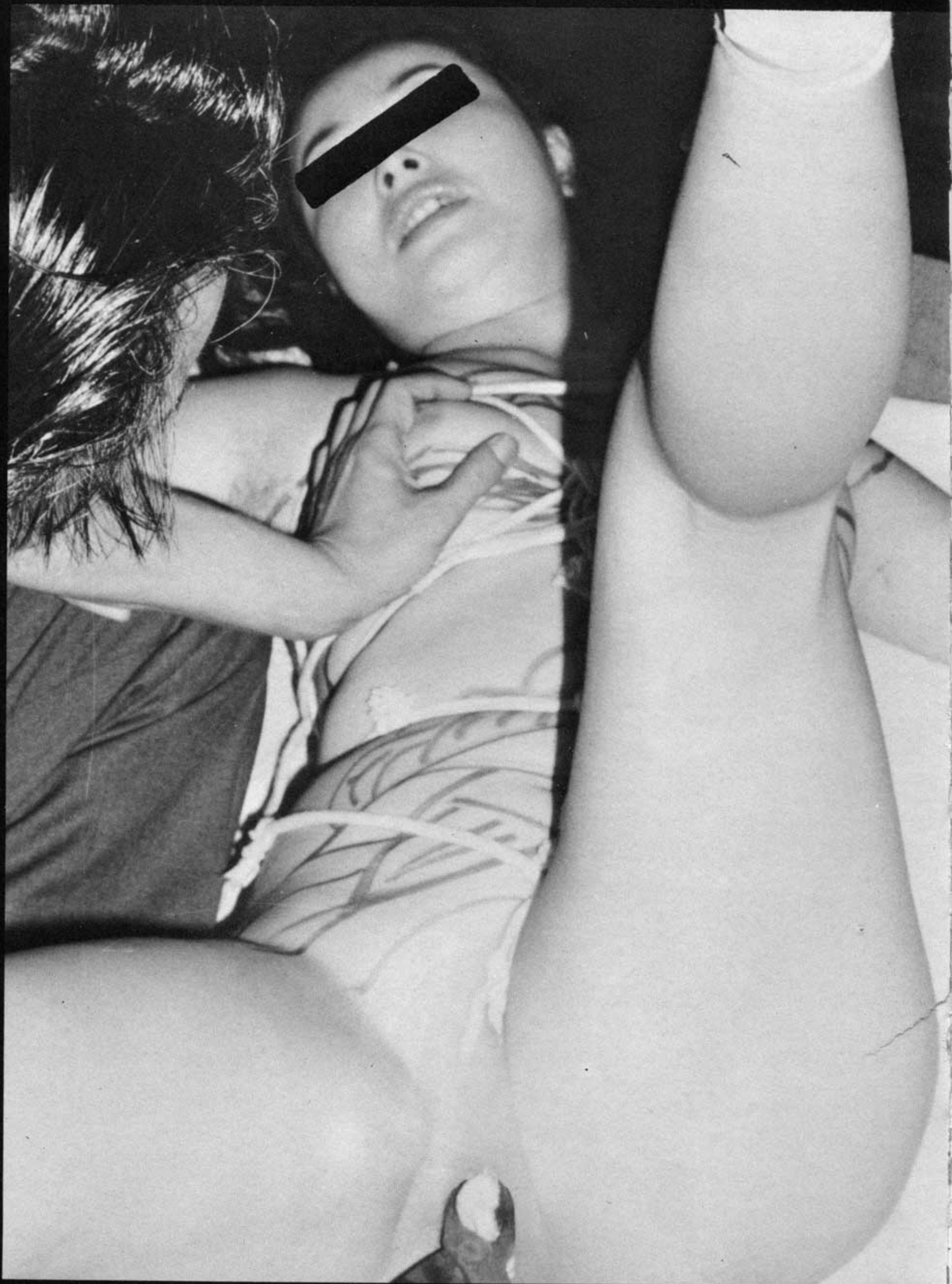


肌絵羞恥責め

■全身に描かれた墨絵に纏わりつく白い縄。
羞恥におののきながらもいつしか快樂の呻きが……■







若妻 M化馴致

「深夜の特撮依頼」より
撮影・六本木薫

初めて柔肌に縄を受けた若妻は、その深夜全裸の肌に緊縛の責めを甘受し、あまつさえ股間に縄を……!!



早くも緊縛の愉悦に
目覚めた若妻はふるえ
おののきながら両肢を開
き股間に幾重もの縄を受け
ては熱い果汁を……。







男性にとって永遠の憧れである
セーラー服姿……!!



リングが…全裸の肌に無情の縄



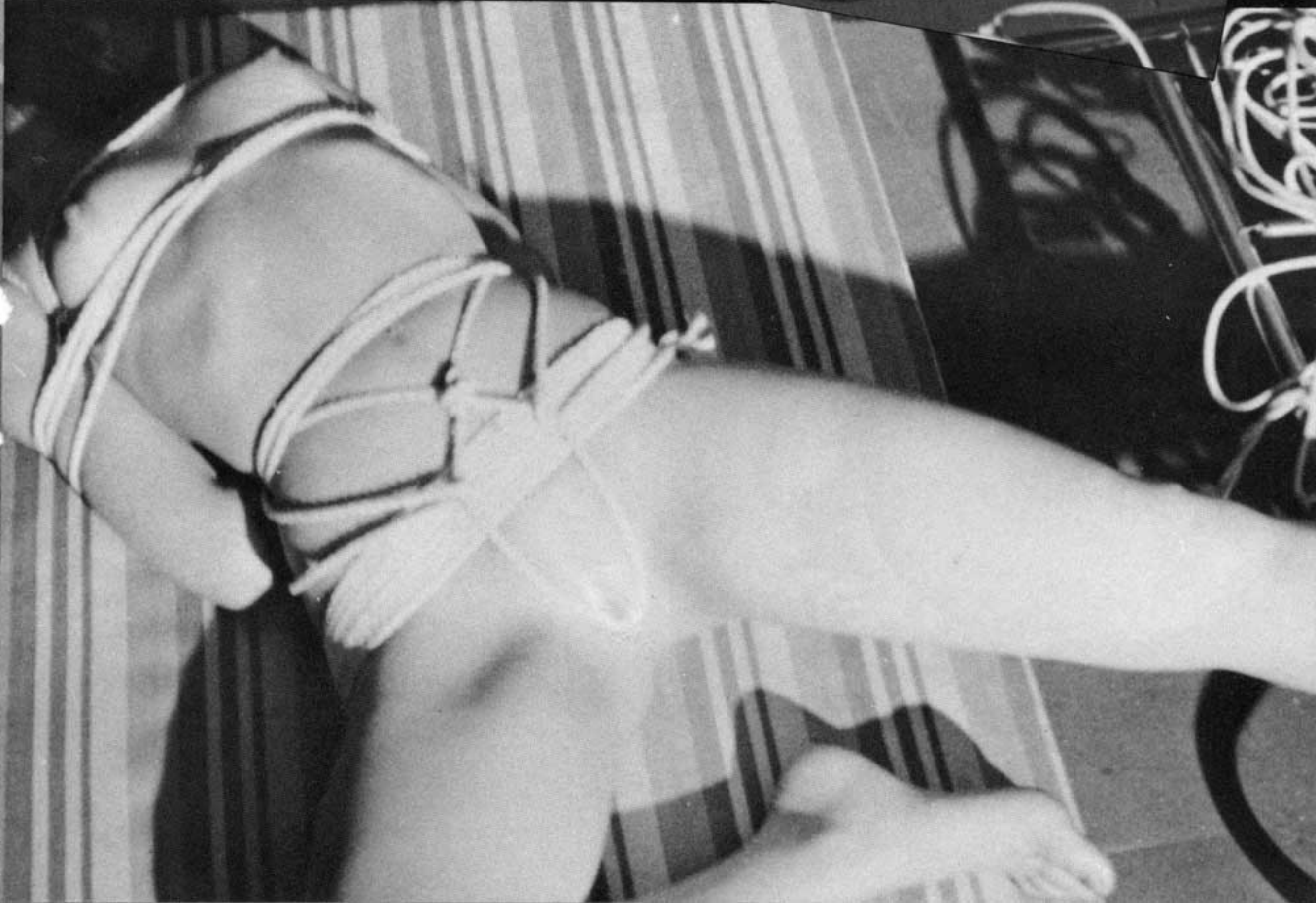
それをむしりとり縄責めする
この秘められた愉悅



馴致依頼

セーラー服を剥ぐと黒いストッキ





嬉悦のひととき

N氏撮影



秘部に立てられたロウソクが熱い...

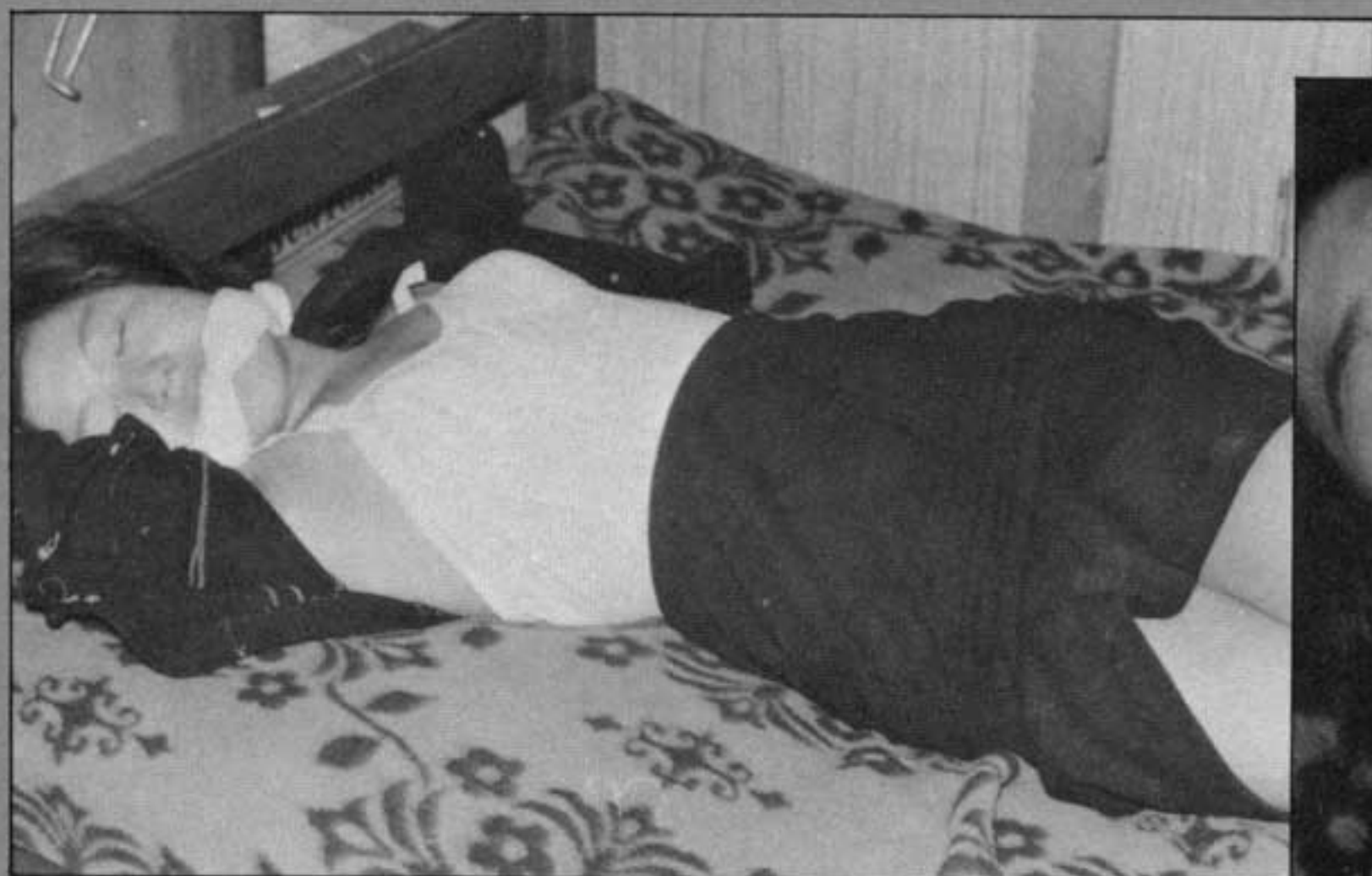


縛ばられて恥かしめられて…

N氏撮影

喜悦のひととき

PART (II)





妊婦緊縛

一号に続き妊娠十カ月を迎えた夫人の臨月緊縛フォト。詳しいフォトルポは次号に掲載の予定。

撮影は中宮さかえ氏







傷けるのが本当のSMだとは考えてもみなかった。然しそんな電話があつてから私は広いSMの世界には私が行っているSMプレイも幼稚な遊びと嘲笑しSMの真ずいとは女体を責めるとなれば、事実肌を傷つけヒイヒイと悲鳴をほとぼらせる程に、徹底的に行うものだと思えるマニアがあるかも知れない。と思うようになった。

果してSMはそんなに熾烈で強烈なものでなければ真のSMと呼ばれないのか、私にはそれこそ私たちとは別の世界にある所謂変態の世界に思えてならない。映画も責めのあるのはよく見に行くが腕や首を斬り落したり鮮血がしたたる場面は顔をそむけたくなる。

私はSM陶醉にはロマンがあると信じている。緊縛の中に女体の美しさ哀れさを求めそれに酔いしれたのである。

正常なセックス行為では何か物足りなくて縛りを伴うセックスに激しく燃える。

女房との場合はいまではそれが当然のことのように私がいうまでもなく縛りのための使いなれたさまざまなロープが用意される。

縄も使い馴れて来るとなるとなく肌になじんで縄そのものに愛着を感じる。それには私たちのSMの歴史があるし想い出がある。然

もその縄を女房にかくれて他の女体に使用したときは実に新鮮な感興を覚えるものだ。浮気の相手を撰ぶ場合、最近プレイを前提として撰ぶことにしている。単なるセックスだけでは物足りなくそのために時間と金を浪費するのはもったいない気がする。

私がSM談議をするのもそういった相手が物色するのが目的で私の話に反応を示す相手があればすぐ口説に入る。

友人等に女を口説いて十人の中三人がものになれば、三割打者だから立派なものだと冗談を飛ばすが水商売にいる女性なら三割どころか直球ばかり狙えば、軽く五割は打てる。

ただし私の場合は、単なるセックスだけで

私は、縛ばらりたい、縛って

少し馴染んで親しくなると、おい俺と浮気をする気はないか縛ばられてじっくり可愛がられてみる気はないかと、最初から縛りの条件を持ち出して口説くものだから顔を出す

たびに酔いがまわった相手は「私縛らりたい、縛って」といい出すが実際にそれがホテルの密室で、現実となるのは十人の中二人ぐらいのものだ。風呂からあがるともう一度入念に

はあきたらぬのだから緊縛プレイまでの完遂をヒットだと計算すると打率は約二割になる。

SM誌の氾濫とかくれたSMブーム？の普及などで容易に相手が存在するかのよう意識するけれど意外とこれが少くない。

酒席での座興にそういった話題をもち出して、冗談交りの歓談ではずいぶん知ったかぶりで調子を合せてくれる女性でも、いざとなると二の足を踏む。私が思うに本当の意味でSMを理解していないのだ。観念的にそういった倒錯の世界が存在する事実を知っていても自分がその世界にのめり込むだけの決断も、勇気もない、これは生れながらの性癖で我々マニアとは異った世界に住む人たちだ。

化粧をするようにいつける。お芝居を演ずるのだから少々厚化粧にする方が、気分が乗るものだ。

必らず和室に入る。洋室のベットなどでは、私の好きに合わない。床柱とか格子などがあって立縛りに都合のよい調度があるとそれを眺めただけで燃えて来るのだ。

後手高手小手に縛りあげて豆絞りの猿ぐつ



わをかませる。勿論素ッ裸にしてある。

寝室ではなく控間のたたみの上に座らせてたたみの上に座らせて私は宿のゆかたの片肌を脱いですでに小説の中の悪親分にでもなったつもりですっかり上気嫌である。自分では意識しないが縛られた相手から見ると異常なほど目がきらめいているのかゆるい猿ぐつわの下から「傷つけないでね」と不安そうな声が洩れる。これが女房だと次の行動がどうなるのか私のそれからするすべての責めのパターンを知りつくしているから媚態を体にながらせてプレイ―共演を示してくれる。初めての相手だと矢張り何をされるか知れたもの

ではないといった不安心を感じるらしい。それ程この段階で私は燃えるのだ。車中や浴室でこれからの緊縛プレイ―に就いて安心させるためと興味をそそるような説明をしているが縛られてみると馴れないことはどうしても落着いていられないものらしい。ある女がいったが「縛られて首でも締られたら恐いわ」と興味はあるが自由を奪われた身で何をされるかわからぬのが怖いらしい。

縛ると云うことが正常な行為ではないからそんなことを要求する心情が受取り方によっては異常な神経に思われSMプレイ―をセックスの前戯だと理解させるのはなかなか気骨

の折れることである。

心配するなよ、これはあくまでお芝居だから、といい次の行動に移る。いまでは、SM小説を余りというより殆んど読むことがなくなつたがそれでも時代物の責め小説はさわりの部分だけは目を通す。私が時代物に興味をつなぐのは時代物の方がより幻想的に思えるからである。現代のように人権だとか自由だとかを誇張し権力というものが、通用しなくなつた泰平の世に比べ、昔の権力者は殺生与奪の権を握り思うがままに弱者を痛めつけたことだろうと想像すると権力を持った悪親分なんかは捕えた女を存分に自分の意のまま責め抜くことも誰憚ることがない。番屋とか土蔵の中などいうものは背景も責め場としては絶好な場所に思えてならない。私のSMに対する目覚めはそういった時代責め小説の中で育まれている。だからいつの場合も自分を小説の中の、人物におきかえることで最高の陶醉を味うのだ。プレイ―の相手を変えても私のすることは一つも変わらない。自然な語り口で、これからするプレイ―の筋書をいつも説明しておくのは自分を幻想の誘うためである。相手が私の意図する心境を察してくれるか否かは知らない。

人の字型に大きく開股

「おい少しは身にこたえるか、こんな羞しい姿にされてもまだ強情を張るつもりか」

円城寺達氏の小説に出てくるような科白を口にすると縛られた女のごに手をかけ顔をあげる。節分のお化け大会に自宅で日本髪を結える程長髪の女の髪はさんばらに乱られて肩から背に海棠のようにたれている。それが一層私の情念を燃やすのだ。

私にいわれた通り、猿ぐつわの顔を、イヤイヤと横に振る。強情な女だどこまでも知らぬ存ぜぬを通す気なら仕方ねえ、もっと羞しい姿にしてどうでもいわしてやる。

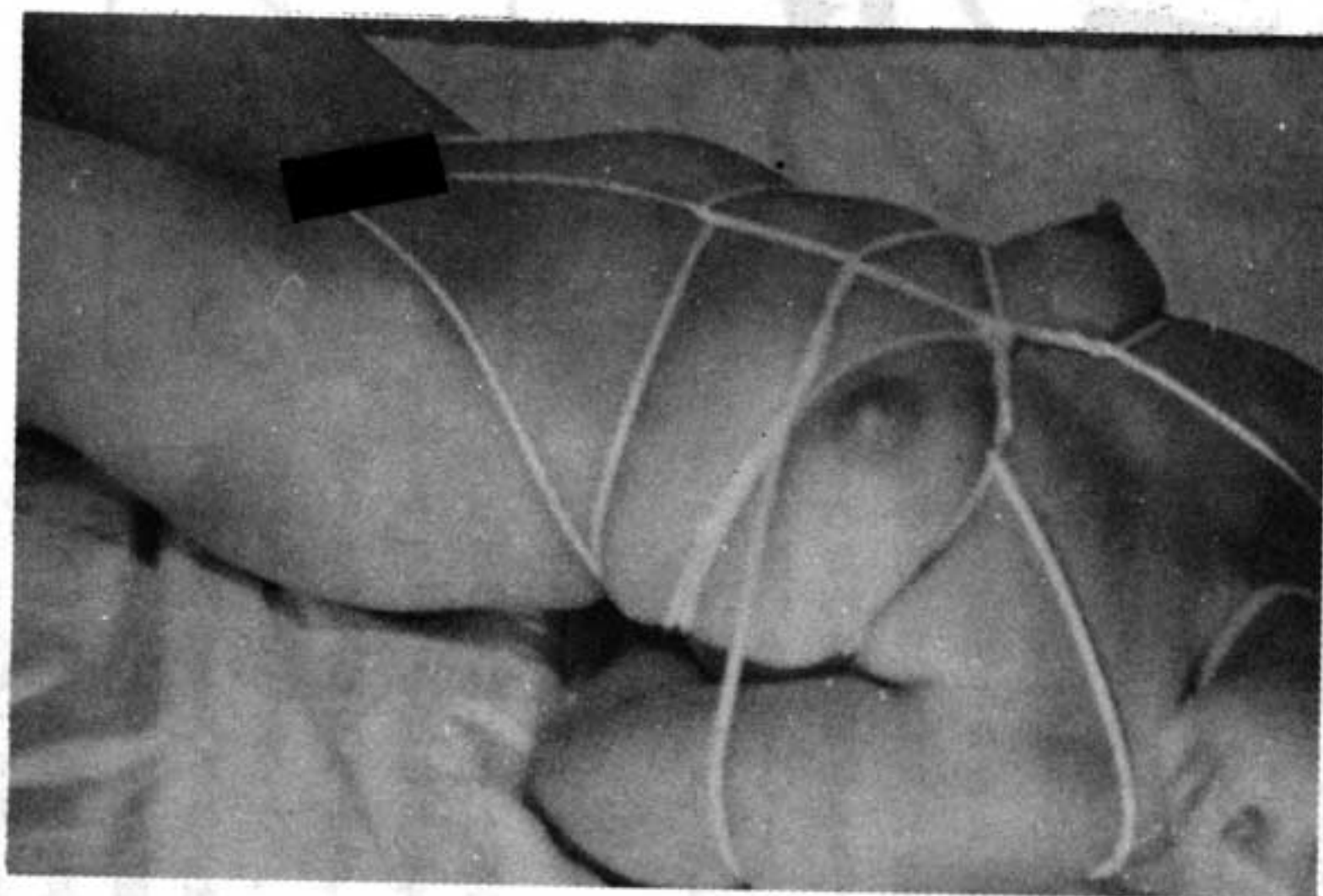
髪をつかんで体をひき立てるが、余り強くやると痛たがりはいらないかと多少の手心はある。柱に立姿で縛りつけ用意の青竹に足首を縛る。この青竹が苦心の作で、バックに入るには長すぎるしホテルに入るに、バックはともかく長い青竹などを携えていたら不審がられるから節を抜いて木の栓をはめた三段に縮る細工がしてある。

人の字型に大きく開股して縛りあげた女を一息入れてじっくり観賞？する。

机の端に腰をかけて片肌脱ぎの姿で、煙草

に火をつけるが火のついたのは煙草ばかりではない、私の体も火がついている。

少年の日に小説の挿画でいくとも見て空想の中でいつも描いていた緊縛の女体がいま現



実に、自分の目前にあられもない羞恥の姿態をさらして息づいている。私はもう完全に興奮の絶頂にいる。

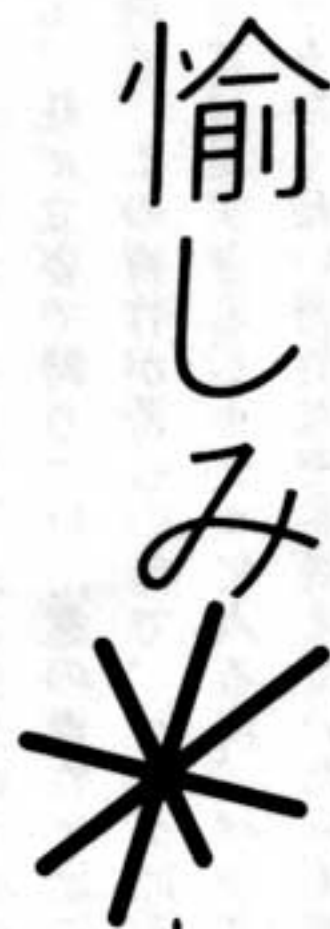
乳房をいちり、女の恥部をいたぶり、いつか相手も身悶えして反応があらわれて来ると私はもう我慢がなくなる。

通信欄で、よくプレイメイトを求めます、当方大学生の真面目なサラリーマンです、御連絡を乞うといったような投書があるがプレイーとはプレイヤーだけの相手のことをいうのか、それとも最後の一线を越えるセックスまでの許容を意味するものか、私は考えさせられる。

純すいなプレイヤーだけで、互いが満足しセックスを伴はぬS・Mプレイヤーがあるものだろうか、私はいつも自分がこの境地で感じる慾情を抑えてプレイヤーのみで終ることの不可能を悟る。傷つけ、さいなんで、絶叫を呼ぶ真事の責めが本当の意味のS・Mプレイヤーだといわれるなら、私のこうしたプレイヤーの行程は遊びの分野で真のS・Mではないと、意議づけられるものなら、私は敢えてS・Mプレイヤーに真随に迫りたいとは思はない。柱から解き寝室に抱き入れると緊縛のままの女体を、さあ覚悟しろこれからじっくり色責めの味を堪能させてやる、と口ばしって堪能するのは私自身である。



スパークする



愉しみ

和室利用の 責めアイデア



岡 淳

ベッドというのは、我々SMマニアにかなりの夢を与えてくれるし、ともすると無限に近い変型責めを考えられるが、いざ日本式の布団となると、およそ考えるのに限度がある。

そこで、今回は日本式布団を使つてのSMゲームについて考えてみることにする。

ベッドだと、まず考えられるのは固いというイメージがある、そのために緊縛を考えた場合、理想的な責め具になり得るが、一方、布団となると、反対に柔らかいという先入感があつて、緊縛を考えるむきには不適であると思われがちであるが、私としては、それを打破するには、完全固定は考えられないとしても、それに近いことは出来得ると思つてゐる。

まず考えられるのは、ベッドの場合の十字型というか、或いは大の字というかの緊縛だが、

日本布団の場合には、ヒョイと腕を持ちあげれば固定は簡単に有り得なくなると考えがちである。

しかし、それは思考上の問題であつて、肉体の構造上からみれば、掌を上に向けた時には、成程固定とは縁遠い縛りだが、掌を下に向けさせ、少し腋の下の角度を拡げさせ、つまり万才ばんさいに近い型で固定を試みたらどうであろう。

実際に手を拡げてやってみていただきたい。おわりの様に関節の機関上、この様にした場合には、ヒョイと腕をあげる訳にはいかない。

そこでいえることは、縛る型態の問題である。掌の置き方の変化だけで、完全固定とまで行かずとも、それに近い効果は得られるのである。

付随して考えられることは、そうやって縛っておけば、事実上自分の腕の拡がりのために、



身体を反転させることは不可能になってしまふのである。

下肢にしてもそうだ。何も大の字に縛らなくてもいい。まして柔らかい布団とはいいいながら事実上はその上に体重がかかっているのである。考えるほど暴れても、大して自由さはないのである。

大の字のかわりに、足を組ませて縛ってしまうのもよい。つまり胡座式にしてしまうのである。こうすると、自分の拡げられた下肢の膝のために、矢張り反転運動は不能になってしまうはずである。

あらかじめ被縛者をいったん寝かせてみて、首の位積、肩の位置、そして腰、大腿、足首の場所を調べておいて、あとでその部分に紐をぬいつけるのである。

むろん、荒縄でも綿ロープでもまずい。なぜなら、寝る時に

ゴワゴワするし、第一、布団をほす時に困るだろうからである。かわかす必要はない——という人は別であるけれども……。腰紐のたぐいが良いだろう。出来れば、布団の伴布などだったら理想的だと思う。

夫々、固定する場所に二本づつぬいつけておけばいい。これで準備は完了である。寝るのにちょっと肌触りが悪いなら、毛布で覆っておけば大丈夫である。

さて……恋人なり妻なり、あるいは男性なりが寝たならば掌を下向きにさせて、手首、腕のつけ根、首、腰と縛ってしまえば、最前にも述べたように、ほとんどの自由は失われてしまう。

足も大の字にしてもさして動きには自由さはないはずだ。もし、より以上の緊縛プレイを楽しみたいのなら、腰の下に何かをあてがえばよい。臀部の重みで、被縛者は大した運動は出来

ない。

足を胡座式にした場合には、腰にかかっている紐のために、全くといっていい程自由は失われる。あとは、プレイを行う人達で様々な考えを行われたい。

ただ、足首を固定してしまうと、セックスプレイにはプレイキが掛ってしまう難点が生じてしまう。そこで、長さが一メートル以上の竹か棒かを用意しておいて、あらかじめ布団の下に差しこんでおく。

腰の上あたりに位置しておけば、布団の柔らかさと、腰のくびれのために、ほとんど疼痛は感じなくても済む。これへ、足首と膝頭と結びつけば、好みのプレイに移行出来よう。

そのほか、胡座状にした縄と、首の紐とを連結すれば海老しぱりポーズになり得るし、足首と手首と夫々結び合わせれば、凄まじい開股状態にもなる。

要は思考問題ひとつだと思う

のだが……

よく柱を利用してSMプレイをやりたい、という人がいる。だが、昔風の家と違って、現在の家ではむき出しの柱が一本立っている家はあまりない。

私の友人など、プレイの度にいちいちドアをドライバーではずれて利用するが、一度、その友人宅を借りてプレイをしたことがあったが、はずすのにひと苦労、はめるのに又々手古ずった経験がある。

どちらかというと、SMプレイの終了後はかなりの疲れを覚えて、出来るならば、その場に倒れこんで寝てしまいたいほどである。それを、復元するのに苦労したのは参ってしまった。

友人とて同じ気持だったに違いない、ドアをはずしたままだったら妙なものだ。彼は、私と違って自分の住居だから、少しは後で落付いてからやったのだろうけれども――。

そこで、ひとつ……

どこの部屋でも、日本間ならば柱はある。しかし、たいがい埋め込みになっている。

そこでまず、鴨居のあたりに、三寸――四寸角の角材を二・三十センチに切ったものを、木工用ボンドか何かで固定させる。釘を打ちつけてもいいが、五寸釘を打つとなると、素人では仲々大変なものだ。木ネジだとそんなに長いものはない。

木工用のボンドノリだと、かなりの強度を持っているから充分であろう。

そうしておいて、今度は床面からその柱にかぶさる位の長さの角柱――出来れば、材木屋で長い角材を買って来た方がよい。それを、鴨居部分のものを切りとって使う。――を準備し、次に、鴨居に使ったのと同じ角材を矢張り十センチぐらいに切りとったものを用意する。

鴨居のところの柱に、やはり

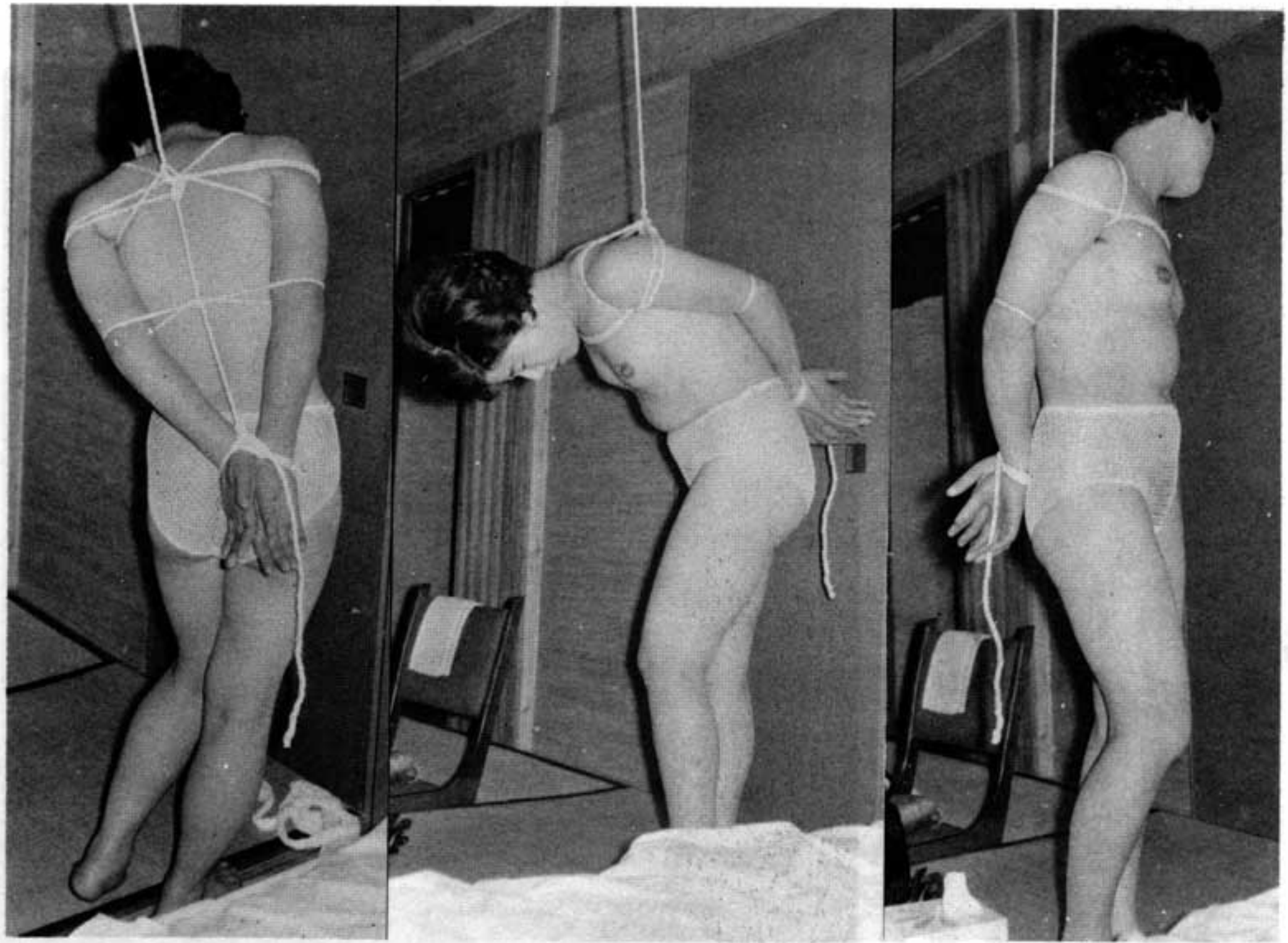
材木屋に売っているクサビ――コの字型のもの――を二ヶ買って来て、柱の両側に打ちこんでおく。

ただし、この場合、完全に打ちこんでしまわずに途中でとめておくことが必要がある。

長尺の柱の下部に当る処にはさっきの十センチあまりの角材をボンドで止めておき、出来れば、床に当る角柱の面にはボロギレでも巻いておくといい。

角柱を建てかけ（角柱自身に刷りつけた角材部分を家屋の柱に当てるようにして）、鴨居の角材の上に接触させる。

あとは、打ちこんでおいたクサビに縄をからげればいい。つまり、家自体の柱に平行して柱を建てたことになるわけである。こうして、上部を固定しておくだけで、柱自体の重量と被縛者の体重で、そうちょっとした事では倒れない。



ハリツケ姿にしたいなら、竹でも一本用意しておけばいいはずだし、あとは使用者側で自由色々と考えることだ。

この設置のミソは、柱が浮いた型になるために、被縛者をどの様にも柱に固定させることが出来ることと、取りはずしが比較的簡単なことと、そして、柱を使用後取りはずしてしまえば、たとえ他の人がその部屋に入ってきた場合でも、まさか鴨居に付いている柱まで考えないだろうからである。

難点としては、柱の裏側からの操作が出来ない事であるが、これは致仕方あるまい。

柱を使うと、SMプレイも又パラエティに富んでくる。その場その場で、色々と変化を楽しむのも、また乙なものではないか。

吊りプレイを楽しみたい場合には、洋間より和室の方が細工をするのが簡単である。洋間だ

と、天井はキッチリとしてしまっているが、和室だと、しっかりしている様には見えても、実は天井板はカッチリとは留めていないものである。

洋風に天井をプリント板で加工してある所は別として、たいがい天井なら、軽く釘付けしであるものが多いから、踏み台を置いて天井板に触ってみるとよい。

どれか一枚がはずれば——といっても、ズレルといった方が適切であるが——あとは一寸した努力で簡単に釘どめはとれる。

天井板をずらせると、舞台裏のような屋根裏が見渡せるはずだ。その中で適当な強度の柱をえらんで、あらかじめ滑車を取りつけておくのもいいし、丈夫な縄を下げておいてもよい。

ゲームが終わったら、天井板を元通りずらして閉めてしまえばいいのだから、工夫ひとつで様



様なゲームを満喫出来る。

意外とSM愛好の士の多くには、モノグサが多い。面倒臭がってやらなかったり、人のプレイを見てハッスルして自分も真似る。いわば独断的精神に欠ける。

コロンブスの卵ではないが、縛り方ひとつにしても、同じような縄かけに終始する人が多い。それがタマタマ他人のプレイを見て、それを喜こんで真似る。股間しぼりがそうであろう。将にコロンブスの卵だといえるところののだが。

つまり、女性にフンドシっていうのは、何かゾクゾクする様な陰湿なエロティシズムをおぼえさせる言葉であるが、実際には、女性のフンドシ姿というのは、まずはお目にかかれないし、非常に異質なものである。女斗美などといって、女性専

用の相撲があるそうであるが、これなど、陰湿な悦びを味わいたい男性が創案したのではないかとさえ考えられる。

それゆえ、縛りの中にフンドシを考えた処に、コロンブスの卵的な発想を感じるのだが、かくいう私とて、始めて緊縛写真の中に股間しぼりを発表されたとき、思わずうなづいてしまったものであった。

女性の臀部には、男性の陰靡な願望を抱かせる何ものかがある。和服にしてもそうであるし、スカートがそうであるように、その美しい曲線を軽く覆う服装が多いだけに、限らない期待感にうちふるえるのだろう。

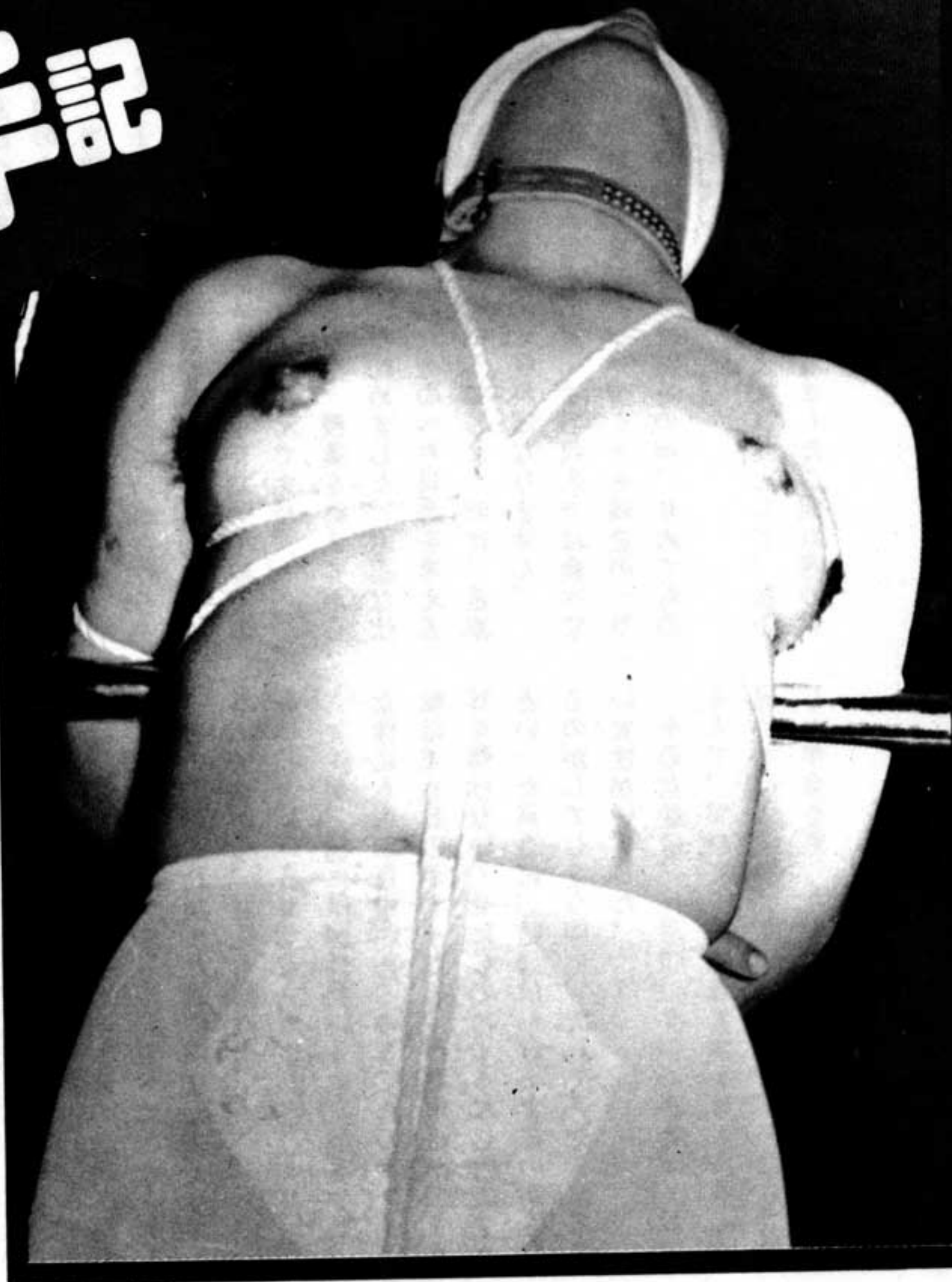
だから、全裸の緊縛もSの血を満足させるが、チラリズムの緊縛姿にも凄いやさを覚えさせるものだ。

要は工夫ひとつで、いろいろなバリエーションを楽しまれることを提案する次第である。

告白手記

いわく因縁

高杉 啓



気になる女学生

もう二十年以上も前になりますねエ。私も若いというより、未だ子供だった頃です。

そうそう、考えてみりゃ、あの当時でも入試入試というんで、友人連中が大騒ぎをしていた時ですから、高校の三年生の時です。

私?……私は入試には関係ありませんでした。私の両親が相ついで亡くなってしまい、大学どころの話ではなかったんです。自分でそう言っちゃあなんですけど、当時の私は向学心にもえていましたねエ——

親父とお袋が亡くなったのは、確か高校二年の終りごろだったな……親父はたいへんお袋を愛していたんでしょうなあ。近所でも評判の仲の良い夫婦で通っていたんですよ。何の病気だかはっきりは憶えていないけど、とにかく、二・三日寝こんで、あっという間でした。張りをなくしたっていうんでしょうかねエ、親父の様子が変だなあって思ってたんですが、一ヶ月後でした。まるで追いかけるように——

親父は普通の官吏でしたから、大した遺産はなかったですねエ。わずかばかりの退職金

と、たくわえ置き貯金、それに小っぱけな家だけが私に残されたものでした。

気がついたら天蓋孤独ってんですね。兄弟のいない一人っ子だったんですから。親父お袋もそれに似ていたんです。私は文字通り一人ぼっちになっちまって、私自身も張りがなくなっていました。

高校へは義務的にかよってはいましたが、以前のような向学心は消え失せてしまい、万一、当時にしてはかなりの遺産でしたが、いくら子供だといっても、生きていかなければならんでしょう。学資を払って生活をしてゆくんですから、段々と金がなくなってゆくの心細くて仕方がなかったんですわ。

学校には内緒でしたが、授業を終えてから喫茶店のボーイをやりました。退屈な仕事でしたが、残された金のへり具合を考えると、スッカラカンになってしまいう前に、是非とも収入の道を考えなければなりません。

無論、一人身とてボーイの収入では食べてゆく程は貰えませんが、少くとも残金のへり方が心細さを救ってくれるのが、せめてものなぐさめでした。

向学心を無理矢理^{おき}圧えた反動として、私の心は日に日に荒^すんでゆきました。流れ者のボ

ーイの中には、悪いのも相当いました。人間てけっさくな生き物ですね。

善いことより悪いことの方がはるかに面白く、短期間のうちにかなりの悪いこともおぼえてしまったのです。と、いっても、まだ少年のことです。そう目くらまを立てるような悪事には、さすがに足を踏みこまなかったのです。

仕事が退屈なものですから、仲間のボーイ達は、寄るとさわると客の女性の話題ばかりです。中には厚かましくデートにさそうボーイもいて、それがまた成功率八〇パーセントなんですから、女性も結構ボーイハントのつもりの方がいるようですね。

ですが、物には例外というものがあって、女性にも選ぶ自由があるので、Aのボーイは駄目でもBのボーイなら、Bが声をかけても耳を傾けないくせにCのボーイなら大丈夫、といった具合に、結局はハントするのやされるのかしてしまう中に、決してハント出来ない女性がいました。

その女性は、一週間のうちに三度は必ず来る人で、黙って一人で来てコーヒを飲んで帰って行きます。女性というと、かなり成熟した年令を感じさせますが、実を言うと女学

生でした。

きまってセーラー服で来たのですから、まずは間違いないでしょう。しかし、ひと言で女学生というには、あまりにも魅力的でありすぎました。

普通ではヤボに見えるセーラー服が、彼女が着ていると、まるでファッションの先端を走っている服に見えます。

中肉中背とでもいうのでしょうか、とも角すらっとした身体つきで、胸の隆起などは、少女とは信じられない盛り上りを見せていましたし、ウェストの細さ、腰の張り具合など息を呑むばかりの素晴らしさです。女学生につきものの黒いストッキングも、見事な脚線美のために、ひかえ目どころか、極立って美しさを誇示している風に思えるのです。

片っぱしから仲間のボーイ連中がアタックしたのはいうまでもありません。私を除くほ



とんどの連中は、物の見事に空振りになったのです。

つまり、一人で来てはいえるものの、引っかけられに来ている訳ではないのでした。ボーイ連中はおろか、マネージャーの鈴木という人もくやしがついていました。

それほど男の心をひきつける魅力を秘めた女性だったのです。もっとも、私は始めからあきらめてはいましたけれども……。

男って動物は面妖^{おかし}なものです。それでは彼女をあきらめるかというところか益々ファイトをかきたてられた様子でした。恥も外聞もなく、二度も三度も手をかえ品をかえてはアタックしていたのです。

しかし無駄でした。彼らの中に彼女の氣にいった男性がいなかったのか、全然眼中になかったのか、あるいは本当にコーヒーだけを飲みに来ていたのかも知れません。

やがて、執拗な彼らもあきらめたらしく、いつとはなしに彼女は話題にのぼらなくなりました。

黒いストッキング

学期末試験を終えて一週間ばかりたったある日のことでした。喫茶店の終業である十時半頃、少し先輩のボーイから

「一寸面白いことがあるから、あとで更衣室へ来いよ」

といわれて、試験も終えた気安さもあって、私はある種の期待を持って更衣室に行きました。更衣室は二階にあります。私達ボーイ連中は普通では二階の更衣室をあまり使いません。男子用と女子用があり、女子は必ず使ってユニホームに着がえますが、私達男性は、面倒がって、ほとんどの男性連は厨房の片すみで着がえてしまいます。かなりの広さがあり、おまけに奥の方は畳敷きになっています。

私が入ってゆくと、

「あっ、来た来た……」

振りかえって私の方を向いた連中は、なぜか目をギラつかせながら、悦びを押し殺している風が見えたのです。

彼らの人垣の中に侵入^{はい}って行って、ふと、彼らの中心にあるものを見て、私は思わず息

を吞みました。

「……………!!」

何とそこには、例の女学生が横たわっているではありませんか――

そして、なお驚いたことには、彼女は寝ているのではなく、起き上れない状態だったのです。

彼女は両手を後に折りまげられ、しっかりと細引きの縄で縛られていたのです。かなり力まかせに縛ったのでしよう。手の先は血の氣を失って蒼白にすらなっていました。

それだけでなくとも色白の彼女ですのに、痛々しいばかりの縄目でした。しかも――手首を縛った縄は、胸の上下にまでまわって、胸を絞めつけていたのです。

そのために、豊かな胸の隆起はより以上に煽情的に盛り上って見えます。横たわっているために、豊満な腰も、ウェストのくびれと対象的に悩ましい線を誇示しています。

もぞもぞと男性の視線から逃れようとする度びに、かえって男性達の目を楽しませていく事には、彼女は気づかぬ様子でした。

一時の驚きから醒^さめて、よく見ると、彼女は猿ぐつわまで咬まされています。何をにつめこんだのか、鼻から下を覆っているタオルの



口のあたりがふくらんで、そのために呻き声しか洩らせないのでしょう。

清楚なセーラー服であるために、無惨さが倍加して見えるのです。黒いストッキングが悩ましさを訴えかけるのです。大きく息づく胸乳のあたりの、女性の女性たる型が、場合によっては素晴らしい美しさ、悩ましさ、そうして眺め方によっては、縄とのコントラストである無惨な美しさを振りまいているように覚えていきます。

「フン……乙に澄ましてたって、こうやっておけばどうすることも出来ないだろう」

一番アタックに熱心だった男が、憎々しさを泌ませた口調でいいました。愛しさ余って憎さ百倍といったところでしょうか。

「だけど、ちょっとばかり可哀そうだな」
顔付きとは反対に、同僚の一人がつぶやくようにいうと

「へん／＼何いってやがんだ。散々手古ずらせられて……おまけに見ろ／＼岡田と松本と三人……傷だらけさ。女っていったって必死になると凄いぜ。猿みたいに引っかきやがんの——」

わざわざＹシャツを腕まくりして見せる。なるほど、爪でつけられたのだろう。赤く充

血した傷あとが奇妙なほどの模様を描いていました。

「どうしたんだい？」

「どうしたもこうしたもないさ。俺が裏口へゴミを捨てに行くと、この女が——」

彼はあごでしゃくって

「この女が、裏口に立ってやんの」

「……!?」

「誰かお待ちなんですかって訊いたら、急に逃げ出すように後ずさりしはじめやがって俺だっておこりたくなるよな。逃げるこたあないじゃねえか。——思わず掴まえて店ん中へ引きづりこんだ——という訳」

「——へえ?!」

「ちょうど岡田と松本がいたんで、三人掛りで二階へ連れこんでよう。まだ終りにまで間があるんで、松本が縄を持って来て縛っちゃまったんだ」。

シミひとつない乳房

得々として語る彼に、仲間の連中は聞きいていたのです。

「そうすると、これから——？」

「きまってんじゃないの。皆なでやっちゃお

うぜ。面白くないか——」

「やっちゃおうって？」

「強姦よ——そうだ、皆なでやるんだから輪姦か。まあ、どっちでもいいや。全部で、と、八人か……。公明正大にクジ引きにしようか——」

「いゝのか、クジ引きで？」

したり顔で一人がいうのに、

「うん、民主主義は平等だよね。………だけど、考えてみりや、痛い思いをしたのは、俺と岡田と松本だな。——そうだ、こうしよう。俺等三人で第一陣とゆこう。あとの五人はジャンケンでもやってくれ——」

「………?」

「その前に、こんなまじや強姦は出来ねえな。いっそのこと、全部引ん剥いちまおうか——」

「………」

無言のままうなづく様を見て、彼は彼女に寄ってゆくと、まずセーラー服のネックチーフを解き始めました。ある程度かん念してはいたでしょうが、男の手がかかって来るのを感じて、彼女は本能的に拒むべく暴れはじめました。

ですが、後手に縛られていたのでは身体

運動は八十パーセントは不自由です。無駄と知りつつもさけようとするのは、処女の本能かもしれません。

荒々しくネッカチーフをむしり取ると、彼の手は胸元のホックにかかっていた。それも、あっと言う間にはずしてしまおうと、深く開いた胸元には目を射るばかりのブラジャーが見えます。

胸元深く手を差しこむと、ブラジャーは暴漢である彼の手に掴まれ、容赦なく引かれると、プツプツと留め金のはずれる音と共にブラジャーは手元にたぐり寄せられました。

「……………うーん」

彼すらもうなるほどの、素晴らしい眺望がそこにありました。シミひとつない豊かな山脈が……………恐ろしいほどの美しく盛りあがった乙女の誇りである乳房が、純白の色彩をあたりに放ちます。

胸の上と下に縄がかかっているの、全貌を露呈させる事は出来ませんが、柔らかく、その上過度の弾力性を秘めた乳房は、男性に限りない征服慾をおぼえさせます。

「ようし……………」

上ずった声でつぶやくと、彼の手は濃紺のスカートのすそにかかります。さすがに一気

に捲くろうとはせず、少しずつ捲くりあげる度に、下肢の線は八名の男の前に露わになってきました。

適当に締ったふくらはぎ、膝、そうして膝頭をすぎて豊かすぎる太腿——現在とは違って、裸ハンランの時代ではありません。私達男性には刺戟の強すぎる眺めでした。

白いズロース

——太腿のつけ根近く、当時としては当り前のガーター（靴下留め）、しかも、若い女性らしく真紅のそれは、黒いストッキングと白い太腿のつけ根にあって、気が転倒してしまうほどの煽情的な眺めです。

そして……………純白の……………ズロース。これ以上のなだらかな曲線は無いと思うほどの拋物線に区切られた臀部の美しさ。匂うばかりの女の臀部にキツチリと埋まるばかりの白いズロース。

一同の呼吸は止ってしまっているようでした。わざとらしくせきばらいをする者、大きく吐息する者、つばを飲みこむ者……………。

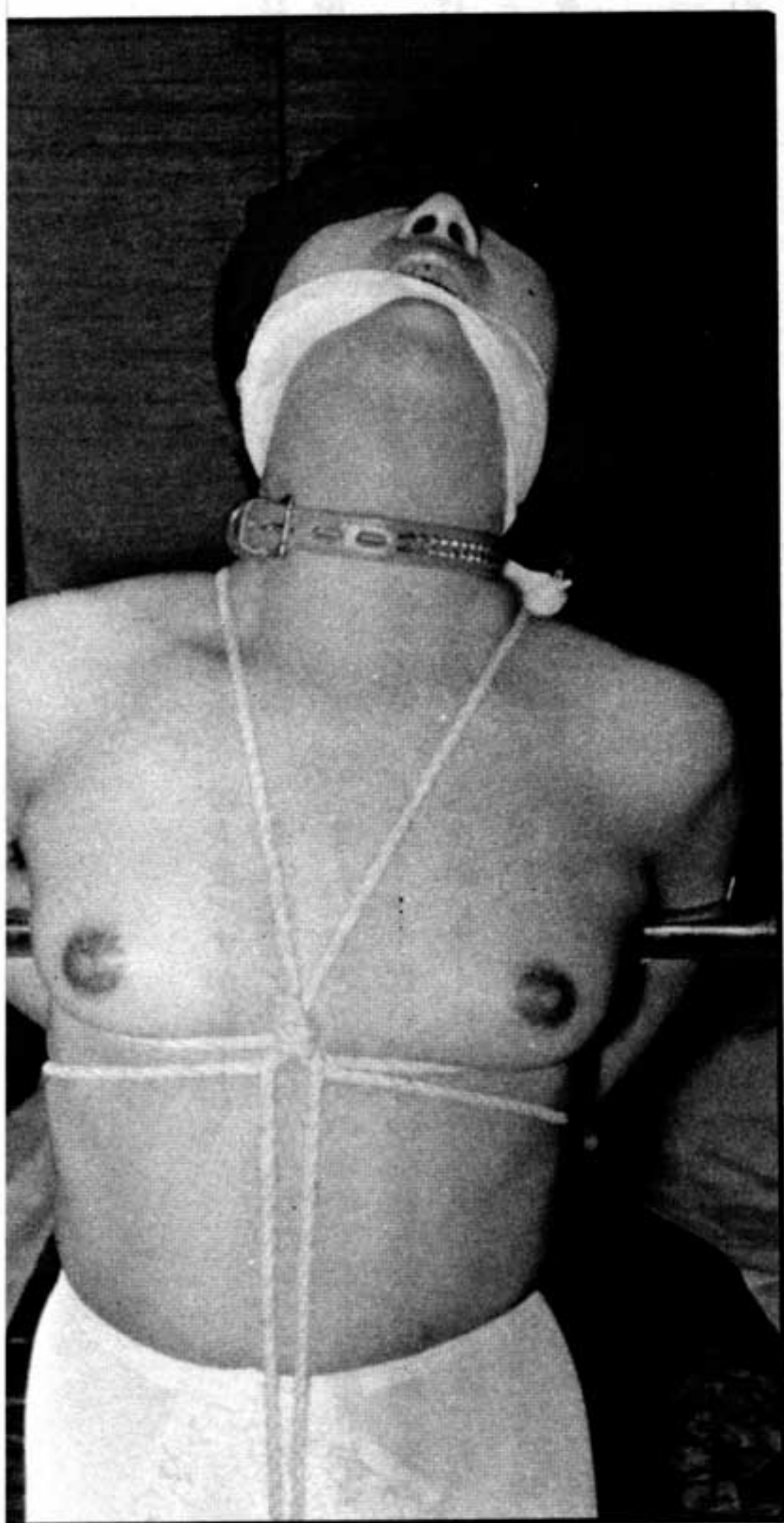
さすがに、おずおずとウエストに喰いこんだズロースのゴムに手をかけた時、急に私の心の中に何かが芽生えていました。

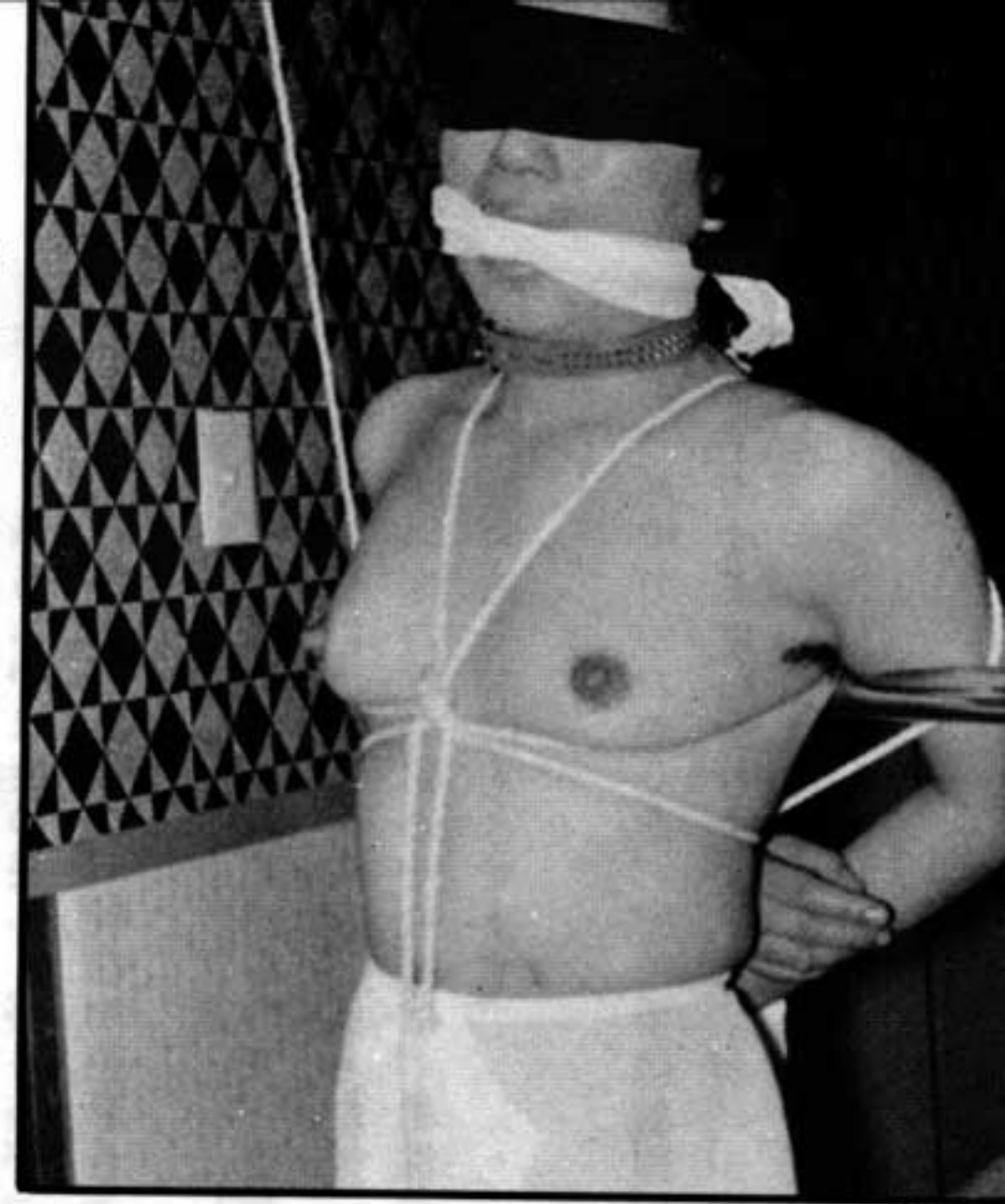
「やめろ／やめるんだ」

自分でも驚愕するほどの大声でした。

「……………?!」

鼻白んだ彼らの顔が、いぶかし気に私に注





がれた時、私はのっぴきならない自分の立場に気付きました。

「なんだ、お前………」

「やめろよ、なあ—— やめようぜ！」

一瞬七人の顔に狂暴な光を感じた私は、無意識のうちに一歩下がっていました。

「こいつ——」

七人の中で一番腕力自慢の男が掴みかかって来ました。

「……………」

もうこうなったら引く事は出来ません。胸倉を握まれたとたんに、充分に腰をおとした私は次の瞬間に地響きたてて床に転がる男を見ていました。

「やるな……………」

煽情的すぎるながめが、普通以上に彼らを狂暴にしていました。私は柔道二段、空手初段の腕前でした。

次々に襲いかかって来る連中を、必死でさけようと思いました。喧嘩なれている彼らのことです。映画のように派手にという訳にはいきません。

私もかなりなぐられ、けられていましたが、一対七であっても武道の方に軍配があがったのです。大きく息を吐きながら立ちはだかる私の目前に、彼らは荒々しい息遣いで立ち上れなくなっていました。

震える手で彼女の縄を解くと、身づくろいもそこそこに彼女をせきたてて表に出ました。月夜です。本当に綺麗な月が、まぶしいばかりの光をあびせかけていました。

それからどうしたかって？……………それでおしまいです。必然的に職を失った私は、又々職探しに歩きまわらなければなりませんでしたよ。

大学はついに行きませんでしたでしたが、たまたま始めた仕事が時流に乗りまして、まあ小っぱけですが会社をひとつ持って今日に至った次第です。従業員百名ぐらいですから、大変

は大変ですがね——。

その時の女学生はどうしたかって……………？

ええ、あとで彼女の親にすごく感謝されまして……………はい、今の会社も彼女の親が資本金を出してくれたんでうまく行っただけです。はい、もう薄々お気づきでしょう。その時の女学生——園子と言いますが……………、

今の私の女房がそうなんです。

あとで話なんですが、実は彼女——田代園子は、私が目当てだったんだそうです。それなのに私だけが園子にアタックしなかった、というより始めから私はあきらめていたんですが、かえってそれが彼女に火をつけたらしいんです。

あの日の事だって、意を決して私に逢いに来たのだそうで、それを知らぬ私は、ただ正義漢めいた気持になってしまっ……………。

そうです。私はもう古女房になってしまいました。園子を世界中で一番愛しています。ごめんなさい。別におのろけのつもりではなかったんですが……………。

そして、あの事件が縁ではないのですが。いつしか私達夫婦はSMプレイを楽しむようになりました。

そうですね、そのうち私達夫婦のマル秘の写真をお見せしましょうか。

竹責めのイマージュ

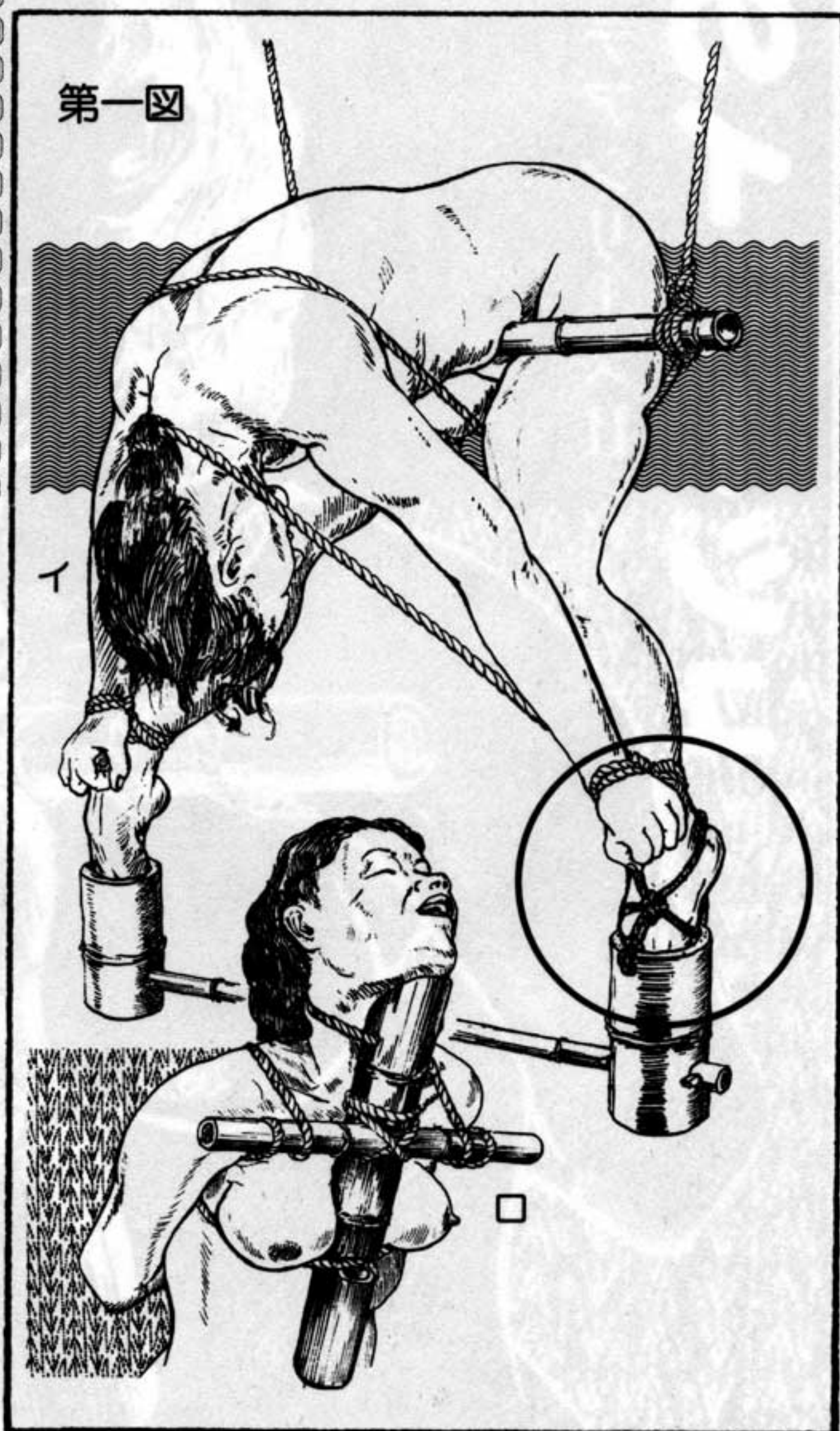
多貫 欣 アイデアシリーズII



人の好みは千差万別で、道具作りに興味がある私に「なにものそこまでしなくても」と冷笑する人もいて、こちらが改めて相手の顔を見たくなるようなことに会うことがある。

道具を使うと、愉悦ムードの「責め」遊戯が、突如「拷問」という常軌を逸した異常なものになって見えてくるらしい。パートナーをそこまで痛めつけて喜ぶほど自分の変態性欲者ではないと煙幕を張りたい人が、ひんしゆくをまじえていう率が高い。また、そういう人ほど、大人のおもちゃ[※]を使ってみたくてうづいてるから不思議なものである。

この「竹」を使つてのイマジューも、読者にどう受けとめられるか大変気がかりであるが、一人でも同好の士が出現してくれば幸いと、続篇をお届けした次第である。



五体責めも可能な 強制臀部晒し

第一図の上段(イ)は、「強制臀部晒し」である。開脚固定となる足立てが責め具らしき物で、腹部に当てがい引き上げる

竹には加工はない。但し、ブランコ状にするための縄結びの個所には節が来るようにするか、ヤスリで刻みを入れておく。縄の滑り止めになるからである。足立ての筒部は、横竹をスライドして足の開き具合を調節できるようにし、トウ・シューズ

を履かせるように紐で足を固定するとよい(円内)。その工夫を施しておく、立てて使うだけの物ではなく、横倒しの位置でも足枷同様に使える。

尚、絵のように、なるべく脚を広くひろげさせるようにして、横竹を股ぎ敷布団をのべて、横

たわり、庇の如く上部に突き出した女体を仰き見ながら責めるのも、おつな眺めとなつて楽しい筈である。そのためにも足立では適当な高さを保たせる道具となり、使用する興味がうまれてくる。

女上位で嬉悦恍惚を連続！胸枷

第一図下段（ロ）は、顎突き上げ式の「胸枷」で、後手に緊縛を試みる際、効果をあげるこ

とができる。

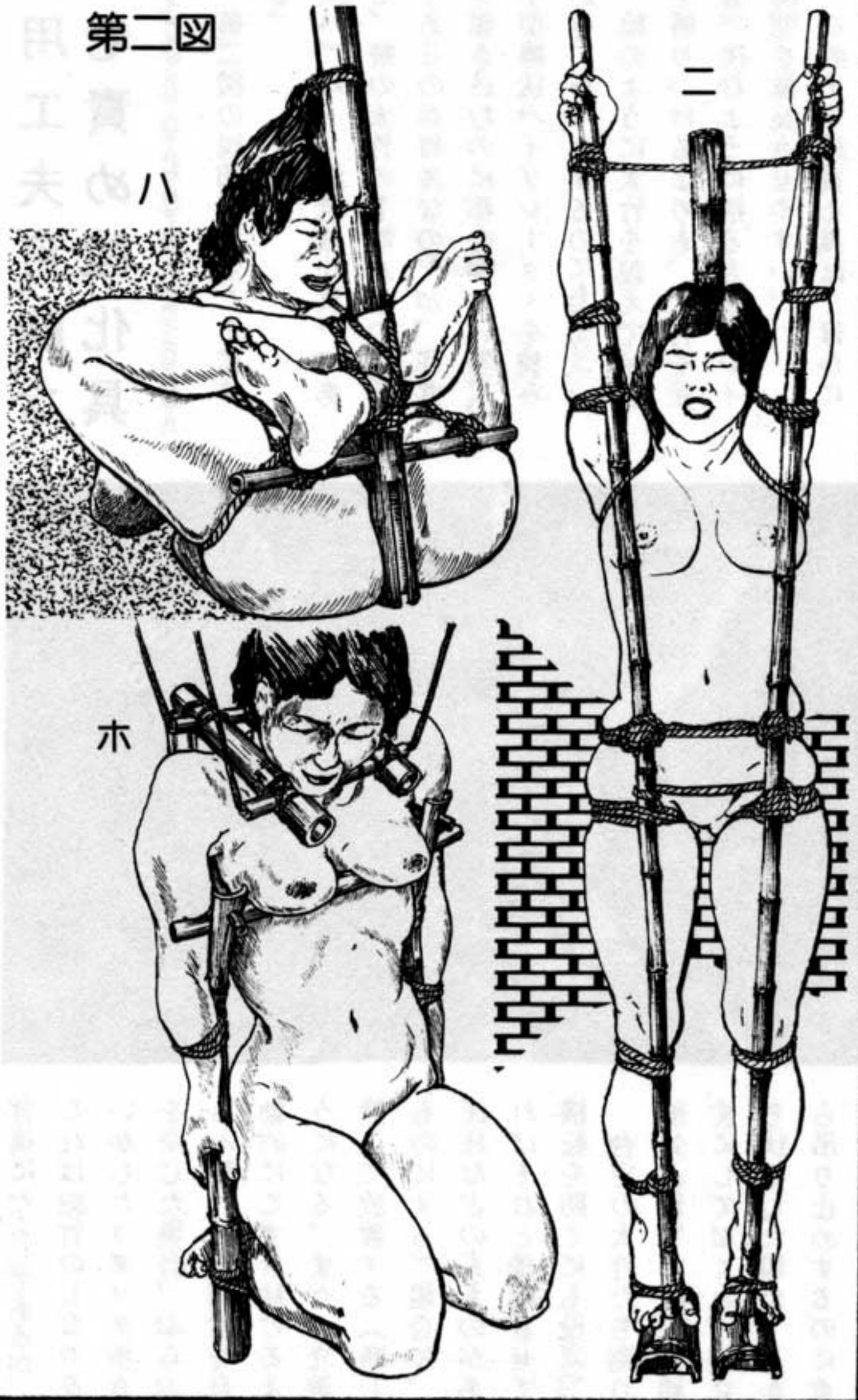
十字交差の細竹は節を抜き、縄を通して両端で吊り上げるようにしておく、変った吊り責めのポーズをとらせることが可能になるし、吊らずとも足首を引き寄せて変形海老責めにもす

ることが出来る。

しかし、本来の目的は緊縛補助具としての使用ではなく、性行為に備えて役立てたい物なのである。女性上位の体位で積極的に振舞わせたい場合、横竹は下位男性の手で支えるハンドルとなり、喜悦恍惚を連続させるために役立つ。逆に、じらしを与えながら責めたてる場合は、支えより前述の吊りを加味した中腰状態で、結合を浅くするように考慮しておけばよい。

もし、ここまで読んでこれられて、なる程と領けられたなら、改めて（イ）を見ていただきたい。「強制臀部晒し」は四十八手の呼称で表現するところの、駒がけが可能になる責めのポーズであることに気付かれるであらうし、足立て具の利用で男性側（大抵の場合背丈は男の方が長身であるから）が膝を曲げて接しなくても済むのである。

第二図



使用工夫可能な 海老責め強化具

第二図の説明に入ることにする。

(ハ)は、「海老強化具」である。縦の太竹の下端が切り込んでいるのが特長なのだが、花卉を覗き込むのに都合がいい筈で、小型棒状バイブレーターを狭み込み、セットするのも役立つ。絵のように太竹を越えて足首を縛りつけるよりも、太竹を足裏で挟むように括る方がプレイ時間を延長させやすい。

この十字形責め具は、ほかにもいろいろ役立つので、「海老」にこだわらず使用工夫をされることが良いと思う。

被虐性増幅!! 立垂強要具



(ニ)は、「竹馬」変形の「立垂強要具」である。絵では体の前面に竹を当てがってあるが背面で同じように固定してもよいのである。

左右の竹の中間に中細の竹が

背後にたらしめてあるが、

これは細竹のしなりをいかしたヨタヨタ歩きを命じた場合、ぶらぶらと揺れて被虐者を自動的にこずき続けるようになる。また、立垂

静止で放置する(晒しものにする)場合に、床柱などの丸ものがあればそれと接続させて横転を防ぐにも役立つ。

台足の太竹たち割り部分と竹竿の接続を頑丈にしておく、逆立ち状にした場合、上から吊り止めるのに重宝であり、クレーンの

タマガケ手法を応用する

ことで、完全な吊り下げも可能になる。

こうした吊り下げは責め手が一人の場合には困難であるためこうした工夫はもっと利用されてよい。

搾乳効果抜群!!
胸圧拘束具

搾乳効果抜群!! 胸圧拘束具

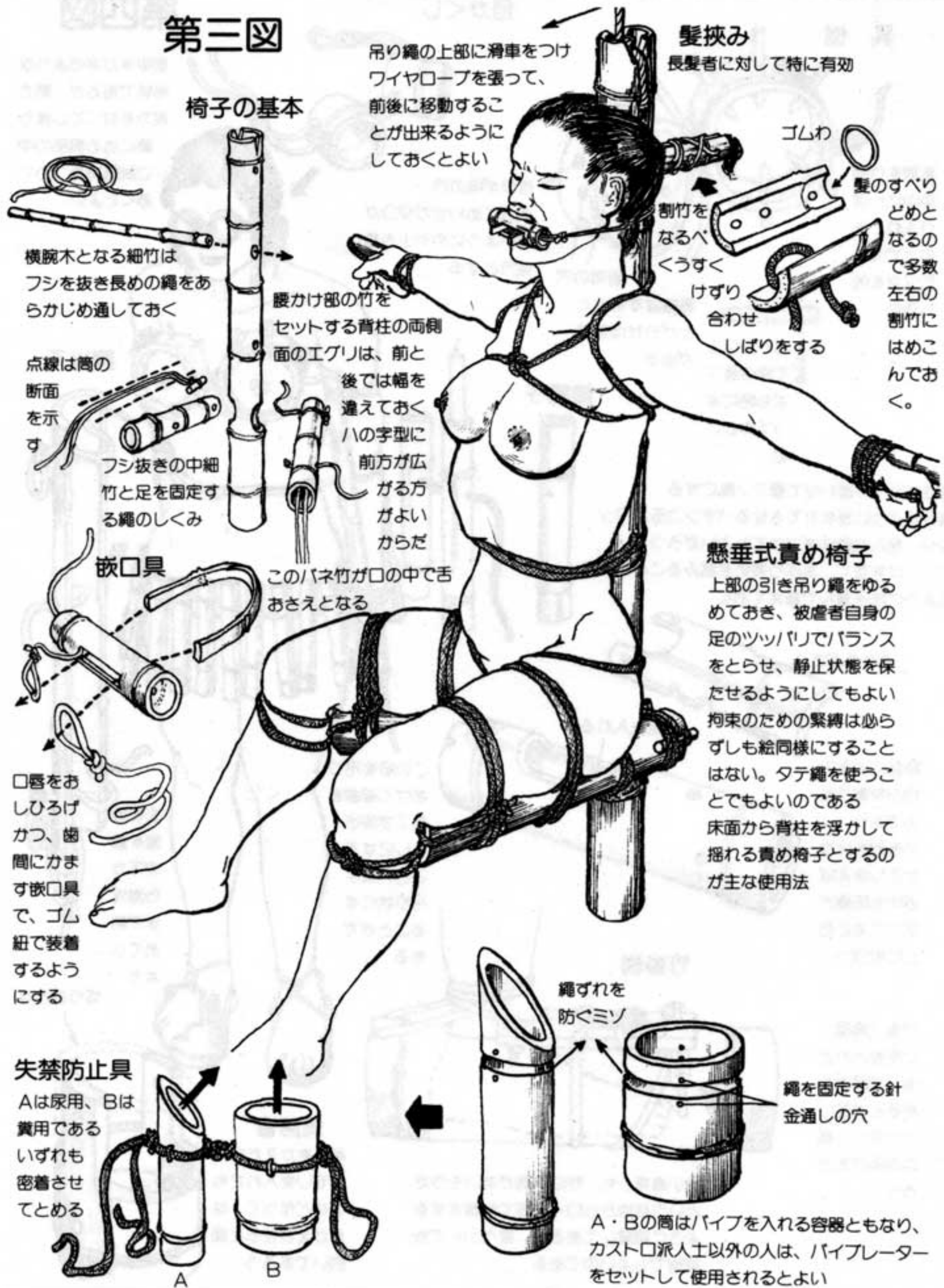
(ホ)松葉杖状の「胸圧拘束具」で、井桁型の首枷は別途単独使用も可であり、必ずしも併用しなくていい。

胸骨に沿って反る、しなりの良い細竹を組み合わすことで、胸を圧しつけ乳房を押しあげる効果が出るので、材質の選択が難しいかもしれない。勿論割竹を長いヘラ状に削って使ってもいいし、同時にもう一本削り出しておき、搾乳効果を図ると視覚的に強烈なものとなる。

松葉杖風にたち割った部分は、前と後との長さが違い、正確なY字型ではない。それは後方部先端を寄せ合うように結びつけて、変化をつける上からも便宜な部分となる。

胸を圧し挟むのが好みではない場合、横通しの細竹(または

第三図



ヘラ)は使わず、松葉杖が腿の内側に当るよう下端をV字状に寄せ合い、のめりポーズをとらせることもできる。それからまた変化を生んで行くことが可能なのだ。

第三図、第四図は「竹責めのイマージュ」というより、竹材を使った責め具の製作アイデアである。図版の細字説明を参考に小道具の一つでも実際に作ってみられると良いと思う。

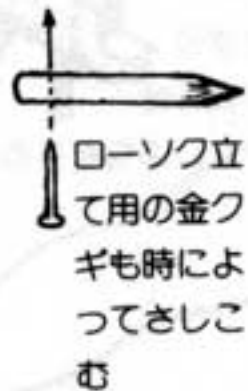
さて、次回からは皮を使った拘束具の製作に入る。「××のイマージュ」という空想ではなく、アイデアから製作、そして製品化した物の実際的な使用記録まで記述してみるつ

第四図

目かくし

乳枷

乳房を竹筒の中にしほり入れ、その上で太い竹クギを刺し込む



先端はするどくとがらせば効果が出る

竹クギ用の穴太さにあわせガタつかないようにやや小さめな穴とする

細用の穴

細竹をつづりあわせて腰ミノ風にする
銭竹のように音をたてさせるパチンコ玉カワッシャーを入れ重味をつけてもよいだろう
ローソクを立て、あぶり責めを試みる事が可能
のように節を選んで揃えておく

おさえぶた

足を入れる穴

腕当ては手の自由を奪うものであり、この沓枷をはかせてしまえば歩行も困難となって逃亡防止に役立つ

竹沓枷

竹沓（筒部）に足を入れたあとで砂をつめるとオモリともなり、枷の効果があがろう

各小道具とも、竹には縄がはいそうだという見地からロープ類で装着させるように図解してあるが、皮ベルトでも細鎖でもよいのである



水中メガネのような形状であるが、節で視力を封じてしまう
顔に当る筒部の中に脱脂綿をつめておくといよい

腕当て

左右の腕を腋の下から指先まで納めてしまう

切りおとす

馬蹄沓

高さをかえたものオモリを入れたものなど作って、はきかえさせると面白いであろう

もりなのだ。
幸いなことに、皮についで造詣が深い堀井一氏（奴隷市場代表人）が協力して下さることになり、モデルの手配もついたので、試作はそのモデル嬢を「実験台」にしてレポート化できる見通しがたった。御期待いただきたいと思う。



悦楽交遊記

前編

SMPかSMGか

鈴木 広一

週休二日制が確立した会社に勤めている関係で、私の道楽は一般のサラリーマンより倍増していることは肯首できる。週末が金曜日で、土曜から二日続く休みにかなり思いきった楽しみ方が叶うのである。私の趣味は八%映画の撮影、今は愛娘の生長の記録が中心である。尤も数年前までは御多分に洩れずホーム・ムービーのヒロインは妻であった。

W8 (ダブル・エイト) と呼ばれる旧タイプのフィルムは、十六%の映画フィルムを横二駒に往復して撮影し、中央で切断してつなぎ合わせる関係で画面は極少である。それに比べ、シングル・エイトやスーパー・エイトは八%映画専用の物であるから、映像も鮮明となり、開発された多くの機材との相乗関係

で、アマチュア映画作家の野心を満たしてくれる。私が愛用するのは勿論国産のシングル・エイトであり、愛娘誕生以後は一貫して同一規格のフィルムを消費している。

御用済みとなったコニカ撮影機と、W8のフィルムは我が家の「タイム・カプセル」に納められ、娘の成人後でなければ開くことができない。保管は厳重な妻の管制下にあつて、その事だけでも内容は推測されるであろう。

男の側からは秘悦の記録Ⅱ財産ではあつても、カメラに狙われ続けた側にしてみれば、屈辱・慚愧の思いの代ものなのであろうか、その所在さえ私には知らされていない。従つてW8からS8に使用機材が変わった時点で、私の映画製作の関心・主題・内容までが一大

変異を余儀なくされて、今日に至っている。

一粒種の娘を撮影している分には妻も機嫌がいい。主役をひき立てる脇役として顔を出し、時には「子供」をだしにして、自分の若くて美しい姿を残しておこうとでも意識するのか、主役が交代する椿事も起るのだ。

秘悦の記録

私の映画には父親である私は登場しない。メカに弱い妻は撮影機の操作を教えても一向にマスターできないのだ。あるいは、祖父と孫の関係にも見られる程爺むさい私の面影を残すことを嫌って、わざとトボケたふりをして、いるのかもしれないが、矢鱈と「母親と娘」を強調するし、「この映画は、あなたのお父



さんが撮って下さったのよ」と、私の死後に娘へ語って聞かせることを企んでいるようである。

事実、私の残された人生は短い。到底娘が成人して親許から巣立って行く日まで見届けることは出来ない。父無子のような不憫な生活を送らなくてはならなくなるのが目に見えている。カメラを回す私も、やがては迎える「母と娘」の暮しに励しをのこす思いをこめているわけなのだ。

閑話休題。

私は静止した映像には興味がない。スクリーンにはほぼ等身大に拡大投写される画面を眺め喜びを再起させて楽しむことを知ったのは

相づく航空機事故で空の旅の恐怖が話題となった昭和四十一年頃からで、それ以後スチールカメラは全く縁がなくなった。

ズームレンズが普及する前の、標準・望遠・超望遠とレンズ胴胸部を回転して交換するカメラ操作は実に楽しく何処へ行くにも撮影機を掌に握りしめていた。撮る材料は全く雑多である。新幹線に乗ればその車窓から風景を撮り、街角に立てば初めて訪れた土地の印象を、自分の見た目の備忘になるようにシャッターボタンを押すだけのことである。一本のフィルムは目まぐるしく変わり、メモしただけのものとしかしいようなないフィルム浪費の時代が過ぎると、被写体を一つにきめて腰を据えて撮る方向へと移り変っていった。

そのきっかけとなったのが、開局して間もないフジテレビのスタジオで知り合ったN氏の知遇を得たことだ。

N氏は巡査の扮装で出番を待っていた。ただそれだけなら私はあそこにも端役の一人がいると思っ一瞥したに終ったであろう。ところが、アサペンでスナップしながら退屈をしのいでいたのであった。不思議なことにスタジオ内にカメラを持ち込んでいることがとがめられていないばかりか、怪人二十面相の

大平透も明智小五郎の俳優や無名の女優までもが、N氏のスナップに快く応じているのである。いくらカメラ・マニアを自認していた私でもそこまで徹底した真似はできず、半ば啞然として見ていた。

N氏との出会い

カメラ・ドライ（立ち稽古）が終って本番に入る前の休憩で地下の喫茶室におりた時も私はN氏と直接口をきくことが出来ずに、仲間をこずいてN氏を指し、「誰なのか」と聞

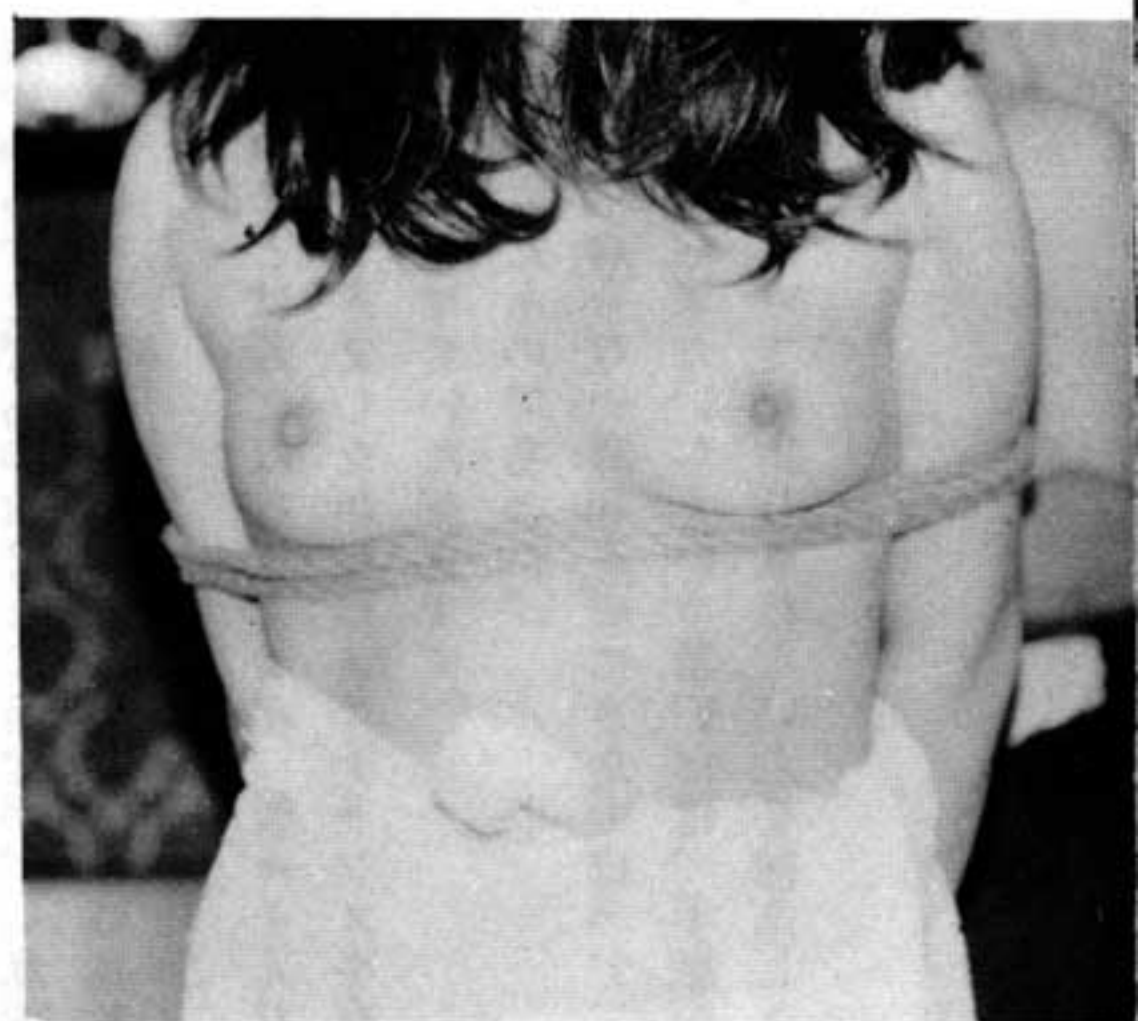




たのだということであった。それを聞いて何故かホッとしたのは、道理で図々しいわけだと羨望を納得でまぎらわしたからであろう。

本番が終って出演者たちが散りはじめると急に私はあせりを感じた。今、言葉を交わしておかないと、相手が俳優ではないだけに会う機会がなくなってしまうという心境と、カメラ・マニア同志の交遊を期待する衝動が湧き起ったせいである。

N氏の前に立ちただかつて顔を見ると、意外に若そうなので、演劇講師と聞いていて先生と呼ぼうとしていた最初の呼びかけが口に出ず、一瞬戸惑ってしまった私は、いきなり「カメラがお好きなようですね」と、相手が怪訝がるような口のききかたを



してしまった。

それでもN氏はニコやかに返事をくれたのである。

ホルクス・ワーゲンのカブト虫より小回りな、今は全く見ることもなくなったルノーに同乗して貰い、偶然にも帰路が同じ方角なのを幸い車中談笑のひとつきを過したが、それからの一、二年はN氏が後の中宮栄氏である片鱗すら窺い知ることができぬ「健全な」交際であった。

私の記憶に狂いがなければ、昭和四十年の三月に、発信が名古屋中央の、N氏の封書を受け取り、そのたよりに生つばを思わずのみ込んだ。なんと、女性を縛り上げたN氏自身の実写作品が封筒からこぼれ落ちたからであ

る。

当時私は健康を害し、宣伝業と袂別して養生のため郷里に舞い戻っていた。TV界から身を引いたことが、N氏の安心感となって私に知られざる一面をのぞかせてくれるようになったのだと思う。それにしても、失意暗胆たる思いの私に対して、思いきった処方箋をつきつけてくれたものである。

「……貴兄は女優某と別れたそうですね。病身の貴兄を見限って離れて行くような女には復讐などは考えず、彼女を無視できるような生涯の伴侶を探し求められ、至福・喜悦の男の半生を送られるよう祈ります」

こぼれ落ちた写真

N氏の一変した魔風に吹かれた私が、妖術にかかったように土色がかった病み上がり顔に血色をとりもどし、親姉弟を驚かせたのはその日から程遠くなかった。N氏からは折りにふれて「此処までおいで、甘酒進じょ」と手招くような、まこと、起死回生の妙薬のようなフォト・レポートが送られて来て、確実に回復に向って私は歩み出し、制作意欲がたかまって行ったのである。

やや説明不足のきらいがあるが、N氏と知

り合ったことで、私が摩可不思議な魅惑の世界に踏み込んで行くいきさつは記述できたと思う。

再度上京して、地理馴れした場所に住む所を選び、直接N氏と電話で話し合いが再開出来るようになったのは、その年の晩秋である。

わが事のように喜んでくれたN氏が、早速願ってもない朗報を伝えてくれた。

「明日おひまでしたら、我が家へお見えになりませんか。若い娘が……そうですね、午後八時という約束で来てくれることになってはいますが、余り当てにはできません。ですから六時頃から来られて、気長に待っていてもいいとお考えでしたら、八%でも提げておいで下さい」

「えゝッ？ 撮影予定があるんですか……」
思わず上ずった声になる私に、

「過大な期待は持たないで下さい。なにしろ絵を描く資料に様々なポーズを撮らせて貰うという約束まで漕ぎつけた相手ですからね」

密約めいた他聞をはばかる響きではなく、日常会話のそれと変りない言葉がN氏から発せられて、「女を撮る」ことに興味が湧き出した私はたちまちその気になってしまったのである。

密約——女を撮る」

これがN氏の勿体をつけた、お裾分け風な言い回しであったら、私は一言ぐらい遠慮の言葉をいい、「お楽しみを邪魔してはいけないから」とでもつなぐところだが、「私の快気祝いをしてくれるつもりだな」と直感的に悟って、

「待つことは苦にはなりません。散々そんな目に会ってきましたからねえ。チャンスを用意く利用させていただきます」

と答えたものであった。

当てにならない時間を更にさかのぼって二時間前から来ないかという誘いには、手紙のやりとりだけでは語りきれない点を補充しよ



うという考慮が働いていることは容易に推量できることである。その後、高鳴る胸に思考までが乱れて、翌日までどう過したか記憶がない。ともかく朗報は東京生活再出発の最高の贈り物であった。

大正末年生れの私と、昭和っ子のN氏との間には十年近い年の開きがある。そこにはおのずと女性関係、女性経験、異性観にも相異点があり、純粋に女性憧憬を語るN氏は、私から見ればねんねであった。

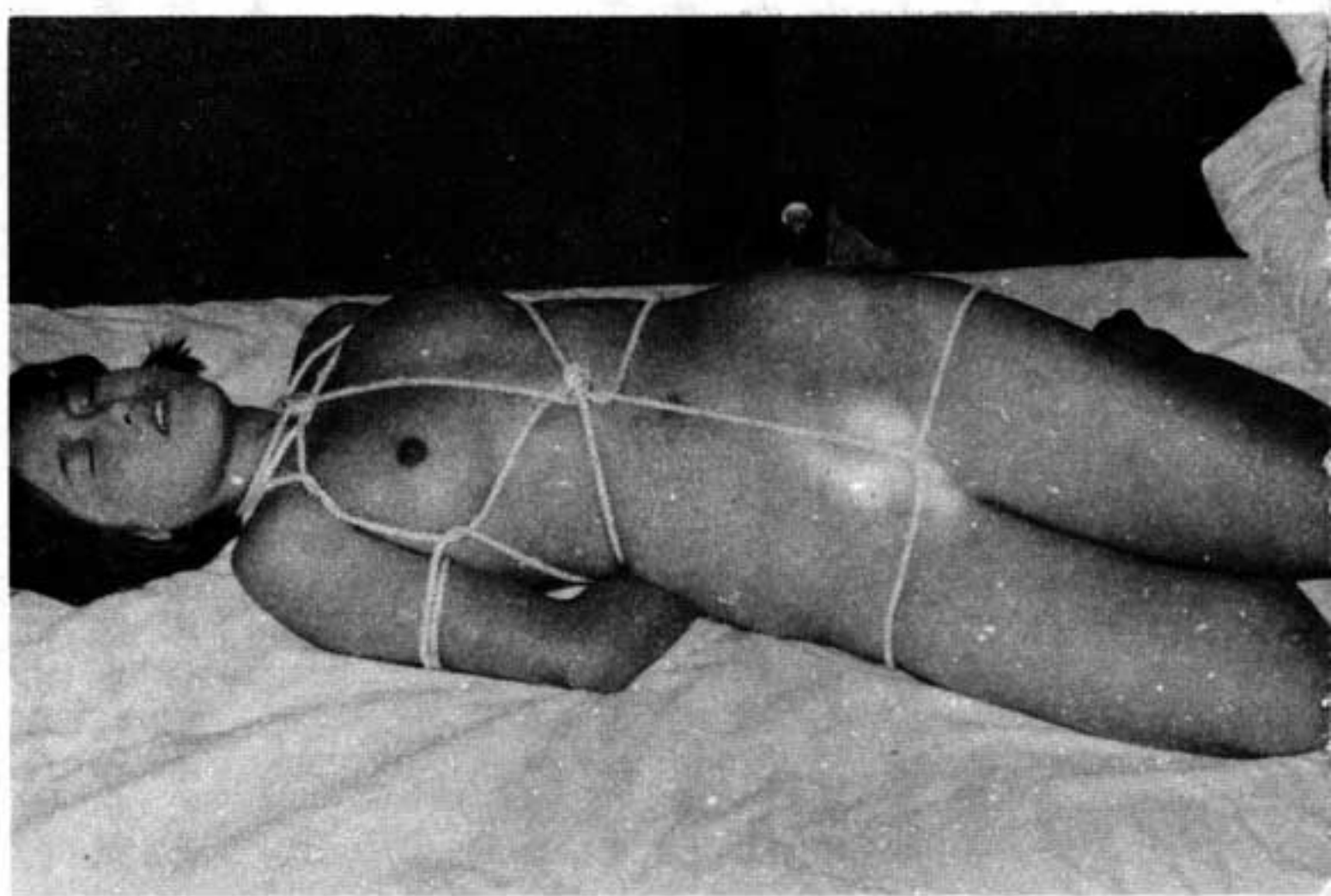
性欲のはけ口としての接し方、人斬りの数を重ねることに慢心していた私にとって、N氏の「この世で私が必要とする一人の女性と出会えばいい」とする熱望の姿勢は微笑しくもあり、一方では恐懼すら覚えるほどであっ

た。

「私は全ての事柄に対して、自分の判断で生きて行きたいと思ってます。私の考え方と、その実践の方法では、SMプレイというものは異性選別の手段でしかないのです。そこで示さざるを得なくなる自分の赤裸な人間性と相手を深く考察する機会作りの計画的な合一感が芽生えれば、人間信頼の第一関門を通ることが出来たことになり、連帯感を育てて行くことにもなると思うのです。上辺だけ見せ合って『それで是し』とする恋愛や結婚生活への進展は、私が最も否定する男女関係の姿です」

「失礼ですがNさん。貴男は恋愛経験は？」

「ひと通りのことは、殆んど体験してきました。それを小刻みに小説の主題にすれば文士の仲間入りにしても題材には不自由しないでしょう。けれど過去体験は取り上げたくないですね」



N氏の回答は、女体遍歴を重ねて来た男に対する虚勢で云っているのではなく、年令に応じた人生体験の謙虚な述懐なのだ。例えばの話、「子供が出来たの、どうしよう」と女からいわれると、私は「墮せ」のひと言で金を渡し解決したが、N氏はその相手の女性と共に医院を訪ね、胎児が掻き出されて行くのを痛恨の面持ちで眺めていたという……従って「殆んどの体験」は数でこなした内に得たものではないにしても、私が責任回避するよ

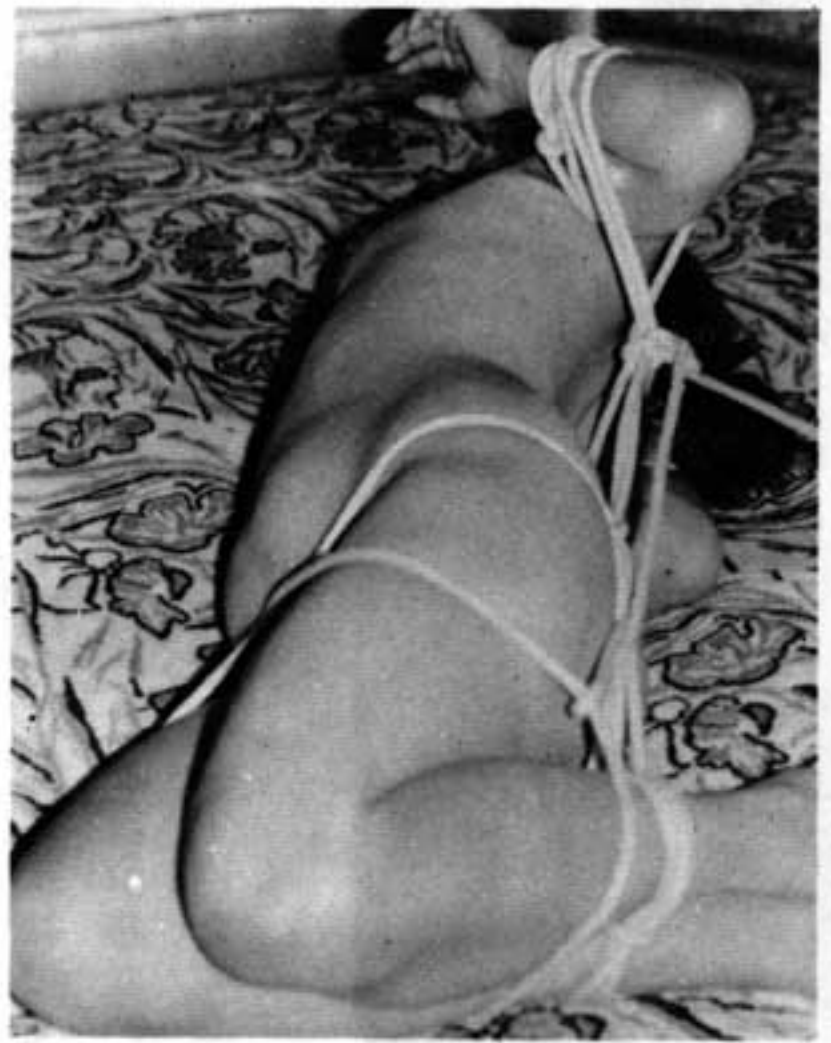
うにして見聞から欠落した部分まで、N氏は緻密に万遍なく目をとどかしていたことになる。遊蕩快楽と希求自重の差を見た思いがして私が肅然となったのも当然であった。

女性憧憬—女体遍歴

「宗教支配と時代風俗の影響を除外して男と女の本質を探求すれば、いつの時代でも同じであり、人間感情も変っていないと思うのです。公序良俗という時勢の判断も『人間の生活』からいえばおこがましい言草ですよ。主体性のない人間ほど実直そうに時の流れにおもねてしまい、自分で自分の生活を窮屈にしてみました。自分ではいいでしょうかね。大人げない表現ですが、私は自分で求めて世の中に、人間愚衆の中に加わったのではないと思いますし、育てられてしまった以上、あの生きて行く分は勝手にさせてくれといいたいものです。これからの人間は、生殖義務を負うことはないと思いますよ。そこに気付けさせるのが、人間教育だと思いますよ」

N氏の語る事柄を凝縮すると誤解・批判を生む結果になり兼ねないが、哲理として私は受けとめることが出来た。

年は若いが魅力のある人だと思い、私がN



氏の所へ頻繁に通い出したのは、単なる風潮に侵蝕された好事家ではなく、言行一致の天性を発揮する偉材に違いないと感じ入ったからであった。

私が招待にあづかりN氏の居室に入った時の印象は書き残したが、車の音を聞いて開けたらしい扉は細目に開き、氏は電話の最中でその声が低く聞きとれた。無言の手招きと座を示す動作が、流れるようなパントマイムで私は誘い込まれてしまう。さすが演技指導する人の仕事なのである。

「一寸待って呉れ、人が来た」

などと先方との話を折らず、淡々と言葉を伝えるところは、いかにもN氏らしい。と同時に話は重大な内容と見受けられたので、私

も静かに着席して、送話の完了まで無言で待った。お蔭で訪問の挨拶ぬきで前述のような対話になったのだから、私は他人行儀でかしくまる気遣いもなく済んだのであった。

飼育された人間

「荒療治の処方箋のお蔭で、息吹きを取戻しましたよ」

と私が改めて謝意を表わすと

「いやあ……ハラハラものでした。人によつては『何だ、コンナもの。馬鹿にするな』と思うでしょうし、どう貴方が反応されるか気になって……。しかし、その反応を知ることでも私の楽しみの一つですから」

「なにごとにも体当りですから」

「自分なりに判断しての上で」

「向う見ず、ではないのですね」

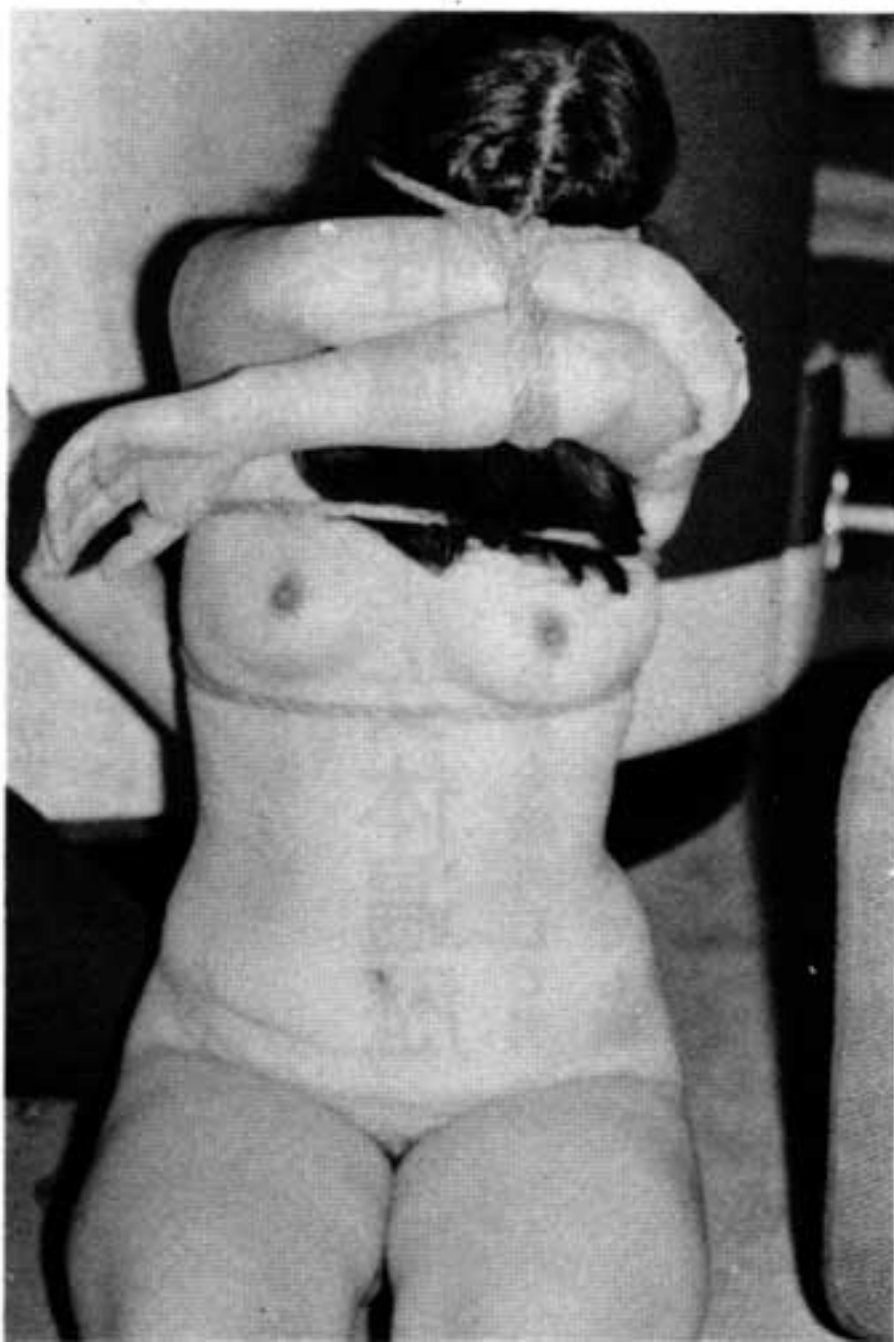
「始めから美と醜というように結果が判っていることに、復習するような挑み方はしません。人間の住む社会、平地の中での冒険しか出来ない小心なところがあります。私には山があっても登る気持ちは起りません。私にとって一番愚しい人間に見えて来るのはスポーツマンという一群です。あれこそ『飼育された人間』ですからね。記録・勝敗で一喜一

憂する単純人間に調教されて、それしか能がないような生き方をしている。スポーツマンシップというものの自体まやかしですよ」

「独断ですね……問題ありそうなロジックです、それは」

「私は土台、独断家です。既成のものをくつがえすことに強い興味を持っています。でも私の言葉から問題とされる事柄が検討され直すようになればいいと思います」

S M話をきくつもりが二時間が、一向にその方の話題に移らぬまま過ぎて、「今晚は、お邪魔します」と入って来た女性に全く予備知識もN氏から与えられないまま、顔を合わせる事になった。



マゾ女自伝

女奴隷好子

西原 好子

父親ゆずりの不美人の私には、今の奴隷生活は似合いなのだと思います。この私の奴隷生活の発端は……

女奴隷好子



ご畏敬申し上げます編集人さま
過日はたいへん貴重なお写真を
沢山ご恵送くださいまして、
誠に有難うございました。

主人、山崎さまからも、是非
よろしく御礼申し上げますよう、
きつく申し渡されておりますの
で、重ねて御礼申し上げます次
第でございます。

新しい雑誌ご発刊とのおしら
せは、山崎さまを大層お喜ばせ
したようでございます。早速ご

下命の告白記を書くように申し
渡されました。しかし、私には

そのような文才がございません。
どう致してよいのやら悩みに悩
む毎日でございますが、

「お前の文章など気にするな。
活字になれば読めるように綺麗
にまとまってしまおう」

とこずかれて、書くはめにな
りました。

どうかそのおつもりでご笑覧
賜りとうございます。

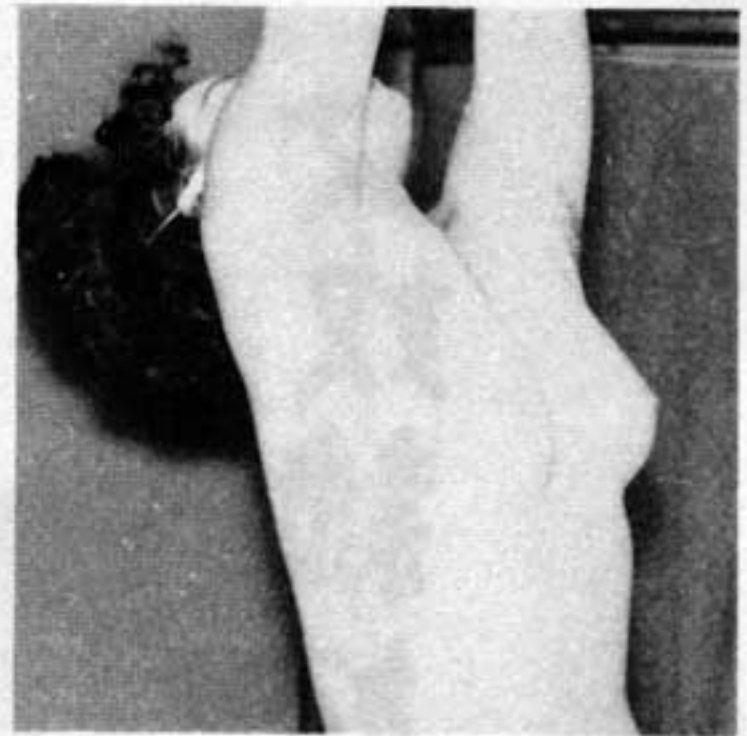
ボーリングが唯一の趣味だった

私の本名は「にしはらよしこ」
当年とって二十八才。尾瀬沼に
近い市に生まれました。

中学校をでた年に一度東京に
出て、ある町工場の女子従業員
となり、半年後には母が亡くな
りましたので、そこをやめて故
郷にもどりました。

おつとめは、いろいろと気を
使ってくださいる社長のおかげで

苦しいことはなくて、週一回は
社員慰勞ボーリング大会などあ
って、それが楽しみで一生けん
めい働きました。私のボーリン
グ熱はその頃めばえたものです。
家にかえってからボーリン
グがしたくてたまらず、家の手
伝い仕事ですむと、よくボーリ
ング場にいらしていました。
あまり夢中になりました



ので、父は指の骨を折って競技ができなくしてやると、私を追いかけてきて、必死になって逃げたことがありました。

二年後にまた家を出ることになりました。父が「オメエは他所いって働け」といったのにはわけがありました。自分には後妻にしようとしている女ができ、私がいるとじゃまになると思っただからで、私は「出て行ってやるよ」といって、二度と家にはもどらない覚悟で汽車に乗りました。

今度は東京には出ないで、埼玉県の××市で食堂の住込み店

員になったのです。それが私の運命を決めることになったのでした。

そこのお店の採用審査というのが、とても変なものだったのです。

「食べ物を扱う店につとめたことがあるか？」という質問なの

歯科用診察台で全裸をまられる

白衣を着た店主の奥さんが一人で、私の身体検査をはじめたのですが、身長、体重、胸囲など学校での身体検査とあまり変わらないことがすんでから、腕を背中であぐら組にするようにされ、そのまま椅子に坐らせられたのです。

白い布が取りのぞかれた椅子は、理髪店にある物とはちがひ、歯医者者の治療椅子でした。背を低く倒されて、精密検査のときに動かないようにするための皮帯が背中であぐら組している腕も動

で、

「いいえ、経験ありません」と答えますと、

「お客さんに食べてもらう物を扱っているのだから清潔でなければならぬ。それに保健所に健康管理届をしなければいけない規則になっているから……」

かないよう胸の上からしっかりとめられました。



一等最初は目の検査で、瞼を指で押し開かれて、長いこと天井を見つめるようにいわれて、目が乾いて痛くなるのを無理にこらえさせられていますと、涙があふれ出てきました。

その涙をスポイトで吸いつくされて、次ぎは目薬の点滴です。私は半べそをかきだしたのです。そのあと両目はガーゼの眼帯で目かくしされ、少しきつめのゴム紐が耳にかけられると、耳の検査になりました。小さな穴を

大きくするような冷たい固いものが耳の穴にはめこまれ、腕時計の音が近ずいたり離れたりする聴覚検査がはじまったのですが、そのうちに奥さんが、いろいろなことを聞き出しにかかりました。

「男に接吻されたことはあるの？」

「いいえ」

「男に股の中心をいじくられたことある？」

「いいえ」

「嘘をいっちゃ駄目よ。調べるとわかるんだからね。本当に今までさわられたこともないのかい、オ××タを」

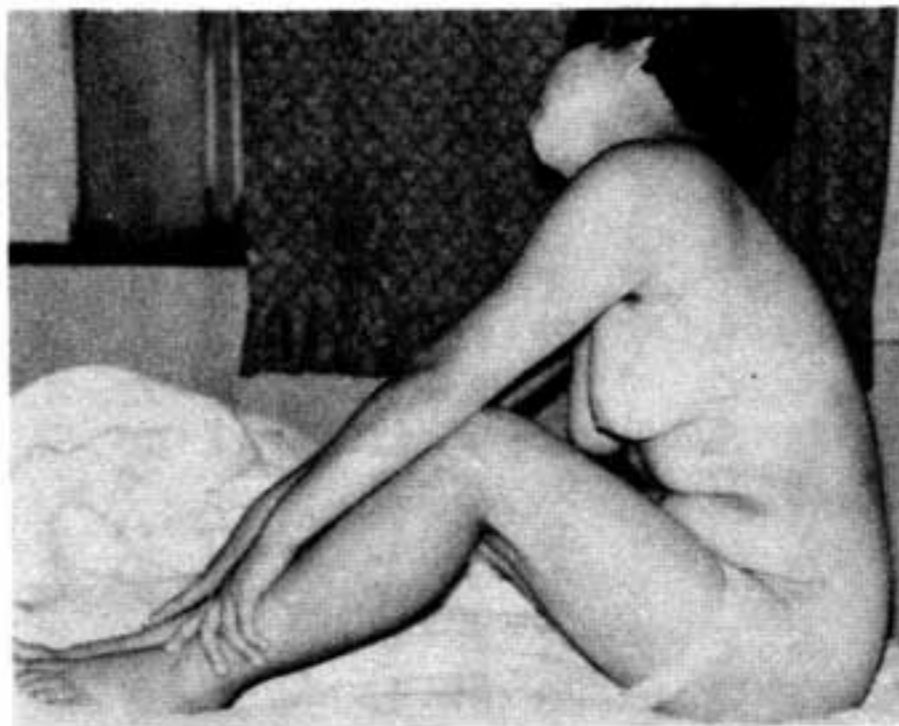
「ありません」

「そう」

私はボーリング場へはよく行きましたが、男友達はいなかったのです。男親ゆずりの醜い顔のせいで、スコアーは人からほめられても、表彰されるとみんなはひやかしに急にかわって散

っていつてしまうのでした。そんなわけで誰れもそのあとさそってくれるような人はいなかったのです。全部正直に奥さんに話しますと、耳から物がはずされて、耳掃除のようなことをされました。

つぎが鼻でした。目の検査のあとで湿りけが多くなっている鼻をつままれて鼻汁をしぼり出されると、綿かなにかをつめ込まれ、口の中を調べ終わるまで詰め物はとってもらえませんでした。それがすむと鼻の中には



メンソレタームのような、頭がすきっとする匂いの薬が塗られて、口嗅や舌の表面をへうでそぐような検査が済んだ口の中にガーゼをいっぱい頬ばらせられて、精密検査が全部終わるまでに唾液をいっぱいしめておくようにいわれたのです。

その時になって、これから先きまだまだどんな検査をされるかわからないと恐怖心が急にわいて、背すじがとても寒くなったのでした。

目は見えないし、口もきけない状態で、私は椅子にしっかりと固定されていたのです。もっともらしい説明があって、乳首がつまみもみされたり、乳房全体を指や掌でマッサージされるのも身体検査のうちなのかしらと思っっているうちに、部屋に奥さんのほかに人があるように感じました。

やがて、手の暖かさがはつきりと違う人の指先がお腹の上を

押しまわり、カミソリの刃が体毛の剃りおとしのために使われ出したのです。

「店に出る女の子は、毛がこすられて落ちたりしてはいけないから剃るようになっていくのよ」と、剃るわけが聞かされ安心はしたのですが、本当につるつるになってゆくのがわかるように、皮ふを引きのばされたりして深剃りされて、ひりひりと痛むところが次第にひろがってゆきました。

突然、不気味なモーターの音がしたかと思うと、股のつけ根のあちこちがひつつられたようになって、電気掃除機のくたのようなもので剃られた毛を吸い取っているようでした。

その頃になるとはつきりと奥さんだけではなく、二人も三人も見知らぬ人がいて、一諸になつて私の体を眺めたり足を持ったり大きく広げていることがわかったのです。

かがみこんで鏡に写してみなければ自分でさえ見られない所を、ひやりとする冷めたいものでこすられたり、ひしゃげるように押さえつけられるような感じが続いて、尿道になにかが刺し込まれ、思わず腰を浮かせ体が縮むような、苦痛が起りました。でもそのあとは（かなり長い時間がまんしていた）尿が抜きとられて行く、不思議な気持ちよさを感じました。

「小便を分析すると、自分では気づいていない悪い病気でも見つけることができるのよ。ふん張って全部出しつくしなさい」

などという奥さんの声がしましたが、私はにぶい痛みを残している上にあたりを盛んに刺激するマッサージ機の震動で、声にならない叫びをあげるばかりでした。

目まいがしたかと思うと高い所から無理矢理突き落とされるようなすくみが体をつきぬけて、

力がふわっと消えてしまう奇妙な感じがしましたが、なにをされるのか不安でたまらない気持ちまでが薄れてしまったのです。

口の中のガーゼはぐしゃぐしゃに濡れ、それをずるずると引き出されるまで私は気を失っていたようです。ボーリングのゲーム疲れでもこんなけだるさはなかったと思ったほど、ふぬけた感じがして汗が流れるのも氷のようにつめたく思いました。それを奥さんらしい人がタオルで拭きとってくれましたが、これでやっと精密検査がおわるのかと思った矢先き、今度は自由

になった口から大きな叫びが思わす出たくらい、いきなり身を裂かれる激痛が襲ってきたのです。激痛は一瞬でも裂かれてゆくような痛みは長く残っています。私は突き上げる苦しさで胸をしめつける皮帯の痛さで息までがつまり呻き続けました。話に聞いた強姦というものが、こんな思いをさせられるものなのだろうとわかりだすと私はあきらめと無念さどがまざりあった捨て鉢気分、わざと大げさに泣きわめいてしまったのです。

想像を裏切る新妻教育の数々

採用審査という凌辱が、人手不足の女店員を引きとめておくための非常手段だと知ったのは、

店員教育が終って実習になり、女子寮に移されてからのことです。本店と支店とを合わせて十

三人の女店員が合宿している寮は、本店より建物が大きい支店の三階にありました。

四人ずつ六帖の部屋が与えられていて、部屋ごと一班二班と呼ばれていました。各班とも班



長がいて、その人が班員を監視するような仕組みになっていたのです。班長は店に長いことつとめている人で、支店が新しく開店するとその責任者になれるのだそうで、お店に対して絶対的に信頼し忠実でした。現に寮長と呼ばれていた人は一人部屋で世帯道具まで揃えて住んでいましたし、班長はその人のようになれるのを楽しみにしていましたから、私がうけたようなみじめな思いもすっかり忘れたようにキビキビと働いていたのです。自然連帯責任制の班員もその人たちの影響で、おかしな

審査のことや毎週一回の清潔検査も当りまえのことになり馴らされていったのでした。

八の日定休日には、班員同士で出かけるなら外出が自由で、私はまたボーリングを楽しむことができましたし、班長さんや他の女店員にコーチして仲良くすごすことができました。月三



回の定休日をボーリング場通いの楽しみに使っていたせいで、月日のたつのはとても早く感じられましたので、五年間はまたたくように過ぎました。

そんな暮しぶりの中で、ある日、私は本店の店長に呼び出され、突然なことに結婚話を持ちだされたのでした。

私は夢かと驚き、すすめられるままにその話をおうけしたのです。その頃は私も班長になっていましたし、なにか私にもいい話があったもいい頃だと思っ
ていましたから、商売するより結婚して、サラリーマンの奥さんになる方がいいと考え、すべて

をおまかせしたのでした。

その日から私はお店を休み、花嫁修業にはいることになりました。支店の階上の寮から本店の店長の部屋に移り、一日中奥さんがつきっきりでいろいろ教えて下さいました。

店長を花婿に見立てて、朝、目が覚めた時から奥さんの見よう見真似のおさらいがはじまるのです。私が女性雑誌で読んで知った新妻の心得などは、なにかも嘘のように思われました。大体、夜やすむ時から違うのです。

眠っている時、薄目をあけて眠っているようではいけないと、スリーピングマスクをつけ、歯ぎしりや鼾をしないための噛み布を口唇で挟み込むのが新妻のおくゆかしさと教えられて、その通りに見習うのでした。
目覚しが鳴って起きると、噛み布で秘所を掃き、裸になっ

て逆巴の挨拶をして夫の目を覚ますようにするのです。体は浮かすように肘と膝で支える四つん這いで、ファロスをおしゃぶりするのです。朝のご機嫌とりの上手、下手が夫婦の愛を強くするか、もろいものにしてしま
うかの分れ道になると奥さんから聞かされて、私は一生けんめい上達するように努めました。

夜になりますと、床の中での交わりについて教えていただき、時には実際に店長に抱かれて、それこそ手を取り足をとりの実習にはいります。ですから結婚式までの二ヶ月間に私は出来あがった体になっていました。

お式の三日前からみそぎにはいり、親がわりの店長の家からお仲人さんの家にあずけられました。浦和の静かな住宅地にあったお仲人さんのお屋敷は、お庭に大きな番傘をひろげたような東屋がありました。

そこがみそぎのための場所

した。

私は素肌直接に白い着物だけ着せられ、太い丸太のような一本柱に抱きつくようにさせられ、両手の手首を縛られたのでした。きつい結び方ではありませんでしたが、朝の八時から夕方四時までは柱から離れることは出来ません。まわりはよしずが立てかけられていて、お仲人さんは正午になりますと、よしずの一ヶ所をあけて入ってこられます。そして着物の裾を一気にた

珍性具、新性の実験台になる日々

新居は川越市内でした。それはそれは毎日が楽しい暮しでした。証券会社にお勤めのご主人さまをお見送りしたあとは、食堂に勤めていた習慣で、食器戸棚の物を全部洗ったりお庭掃除などしないではいられず、一日ぼんやりやりすごすことはありませんでした。

くしあげられますと、私のむき出しになったお尻を、のりとを唱えながら白木の板で十八回、当時の私の年の数だけ左と右とを同じだけ叩かれるのでした。それは悪りようを払うことと、身分の違う家に嫁ぐ娘が清められる修業なのだということ、花婿がわの土地の習慣だということでした。

こうして九つ年上の山崎様と私は結婚することができたのです。

「綺麗好きな女房っていうのはいい」とほめて下さり、夜のおつとめも積極的に喜んでいただけるようにしましたから、ご不満はなかったようです。店長ご夫妻の教え通り毎月一回はお仲人さんのお屋敷にゆき、新しいお作法をご挨拶のあとに教えていただくのでした。

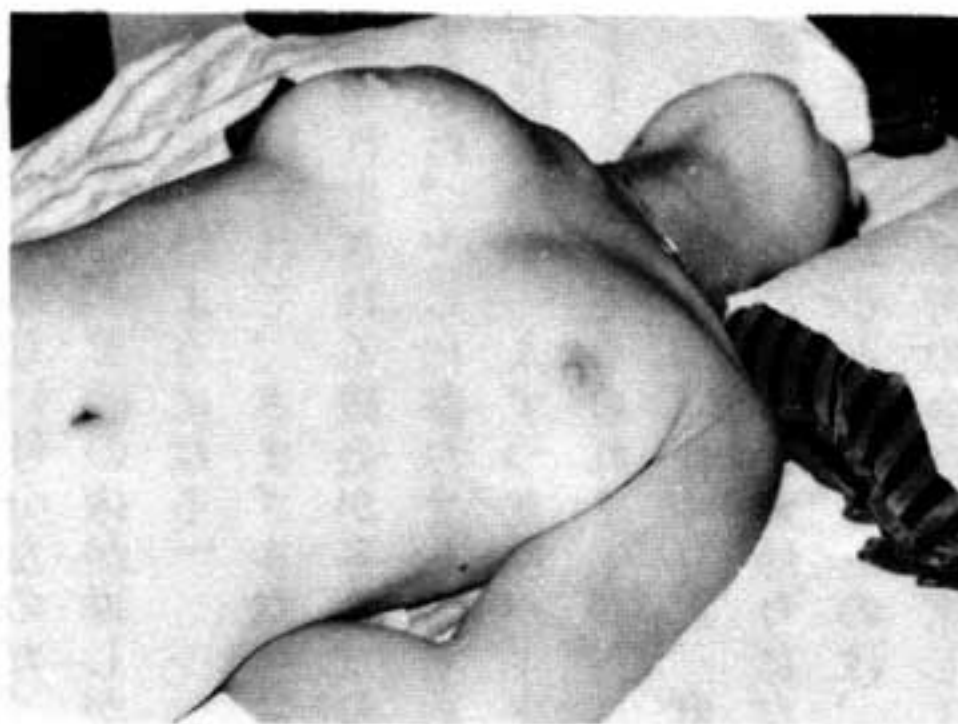
参考に見せて下さる絵や写真は、見るだけで濡れてきてしまうほど強い刺激がありました。ご主人さまも、それを楽しみにして私を連れていってくださるようでした。

上気してお手洗いへ逃げこみ、たくなる私へ、
「おもしろい珍品が手に入ったから試してみかね、山崎君」

と仲人さんはおっしゃって、とたんに私はお座敷のまん中で実験台にされてしまうのでした。私の悶えや思わず叫ぶ恍惚の声が、男の方にはとても良いお酒の肴であったようです。



でも、新婚生活も半年すぎたあたりから、落ちついた平凡なものになってきました。ご主人もお仕事のお疲れのせいなのか私と一緒に休みになることさ



え避けてしまうのです。私は自分の若さをもてあますようになりしました。そして早朝ボーリングやマチネー・ゲームなどで家を留守にすることが多くなったのです。

私の楽しみがボーリングしかないことはご存知のはずでしたし、「肥えすぎの体には美容にもなっていない」とさえおっしゃっていたご主人さまでしたが、家に空巣が入って荒された事件がおきてからは、きびしく外出

を禁じられてしまいました。そればかりかそのあと、「お前のような奴は妻だとはいえない。離婚する。出て行け」

と、私がボーリングクラブの会員になるために『奥様金融』から借金した返済請求書までつきつけて、大変なお怒りようでした。

「クラブは退会します。借金は働いて返えます。ボーリングは二度としません。離婚しないで下さい」

と、私は必死になって哀願したのでした。しかしご主人さまはさげすみの目をお向けになるだけで、二、三日は口さえきいて下さらなかったのです。やっとご主人さまから声がかけられた時は、私は嬉しさのあまり声をあげて泣き出してしまいました。

「お前に出て行けとはいわないが、俺と暮らしていたければ奴隷になれ。もともとまだ入籍して

ない内縁関係だ。俺の方で出て行くこともできるんだ」

お話の意外さよりも、奴隷になれば別れなくても済むということの方が私には大事に思われました。奴隷というものがどん

秘密パーティーで鞭打たれる私

編集人さま

これが私が女奴隷好子になるまでの大まかないきさつなのでございます。ボーリング熱が過熱状態だった時期にのぼせあがってしまった娘が、ブームの落し子のようになって選ばなくてはならなくなった暮しだったと申せましょうか。男親の身勝手に反抗して家を飛び出した娘が、精一杯自分だけで生きようと思いつながら、結局のところはどなたかに頼らなければならなかったバカな女の宿命だったかもしれません。

不思議なことには、奴隷とな

なものかよくわからないままに、私はご主人さまにおすがりしてしまったのです。

しかし、結局はそれがわたしにとっては似合いのことでした。

った私を、ご主人さまは前にもまして可愛いがってくださいるのです。

「お前のような女は『女郎しよ』というんだ。生れつき男が



好きでたまらない性分なのだ。
これからは、お前の体が淋しが
らずにすむようになる」

といわれて、さまざまな会合
に連れ出される機会が多くなり
ました。どこに参りましても殿
方は必ず一人ずつ女性パー
ナーを連れてこられます。

ご主人さまが、ゴルフだ、麻
雀だといわれて家にお帰りにな
らなかったことがあったのは、
こうした秘密の会合に出席して



おられたのに違いないと思い当
った私は、一人で不安な夜をす
ごすより、いつもお誘いをうけ
てお供することの方がかえって
安心で、口こそ出しませんが会
合のある日を楽しみに待つよう
になりました。

ご主人さまのお得意は、スパ
ンキングなのでございます。縄
で縛られることはほとんどござ
いません。私も以前お仲人さん
のお屋敷の中の東屋で、お尻を

打ちすえられたみそぎ以来、身
がひきしまるような鞭打ちが
好きになってしまったのでござ
いましょう。連れてこられた他
の女性が、震えてこわがってい
る中で、会合の雰囲気をもりた
てるために、ご主人さまの鞭さ
ばきにあわせた叫喚をあげます
ことに、なにものにも代えがた
い快感を感じます。

イソップ物語の作者であった
奴隷が、中味がお弁当であるこ
とを知って、仲間が運ぶこと
を嫌った重い荷物を背負い、旅
のおわりにはすっかり手ぶらに
なって楽をした話のように、私
の「泣き女」の役まわりは、あ
とが楽しみとなりますし、ご主
人さまをお喜ばせることにな
るのでございます。

編集人さま

マゾ女自伝は、この辺りでお
わらせていただいてよろしゅう
ございましょうか。ご主人さま
は写真を撮るご趣味はなく、会



合でもカメラは持ち込みが禁じ
られている方が多いのでござい
ます。その代り、テープ録音は
皆様盛んになさっておいでで、
新しい雑誌の付録にソノシート
がつくようになればいいがなど
と、ご主人さまがいつておられ
ます。きつとお送り申し上げる
写真は、昨年のお正月の会合の
ものだと思いますが、私もそれ
以外には写されたという記憶が
ございません。
その点を何卒お含みおき願わ
しゅうございます。

カメラ・レポート②

好事三昧



深夜の特撮依頼

六本木 薫

木枯の吹く寒い日であった。編集長からの連絡で、私は地下鉄線の某駅の入口で待っていた。約束の時間が、何と零時三十分、つまり直夜中の一時に近い時間であった。凍てついた大地から冷気は遠慮会釈えしやくもなく私の足元から這い昇って来ていた。意外

とリチギである私は、十五分も前から待っていたのだが、約束の時間が迫って来ても、目ざす編集長の人影は来る気配すら示していなかった。

妙な時間配分だと初めはそう感じたが、同行して来る筈の人の時間に合わせると、どう

してもそうなるのだそうで、仕方がない。

ただし、待てど暮せど来ないのには参ってしまった。五分過ぎ十五分経過してゆくと、終電車が出て行って仕舞い、駅員が情容赦のない顔付きでシャッターを下ろしてゆくと、私の待遅スペースはいちぢるしくせばまって

しまう。

生憎なことに、ご丁寧にも小粒の雨足があり、霧雨模様の淋しいペーグメントを眺める私に、流しのタクシーが哀れっぽい目付で行き過ぎていく様子に、ひととき寒さが身に沁みこんでくる。

三十分も過ぎてくると、私とてあきらめの心境に立ち至ってくる。ただし家に帰るにしてはタクシーの顔も少な目になっていて、どうするべきか悩んでしまう。

約束の時間が一時間を少々越えた頃、
「六本木さーん」

深夜の街に編集長の声が聞こえ、はっと

我に帰った私は、その方向を見定めると、いたいた。見なれたシルバークレイの編集長愛用車が、そば降る小雨に打たれ乍らも、美しい曲線を示して……………」

「いやあー、申し訳ありません……………」

「……………」

しばし私は無言だった。決してふてくされていた訳ではない。寒さに歯の根が合わない状態であったからである。

車中は天国であった。ほど良く暖まった室内は、外気と対称的な温度のため、いたる処のガラスは曇っている。

後部シートに腰をおろすと、ほぼ同時に車

は走り出した。

「……………」と云った次第で、大変に遅れてしまつて申し訳ない——」

編集長の言い訳を聞くよりも、急速に暖まってくる室温に浸っている方に、私は夢中であつた。どこへ行くのか私は知らない。が、とに角車は、深夜の街を走り始めていた。

それにしても、突然の特撮行であつた。こうした撮影には、さまざまな障害があるものだが、私の数多い経験の中でもこのような深夜の特撮はまれだといつていい経験となるはずのものだった。

郊外の廃屋を借用し

車のハンドルを握ったまま、編集長は私に若い女性を紹介した。と言っても、後から判ったことで、助手席に身を埋めているその女性

性は、別に身体をシートから乗り出すようにした訳ではないから、ただ黙って頭を下げる様子がうかがえただけであつたが……………」

身体が芯まで暖まってくるにつれて、段々

と編集長の言葉も判るようになってくるのだから、コンディションと言う奴は大切なものだ。

着いた処は都心から少し離れた、武蔵野の面影を幾らか残してあるT区のはずれ、某氏宅の離れであつた。

現在は全く使用する機会がないそうで、外

観は荒れ果てていたが、室内に入ると、綺麗に整頓されてあつた。しかし、常時人が住む目的ではなかったそうで、セントラルヒーティングなどはなく、暖房は石油ストーブがひとつ程良い室温を保っている。

何はともあれ、コートを脱ぎストープのまわりに位置して坐りこむ。ふと時計を覗きこむと、午前一時を廻っている。

自動車の内部と違い、離れでせまいとは言え、室温が高まるまでは時間がかかる。三人三様の恰好で暖をとる。一応は都内でも都心

から離れているため、郊外と同じで、深夜の静寂は心にくいばかりであった。

私は車から運びこんだバック類を手元に引き寄せて準備にとりかかる。手あかでテラテラと光っているバッグは、購入当時ば時代の最先端をゆくデザインであったが、今はそのよすがもない。

角々がすり切れ、所々表皮が剥げていたが、私には愛用のバッグである。チャックも閉りが悪くなり、余程の力をこめないと開閉がむ

ずかしいが、使用者の私の手に掛かると苦もなく開閉する。

取り出した物は、まず縄束である。いわゆる綿ロープと呼ばれているヤツで、それ自身はそれほど高価なものではない。長さが五メートル、七メートルの二種類がある。見た目には縄特有のゴツサがあるが、手に取るときはどの手触りの悪さではない。

まして、使いなれた縄である。この物を言わない単純な縄は、私と言う使用者によって、

もう何人の女性の肌からみつぎ、自由を束縛しただろう。

手首にからみつぎ、腕を締めつけ、乳房を責め、胸を襲い更には女性の神秘ゾーンであるヒップの谷間に深く陥没したりしている。

縄と私だけが知っている歴史があるのだ。

ある女性は痛さにもだえ、ある女性は喜びの叫びをあげ、そしてある場合には充分な若い女性独特の羞恥をもたらしていた。

手あかばかりの黒ずみではなかった。脂汗肌のぬくもり、また涙のひとつくも含んでいるかも知れない。

タオルもある。

これは猿轡ぐんわの役目を果し、汗をぬぐう作業に従事し、目かくしの役もなしていた。

冷たい金属の輝やき——本物ではないが、ソックリな手錠、更に浣腸器……。

ひとつひとつが手なれたものであった。それらを床の上に置き、もう一つのバッグを取り寄せて、中からカメラを取り出す。

ペンタックス・モータードライブ。

このカメラは、風景撮影に使われた事が無い。そのほとんどの使用が、若い肢体の羞恥姿態を記録するのに使われていた。

ストロボ……そうして、フィルムを取り



出す。三十六枚撮りのフィルムは、最低でも十本は持って来ている。

その一本を箱から出し、ペンタックスに装填する。これで私の準備は完了であった。

「そろそろ始めますか」

「——— そうですか」

そろそろ室内も適温になりつつあった。編集長も、何か気づまりな空気にへきえきしていたらしく、すぐ様行動に移る。

この人の特徴は行動力の早いことであった。

作り物にならぬ様に

西洋映画の中の囚人服の様な横縞模様のスエーターとフランネル地を思わせるスラックス——— いやズボンと言った方がいいのかな

——— やばった服装である。

だが、スエーターを破らんばかりに張り出した胸の隆起と、大きく張り出した腰の調和は実に見事な娘であった。

瓜実の顔に団子っ鼻、決して美人の部類には属さないだろうが、若さの特権か、匂うような女の香りが漂う様な娘と言える。

縄束を手にして近寄ると、敬子は一瞬訴め

何事に依らず、すぐさま実行に移る。その結果失敗は結構あるらしいが……。

撮影に不用の物をどんどんと片付け、あつと言う間に広い場所を作って仕舞う。

「こんなもんでどうでしょう？」

「そうですね———」

ブルーのじゅうたんを見て、私は早速構図を頭の中に描くと、彼女、牧本敬子をうながしてその上に坐らせた。

るように私を見たが、すぐにあきらめた風を装うと、自分から両手を後に廻した。

「おつ、なれた感じだね、途中で痛かったら、痛いって言ってくれよね。ボクの方は縛る方だから、加減はしてるつもりでも、強くなっ

ちゃう場合があるから……」

「はい」

ふっくらと肉の乗った手首に、綿ロープをからげる。どちらかと言えば肥満ぎみの牧本敬子は、肉付きの良い方である。ギスギスした手首ではなく、手の指一本一本も、文字通

りフックラとした感触である。

かなりの手加減をしたつもりだったが、縄を三巻きばかりすると、容赦なく肌に噛みつくように思われる。

手首がずりさがらないように、胸に幾巻きか巻きつけて縄尻を留める。まずは簡単な後手縛りである。

「どう、痛くないかい？」

「いゝえ———」

念のために訊いてみると、敬子はさり気なく痛みを否定する。それもその筈、こういった縛り方は、見た目よりも痛みはない。あるとすれば手首を締めつける縄の痛みだけで、あとは全然感じないはずだ。

正座させたままでカメラをとりあげ、シャッターを切る。パッとまばゆい閃光がほと走り、敬子の肩のあたりがピクツと揺れる。

さあスタートである。私はファインダーを覗きこみアングルを捜す。アングルがきまるとシャッターを押す。巻き上げレバーを操作してフィルムの駒を送る。

コマネズミのように私は動いた。全身像、半身像、更にアップポーズ、前後左右、あらゆるアングルを捜し出しては閃光を走らす。ふと見ると、編集長はあつにとられた目付

きで私を凝視していた。あまりもの私の撮影ぶりに驚愕してしまった様子であった。

例えば、単なるポートレートとか、仮りにヌード撮影にしろ、カメラマンの指示通りにモデルの方が動いてくれる。ところが、この種の撮影だけは、残念なことにモデルが動けなくなる条件が多いために、カメラマンの方が動く機会が多い。

表情の指示は出来る。

「眼を閉じて——」

「横を向いて——」

「口を少し開いて——」



「苦しそうに顔をしかめて——」
とかである。

しかし、あまり作りものであっては面白味



も半減してしまう。よく、グラビア等で見かけるのだが、うっとりとしてあるものや、よくあんなに縛られてあんな表情をして——と思われるものがある。私の友人に掠陽児と言う男がいる。彼の画くSM画は多くのファ

ンがいる。文字通り嚴重な緊縛した女体画で、恐らく女性がこの様なポーズをとらされたら、気も狂わんばかりの羞恥を覚えるであろう——という絵が多い。しかも、それでいて彼の画く女性はすべて美女である。

友人の中で、もう一人SM画の大家多貫欣がいる。ところが、彼の画く女性はブスばかりである。

或る時私は多貫欣に言った。

「どうして君の画く絵ではブスばかりなんだろう——」

すると、彼は、

「いや、ボクは美人を画いてるつもりなんだけど、見た人はブスだって言うのだ」

「……？」

「結局こういうことなんだ。どんな美人でも、嚴重に縛られて息も出来ない状態だと、まずは顔をしかめ苦痛の表情になる。とボクは説明することにしてるんだが、見る人は一断面しか見ない場合が多いらしい——」

なるほど——と私は思ったものだ。リアルに表現しようとするれば確かにそうかもしれない。

掠陽児の場合、私にこう言った事がある。

「SMの場合、ボクはある階級の人達の遊び



だと思ふんだ。リアリスティックに表現した場合、読者は承知しないんだなあ。ボクの画だと、読者は可愛い娘ちゃんを望んでいる。それが、エロ写真なんかで、有名女優の顔のすげ代えが結構満足されるように、ボクの絵はボク自身の物ではなくって、沢山のファンの夢を代弁しているようなものだ——」

掠陽児は優れた画家である。これも矢張り

私の友人である油絵の中堅画家が、彼の画を見て目をみはったことがあった。
結局は観点の相異であるが、多貫欣の行き方と言うか考え方と、掠陽児の考え方は、同じ次元から発生しながらも、少々異なるを見せるのは、仕方のないことだと思う。
ただ、この雑誌の場合は、写真や記事は比較的リアルにしたいというのが編集長の方針であるが。

逆海老に全身痙攣！

牧本敬子は素直であった。ポーズを変えよ

うとして身体に手を掛けると、すぐに私の意向を察すると自分から動くとうとする。その点、私としては楽であったが、何か割り切れない感情も残ることも事実だった。

横倒しにしてシャッターを切る。やがて、うつ伏せにして幾枚かのフィルムを消費してから、抱き起こして胡座坐りにさせる。

いつみても胡座をかいた女性はいいものである。——と言っても、視覚的にいいのである、よく聞く言葉だが、

「何です、女のくせに、そんなはしたない坐

り方をして——」

実際、女性の——しかも若い女性の胡座姿は、自分の身寄りの者にはさせたくない姿である。それだけに、他の女性のこうした姿は背徳的陰湿な悦びを男性に与える。

下肢を一杯に広げたこの坐り方は、男性にデルタ地帯の模様を勝手に想像させ、ニタニタとした思いにさせてしまうわけだ。

ともあれ、胡座ポーズで閃光を走らせると、足首を綿ロープで三巻きか四巻きさせ、足を閉じられなくしてしまう。こうしておく、女性自身もう自分では足を閉じることが出来

ないといった心理現象が働らき、あとは何をされても抵抗が出来ないんだと被害本能が働らく。

余談であるが、よく女性と話をしていると、意外に女性には被強姦願望があることがわかる。男性ばかりかと思っていた私は、矢張り人間はすべて同じなんだなあ———と想ったりしたものだ。

だから、開脚した状態で足首を固定させてしまうと、願望の充足感と同時に未知の恐怖感が入り混ってしまって、不可思議な心理状態になってしまうそうである。

牧本敬子は意外と平然としていた。むろん下半身の防御は完全であつたからだとは思ふが、私としては多少の羞恥の表情が欲しいなあと思うし、また、よ

うしそれならば、と意を決して次なるポーズに取りかかる。

床の上にうつ伏せに寝かせると、取りあげた縄を素早く足首の縄に連結させる。縄尻を後手首の縄に通してぐつと引く。



「あ、一寸待って下さい」いきなり編集長が声をかける。

「は———何でしょうか？」

と私が訊くと、

「そのポーズ、いただきだなあ———六本木さんの手が入っているところ………ボクが撮りますから、そのまま置いて下さい」

「……………」

黙ってうなづく、編集長はカメラを取りあげてシャッターを押した。

「六本木さん、申し訳ないんですが、縄尻を強く引きあげて呉れませんか………そう、吊りあげるように———」

「こうですか———!!」

私は首をあげず平然としている敬子に、いささか加虐的になりたい欲求が起こっていた。いきなり縄を手首に巻いて滑りをとめると、力一杯持ち上げるようにした。

「ああ———っ、ああ！」

思いがけない成り行きに、牧本敬子は思わず悲鳴をあげた。それもそうだ。比較的ゆる目に縄掛けを行っていたのだから、見た目にはきびしくとも、当人はさほどの苦痛は味わっていないはずであつたから。

それが、いきなり強く縄を引かれると、逆



海老の姿態にされている身体が、更に足首と手首、それに関連して身体の各部が嫌応なく縄のたわみがなくなり、かなりの圧迫を与えることになる。

「ハイ、そのまま止めて——」

「こちらを向いて……」

編集長の冷静な声は、この際雰囲気に関わ

なかったけれども……

「結構です——」

編集長の声に力をゆるめると、敬子の肩のあたりが大きくゆれ、荒い息遣いの様子がよくわかる。

「痛かったかい？」

「……………」

抱き起こしながらいたわりの声をかけると、乱れた髪を横に振って敬子は大丈夫の意を表わした。可憐な仕草であった。

手足を結んだ縄あとが、思ったより強く肌に残っているのが痛々しい。さすってやりたい思いが私を襲ったが、冷静な編集長の視線がなぜか気羞しく、私は次の行動に移ることにした。

胡座縛りのままであったから、そのまま足首の縄に別の縄を二つ折りにして通すと、四本取りにして、各二本づつを頸部を分けて背後にたらす。

彼女の後に位置すると、縄を持って敬子の背に膝頭をかける。そうして上から押さえこむようにしてゆき、縄を手繰ってゆく。

「あゝ、痛いわ。もっとやさしくして……」
呻くように敬子は私に訴えたが、取り合わずグイグイと身体を曲げさせる。

「もう駄目ノ苦しいわ!!」

「ようし、わかった、じゃあ、このへんで」
言いながらも幾分更に身体を曲げさせて首の後側で花結びに縄を結ぶ。意外と柔らかい牧本敬子の身体は、頭が床に着かんばかりになっていた。

編集長は黙ったままシャッターを押してい

る。縛り終った私は、矢庭にカメラを取り上げると、凄絶極まりない女体めがけて閃光を放ちはじめた。

「顔をあげてごらん——」

無理を承知であった。それでも牧本敬子は必死に命令を守るべく、私の意に添おうと努力している。

私のSの血は凄まじい勢いで流れ始めているのがよくわかる。

決して自分では採れないポーズだった。腰を支点にした二つ折りの姿勢——身動きはおろか呼吸ですら充分にとれない姿——何をされても抵抗ひとつ出来ず、また、何でもすることが出来る。

無惨であればある程、S的な欲求は充足され、Mの血の人はかなり悦虐の巷をさまようことの出来る責め……。

横倒しにしても、上向けにしても思いのままである。

いっそのこと、足でけころがしてマリの様にしたい気もする。

さすがそこまでは出来ない。しかし、それに近い動きは充分にさせ、縦横からアングルをきめる。

平然としている筈の牧本敬子だったが、い

つしか顔面は紅潮していたし、姿勢がそうだけに、息苦しいらしく、スエーターに覆われ

た腹の部分も、胸の隆起も、なだらかな肩の線もこきざみな運動を続けていた。

夜の静寂を破り放尿

「あのう—— おトイレは？……」

牧本敬子が編集長に訊いた。

「えーと……」

考えこんだ風でうなり声に似た声を挙げた

編集長は、

「うーむ、実はこの点なんですよ。ボクが悩んでいたのは」

「—— と言うと……」

私の問いに言葉を続けて、

「この離れの欠点がこれなんです—— 実はトイレが無いんです。—— 물론母屋おもやの方にはあるんですがね。作った人がその必要性を認めなかったらしいんですね……」

「すると——」

「困りましたねエ。母屋の人達は寝こんじゃってるし、わざわざ起こしたんでは申し訳ないからなあ——」

編集長は考えこんでいるのを見て、私は敬子に訊いた。

「小の方？それとも大の方——？」

とうとう私の問いに一瞬、戸迷いを見せ



た敬子だったが、

「…………小の方です…………」

蚊の鳴くような声で言うのを受けて、

「それじゃあ、どうだろう。表に出てしちゃったら。こんな真夜中だし、人通りも全然ないはずだと思うけど…………」

「…………でも…………」

若い女性である牧本敬子にとっては、そう簡単にすませられる性質のものではないらしく、言いよどむ。

「かまわないじゃないか、身体にためとくと毒だよ。早いとこすましちゃったら」

私のうながしは無責任であった。百も承知で言うのだから仕末が悪い。これも仕事の性格上エキセントリックな気分になるのは、誰でもそうらしいのだが…………

「——そうね、仕方ないわ。そうするよりどうすることも出来ないんですものね」

現代娘らしい割り切り方で、すっと立ち上るのに、編集長は慌てて、

「いくら何ていったって道路じゃ困るでしょう。…………そうだ。この離れの脇にしちゃってかまわない」

「脇ですか？」

私がそう訊くと、編集長は、

「夜だからわからないでしょうけどこの離れと母屋とはつながっていないんです。いずれは廊下で結ぶつもりだったんですが、そのままになってしまったんでしょう。ですから、母屋と離れの間は三尺(約九〇センチ)位あいているんです。そのあいている部分ならかまわないでしょう」

「では、失礼——」

編集長と私との話を交互に訊いていた敬子は、我慢の限界に来ていたのだろう、そくさと立ち上ると、離れ用の下駄を突っかけて出て行った。

編集長と私は、申し合わせたように沈黙していた。そして外の出来事に神経をこらしていた。

深夜である。いかに都合とはいえ、物音は時折走る車の音しかない。それすらも忘れた

頃にしか聞こえてこない。従って耳を澄ませば、彼女の一挙一動が手に取るようにわかる。

衣ずれの音は、恐らくズボンを下ろしパンティをずり下げた音だろう。しゃがみこんだのか土のきしみの音が聞える。

やがて、ジョーッと時ならぬ物音が起こり始めた。きせずして、私と編集長は顔を見合わせていた。

夜の静寂の中に、かすかに聞える異音。おそろくは凄まじい奔流となっているであろう。

そして、何事もなかった様に大地に吸い込まれてゆくだろう。

生温たかい液体は、明朝になって小さな水たまりになっているかもしれない。けれど、その水たまりを、どうして出来たかについて調べようとは思わないだろう。

再びポーズを求める

「あーあ、さっぱりしちゃったわ——」

相当長いこと我慢をしていたのだろう。なるほど晴れやかな顔になっていた。

かなり広い部屋だったが、時間の経過と共に

に室内は温度も上昇し、適温を越えているらしい。半ば無意識に上着を脱ぎ、次なる構図に移行することにした。

「さっぱりした処で、すぐに次に掛かるけど



いいかな——」

「ハイ……」

牧本敬子は素直に答えると、縄をしごく私の前に来て坐り、縛り易いように両手を背後に組む。

「ようし、それじゃあ今度は少し強いぞ」

そう言ってみたが、敬子にはさしたる反応はない。ハードな事には充分に耐えられる自信があるのだろう。

「うむ……」

一人でうなづいた形で、私は敬子の両手に縄を巻いてから、思いきり頸部近くまで持ち上げてやろうと思った。両手を交互させ、首近くまで引き上げた後手縛りは、非常に見た目には緊縛感が溢れてみえる。キッチリとした

縄目は、さほど嚴重な縄掛けなどなくとも、充分な拘束に役立つ。こうしておけば、まず縄のたるみなどは考えられない。

余談ながらプレイの最中の縄のゆるみほど白けることはない。特に私の場合はそのである。別に解けてしまったら、プレイになり得ないという訳ではないのだが、キッチリ縛ったつもりでも、最初の頃は、

「あら、解けちゃったわ——」

なんて言って、手をヒョイと見せられると言いいれぬ気になったものである。今なら、まずは減多なことでは解けるはずがない。それどころか、時間が経つにつれて締って来る縛り方になっているらしい。

ともあれ——敬子は柔軟な体を持っていた。縄尻を引くと、苦もなく両手が首に近づいてゆく。びっくりするほどであった。

試みに、

「身体、柔らかいねエ。高校時代、体操でもやっていたの？」

と訊くと、

「学校ときは全然やってなかったんです。でも、この頃お友達に言われて、アパートでしょっ中柔軟体操をやってるの。だから、このくらいは平気——」

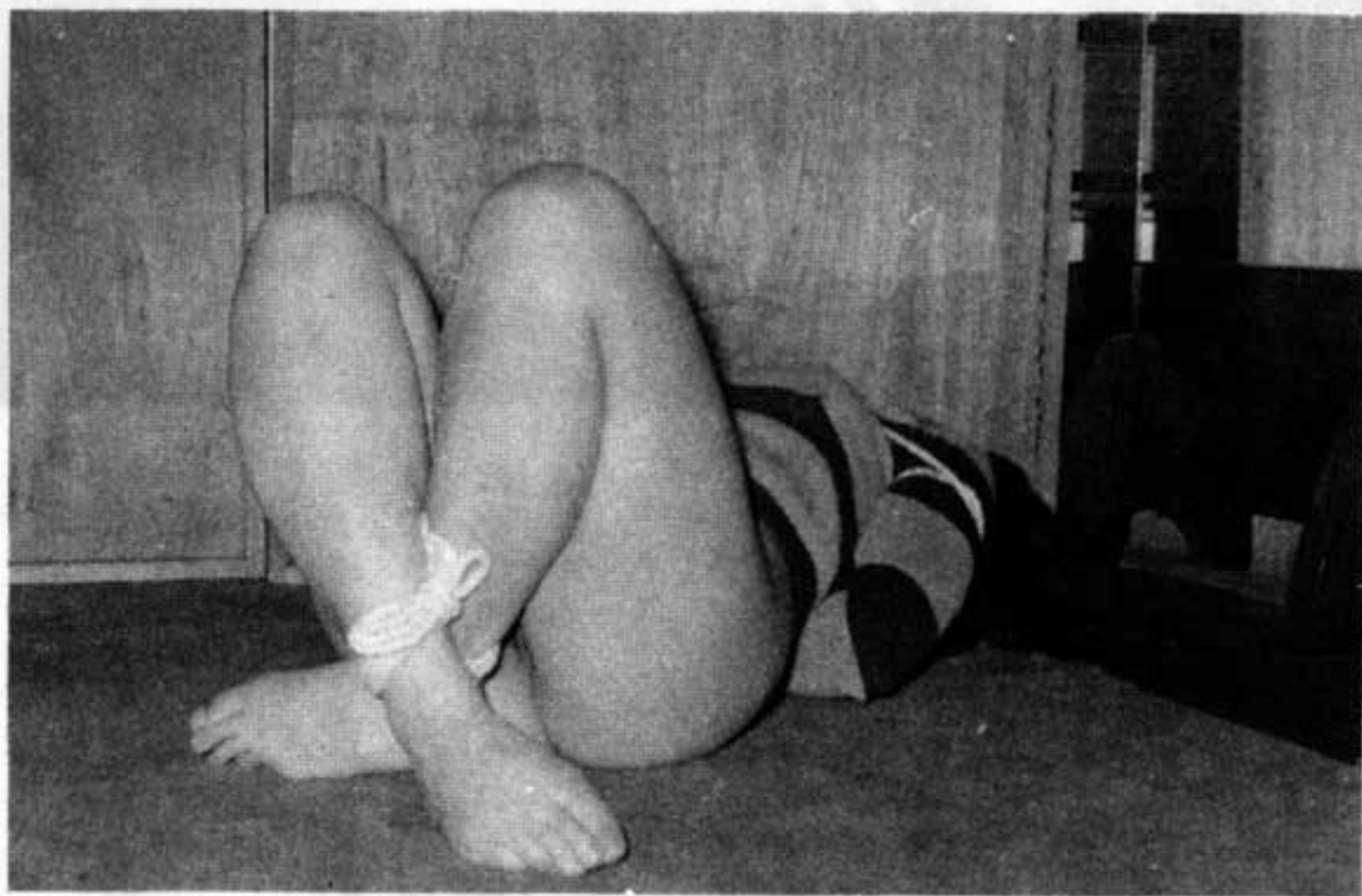
それにしては少々肥満ぎみであった。腰の張り具合は女性としては当然としても、ウエストは、どうひい気目に見ても細いとか、恰好がいいとは言えない。悪く言えば、ずん胴、と言えそうだった。

敬子を立ち上らせ、私の手はスラックスの留めボタンに掛かる。ファスナーも一気に引き下ろすと、予想通りウエストのあたりがムックリと盛り上り、圧さえつけられていた肉がせせり出て、明らかな肥満を物語っている。

ぱんと張った腰からスラックスを剥がすと、こげ茶色のパンティストッキングに覆われた下肢が現われた。当然スケスケである腰のあたり、秘部を覆う薄いパンティはピンク色である。

太目とは言え、目を見張る量感に充ちた下肢であった。逞しい太腿、膝から下はスポーツ選手のそれと比較にはならないが、矢張り若い女性さながらの曲線の乱舞であった。

いくばくかの躊躇のち、私の手は牧本敬子の腰にかゝる。反射的にあがらう敬子だったが、かまわず腰に喰い込んでいる布地に指をこじ入れる。弾力性のある素肌が掌に感じられる。柔らかくほどよく締った肌である。すうっと力を入れてずり下ろす。室温のた



めか興奮のためかは定かではないが、恐らくはわずかな乍らも体液の泌み出たもののためか、パンティと素肌が密着したようになっていて、ピタリと張りついた感じである。

熱い吐息が敬子の口元から流れるのが感じられる。容赦なく剥ぎおろしつつ、ふと私は

三角州地帯のあたりで手を止めた。叢の露われる寸前であった。

甘い芳香が漂よい、双臀はくっきりと全貌を見せかけ、もはや少しの体の動きでも布地はずり落ちる様相を呈している。

完全露出の直前も妙にエロを覚えさせるものである。また、女性にとっても、全部剥ぎとられてしまうより、複雑な感情が湧くのだと言う。直立の姿のまま何枚かのフィルムを消着させてゆく。

編集長も、心なしか顔を紅潮させているのを尻目に、様々なアングルを求める私。されるがままで、どうすることも出来ない敬子も、ともすればうつ向き勝ちになる。

こうした雰囲気は、S的要素を持つ者にはたまらない魅力である筈だ。消え入りなにする風情——そんな表現が湧いてくる。

いつしか編集長もカメラを取りあげていた。夜更けの耽美者は、時間を忘れていた。

(つづく)

SUN&MOON通信欄

同好会への誘い

SM愛好者の皆様、わが栃木県にS研グループを作ろうではありませんか！

栃木県にS研を作ろう

ります。

初回のみ、編集部回送にてお願いします。

必ず、返事さしあげます。

宇都宮・恵寿夫

SM雑誌やグループ・プレイやら相互理解を深め、充実したSM人生を送ろうではありませんか！

入会希望の方、または発起人になっていただける方、私にお手紙下さい。

会の運営方針や役員選出など相談したく思います。

SMに関心のある方で正業についていることを入会の原則にします。

なお、個人の秘密はかたく守



浣腸への誘い

★第一回目の通信に関しては、『日月舎』あてにお送り下さい。

責任もって恵寿夫氏に回送いたします。

浣腸の特集をぜひ!!

東京都・千代田区の平山連浣氏からお手紙をいただきました。

通信文が余りにも長いので、全文を載せるわけにまいりません

ので、勝手ですが、編集部で要約させていただきます。

「……本誌で、浣腸という最も肝心なことを忘れてるのが、最大のミスだ。今日のSMの主流は浣腸といわれ、SMブームを支えているのも浣腸だ。……次号は必ず半分強は浣腸写真をのせ、あるいは浣腸座談会、浣腸告白、浣腸カメラレポート、浣腸体験談をより豊富に扱ってほしい」。

★お見うけするところ、強烈な

浣腸ファンのようです。同好の方もいらっしゃるかとも思いますが、あるいは反対意見もある

かと思えます。どしどしお使い下さい。

お便りは「日月舎」あてに

編集後記

お堅いSM誌の前評判で発売が危ぶまれた弊誌も店頭に並ぶと目敏い読者の御購入にあづかり好評を得て、たちまち在庫品薄となりました。

直後、書状、電話で激励声援が多数寄せられ、スタッフ一同心から感謝致しております。その御支援に依って一層の価値ある記事の充実をと企図致しましたが、二号はいかがでしたでしょうか。ぜひ、御読後感をおきかせください。

創刊一号の反響は紙幅の都合で大多数を割愛させて頂くしかありませんでした。そればかりではなく「妊婦緊縛」の続編、その他も次号に譲るなど、好評

ゆえに誌面のやりくりが大変でした。

記事内容について、「本当らしいが本当かな」とお疑いの向きがおりますが、そこが好事家たちの愉快な生活で、弊紙の、かくし味・ともいえる特異な点です。個人が悦に入っていることを、なんとか語らせ引出そうとするのですから、電話一本で原稿依頼する出版社の仕事と違い、寄せられた原稿には「人の知恵」が窺われます。知恵には真実がかくされていますから御推断は読者各位におまかせするしかありません。

現在は「創刊の序」の中で記述しましたように私達が交遊し

ている、仲間が協力し合ってくれていますが、読者の前に立ちほだかっているものではありません。積極的な御投稿・寄稿があれば予定原稿と変えてでも発表させていただきます。

SMカメラハント、またはレポートものは「語り」の型が定着したきらいがありました。葛西氏の軽妙さは他に類をみません。新風を吹き込むライターの出現を望んでいます。

「奇ク」誌が消えて、二年目の春です。その空白を癒すように「太陽と月」の本誌を御購入くださった方々の声が届きます。

編集代表人を指して、「一体あんたは誰なの」といぶかしがる方もおられますが、そんな個々のやりとりの中から、「おぬし、やるな」と選んだO氏が「あの人どうしているかな」と思われる「代理妻、佐野みさ子」に挑戦します。「奇ク」誌上で長らく誌上交歓を呼びかけてい

ながら、R派氏やT氏に先きを越され無念がっていた中宮栄氏が全く独自に夫人の実在を探り出して交渉した努力の結果ですが、取材はO氏に一任されました。予告の「写真集」はO氏の協力に負うところ大です。

★この欄を読者同志の通信欄に育てていきたいと思ひます。

交歓プレイ・SMフォートの交換などで希望の方は、どしどしお便りを下さい。返信については「日月舎」が取次ぎします。

昭和五十二年六月一日発行

SUN & MOON

編集兼発行人 世田介一

発行所 日月舎

東京都杉並区天沼三二二二一三

二一六七

電話〇三―三九三―四一五九

発行元 エド・プロダクツ

東京都千代田区猿樂町二一四二二

電話〇三―二九二―八七八一

限定三〇〇〇部